県単農道整備事業(ふるさと)大野田地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

―浅科村内―

駒込遺跡

2001

長野県佐久地方事務所
長野県埋蔵文化財センター

県単農道整備事業（ふるさと）大野田地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

―浅科村内―

駒込遺跡

2001

長野県佐久地方事務所
長野県埋蔵文化財センター

駒込遺跡（1：4,600）（協同測量社　平成10年11月3日撮影）

駒込遺跡から佐久平をのぞむ

胸込遺跡出土　縄文土器

V18グリッド出土縄文土器

V17グリッド出土縄文土器

序

本書は、平成10年度および11年度に県単農道整備事業（ふるさと）大野田地区に伴い実施された駒込遺跡の発掘調査報告書であります。報告書はその成果を記録として保存し、広く一般に周知することを目的としています。

浅科村は佐久平を北流する千曲川と東西に走る中山道がちょうど交差するという交通の要衝であります。御牧原台地の南側に位置し、「駒寄」「御馬寄」などの古代・中世の牧に関する地名も多く残されており、往時の隆盛を偲ぶこともできます。

駒込遺跡は千曲川の支流布施川と女石川が合する地点、御牧原台地に続く緩斜面に立地しています。駒込という地字も往時の牧に関連する地名とも考えられますが、本遺跡では直接的に牧に関連する資料は出土しませんでした。しかし、古代から中世の遺構や遺物が検出され、あるいは牧を支えていた人々の暮らしの一端を発掘できたのかもしれません。

また、量的には少ないですが今から1700年から1500年ほど前の古墳時代の遺物も検出されたほか、今から3500年ほど前の縄文時代の住居跡や土器や石器も大量に発見され、牧成立以前にも当地に人々の暮らしが営まれていたことが、ますますはっきりとして来ました。

今後ともこうした発掘調査と報告書の刊行を通して、地域社会の歴史の一端が明らかにされ、また今回発掘された資料が歴史的な史料と生かされることを期待します。

また、最後となりましたが、発掘調査から整理作業および報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた長野県佐久地方事務所、浅科村・同教育委員会などの関係機関、直接ご指導・ご助言を頂いた長野県教育委員会文化財・生涯学習課、また発掘・整理作業に携わっていただいた多くの方々に敬意と感謝を表します。

平成13年2月23日

（財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター

所長　佐久間鉄四郎

例　言

1　本書は県単農道整備事業（ふるさと）大野田地区建設工事にかかわる長野県北佐久郡浅科村所在の駒込遺跡の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は県佐久地方事務所の委託を受けた長野県教育委員会が、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下県埋蔵文化財センター）に委託して実施したものである。
3　整理作業は、県埋蔵文化財センターで実施した。
4　本書で使用した地図は県佐久地方事務所作成の県単農道整備事業大野田地区平面図(1/500)、浅科村発行浅科村図（1/10,000）、浅科村教育委員会発行遺跡分布図（1/20,000）、建設省（現国土交通省）国土地理院発行の地形図「小諸」(1/50,000）などをもとに作成および複写した。
5　委託関係では、航空写真・測量を株式会社ユーアール測量に、地形図の作成および一部航空写真を株式会社協同測量社に依頼した。
6　発掘調査および整理作業の分担などは本書第1章に一括掲載してある。
7　本書の編集ならびに執筆は、古墳時代以降の遺物については調査研究員宇賀神誠司が、それ以外を調査研究員川崎　保が調査一課長百瀬長秀の指導のもとに行った。
8　縄文土器は綿田弘実、水沢教子、寺内隆夫、桜井秀雄、廣瀬昭弘の各氏、古代末の土師器・陶器は鳥羽英継氏、中近世の土器・陶磁器は市川隆之氏、製鉄関連遺物については柳沢　亮氏にご教示頂いた。
9　本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は浅科村教育委員会が保管している。

凡　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は原則として以下の通りである。ただし、地形図・調査範囲図、遺構配置図などは任意である。

1）主な遺構実測図

竪穴住居跡・建物跡、掘立柱建物跡1:60　住居内施設（炉・カマド）1:30　土坑1:60

2）主な遺物実測図

縄文土器および土器拓影　1：3　　土製品　1：3　　土師器、須恵器、陶磁器　1：4

小型剥片石器　2：3　　大型剥片石器　1：3　　礫素材石器　1：3～1：6

銭貨拓影　1：1

2　遺物写真の縮尺は以下のとおり

縄文土器、土製品　1：4～1：6　　土師器甕　1：4　　土師器坏　1：2

小型剥片石器　1：1　打製石斧・磨石など　1：3　石鉢・石臼　1：4～1：6

五輪塔1：6　銭貨　2：3　製鉄関連資料　2：3

3　遺構の番号は、次のように付けてある。

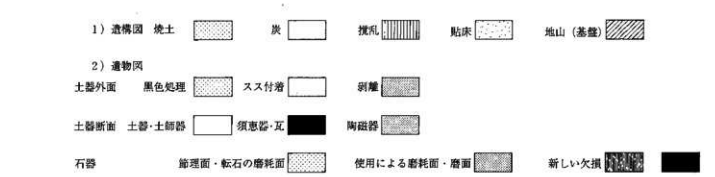
竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝などの遺構は1から始まる。ただし、土坑に関しては、調査当初柱穴と想定されるものを、ピット（PあるいはPit）、土坑（竪穴）と考えられるものをSKとして区別し、それぞれグリッドごとに1から始まる通し番号を付けている。注記はこの方法に従っている。しかし、こうした方式は県埋蔵文化財センターでは一般的に行われていないこと、柱穴と土坑の峻別が難しいことから、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの柱穴として、認識できるものにはやむを得ずピット（PあるいはPit）を冠したが、それ以外の小土坑は、すべてSKとして遺跡を通しで001番から3桁数字の番号を振ることにした。（それ以前のグリッドごとにつけているSK番号は1番からついている）

現地での呼称および注記と本報告書内での名称の対応は第7章の一覧表を参照されたい。

4　遺構の重複（切り合い）

原則としては、上端の線（上場線）のみを実線で示し、新しい遺構の方が、途切れることなく完結している。

5　実測図中のスクリーントーンは以下の事象を示している。



本 文 目 次

巻頭図版
序
例言
凡例
本文目次
挿図目次
挿表目次
写真図版

第1章　序説 …… 1
　第1節　調査の経過 …… 1
　第2節　調査の方法 …… 2
第2章　遺跡の環境 …… 5
　第1節　地形・地質的環境 …… 5
　第2節　歴史的環境 …… 6
第3章　遺跡と調査の概要 …… 10
　第1節　遺跡の概要 …… 10
　第2節　調査範囲と経過 …… 13
　第3節　基本層序 …… 17
第4章　遺構およびそれに伴う土器・陶磁器 …… 18
　第1節　縄文時代 …… 18
　第2節　古墳時代 …… 24
　第3節　古代 …… 28
　第4節　中世以降 …… 45
第5章　遺構に伴わない土器・陶磁器 …… 51
　第1節　縄文時代 …… 51
　第2節　古墳時代以降 …… 73
第6章　石器・石製品・金属製品ほか …… 75
　第1節　縄文時代の石器 …… 75
　第2節　古墳時代から中近世の石製品 …… 88
　第3節　銭貨 …… 88
　第4節　鉄滓 …… 92
第7章　付表 …… 93
第8章　考察　―鱗状短沈線文土器の型式学的分析― …… 111
　第1節　はじめに …… 111
　第2節　研究略史 …… 111
　第3節　鱗状短沈線文土器の編年上の位置 …… 112
　第4節　「郷土式土器」は成り立つか …… 122
第9章　成果と課題 …… 129
　第1節　はじめに …… 129
　第2節　駒込遺跡の各時代・時期の様相 …… 129
　第3節　今後の課題 …… 131
第10章　結語 …… 132

挿図目次

第1図　地区割付・グリット
第2図　駒込遺跡位置
第3図　遺跡周辺表層地質
第4図　浅科村遺跡分布
第5図　地形調査範囲（1）
第6図　地形調査範囲（2）
第7図　遺構配置（1）
第8図　遺構配置（2）
第9図　遺構検出面地形
第10図　基本土層
第11図　SB04
第12図　SB04出土土器
第13図　SB05
第14図　SB11
第15図　SB11出土土器
第16図　SB03
第17図　SB10
第18図　SB03・SB10・SK074出土土器
第19図　SB01・SB02・SB07・SB08・SB09
第20図　SB06
第21図　SB06
第22図　SB12・SB13
第23図　SB01・SB06・SB09・SK067出土土器
第24図　ST02・ST03
第25図　ST04・ST05
第26図　ST06
第27図　ST07・ST10
第28図　ST08
第29図　ST09
第30図　ST11
第31図　縄文・古墳・古代のSK
第32図　中世の土坑
第33図　中世の土坑出土土器
第34図　SE01
第35図　SE01出土遺物
第36図　SE02
第37図　SD01
第38図　SD01出土土器
第39図　SD02
第40図　SD02出土土器
第41図　SD03
第42図　SD03出土土器
第43図　中期後葉曽利式系・唐草文系土器
第44図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）1
第45図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）2
第46図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）3
第47図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）4
第48図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）5
第49図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）6
第50図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）7
第51図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）8
第52図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）9
第53図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）10
第54図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）11
第55図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）12
第56図　中期後葉Ⅱ期（Ⅱ群土器）1
第57図　中期後葉Ⅱ期（Ⅱ群土器）2
第58図　中期後葉Ⅱ期（Ⅱ群土器）3
第59図　中期後葉Ⅱ期（Ⅱ群土器）4
第60図　浅鉢
第61図　後期・底部
第62図　土偶・土製品
第63図　古墳時代以降の土器・陶磁器
第64図　石鏃・石錐など剥片石器
第65図　剥片石器・石核
第66図　打製石斧1
第67図　打製石斧2
第68図　打製石斧3
第69図　打製石斧4
第70図　打製石斧5
第71図　打製石斧6
第72図　打製石斧7
第73図　打製石斧8
第74図　打製石斧9
第75図　打製石斧10
第76図　打製石斧11
第77図　磨製石斧・磨石類
第78図　砥石・磨石
第79図　石鉢・石臼・五輪塔
第80図　銭貨
第81図　駒込遺跡出土鱗状短沈線文土器の組成
第82図　郷土遺跡3段階
第83図　郷土遺跡4～6段階
第84図　郷土遺跡6～8段階
第85図　郷土遺跡7～10段階
第86図　東信地方鱗状短沈線文土器分布

挿表目次

第1表　焼物観察表
第2表　石器観察表
第3表　銭貨一覧
第4表　土坑一覧
第5表　佐久地方縄文時代中期後葉編年
第6表　東信地方鱗状短沈線文土器出土遺跡一覧

写真図版

第1章　序説

第1節　調査の経過

1　発掘調査委託契約

長野県佐久地方事務所（以下県佐久地方事務所）は県道（主要地方道）佐久・小諸線と県道八幡小諸線に千曲川を渡って結ぶ県単農道大野田地区の建設を計画し、平成6年度から整備に着手した。建設予定地内に周知の遺跡として存在していた駒込遺跡は、現況は宅地と畑地であったが、昭和40年代の住宅建築の際に多数の縄文土器が出土し、長野県教育委員会（以下県教委）の事前の踏査で、黒曜石が採集されたほか、事業地に隣接して多数の中世に遡る五輪塔があり、中世の遺構の存在も予想された。また、事業地より一段上位の段丘上においても、古代の須恵器が多数採取され、当該期の集落の存在も予想された。よって、県佐久地方事務所、県教委、浅科村教育委員会が遺跡の保護について協議を重ねたが、設計変更は難しく、発掘調査を実施し、記録保存をはかることになった。

遺跡の範囲・内容が不明確であるので試掘調査が必要となったが、浅科村教委では体制が整わないため、県教委が試掘調査を平成9年2月3日から4日にかけて実施した。縄文時代の竪穴住居跡をはじめ、方形の竪穴住居跡や柱穴、井戸などが検出された。よって試掘トレンチをいれた付近の4400㎡の調査が必要とされた（長野県教育委員会1999）。

さらに、以上の試掘調査の結果を受け、県教委、浅科村教委、長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）の関係機関が協議を重ね、県埋文センターが発掘調査を実施し、記録保存の処置をとることになった。平成10年度から11年度にかけて、試掘調査ならびに本調査を行い。報告書刊行に向けての整理作業については平成11年度に、印刷関連業務については平成12年度に行った。

長野県教育委員会1999『大規模開発事業地内遺跡－遺跡詳細分布調査　2－』

2　調査体制

（1）調査組織

平成10年度から12年度にかけての発掘調査および報告書刊行に向けての整理作業の体制は以下のとおり。

	平成10年度	平成11年度	平成12年度
理事長	吉村午良	吉村午良	吉村午良（10月25日まで）
			田中康夫（10月26日から）
所長	佐久間鉄四郎	佐久間鉄四郎	佐久間鉄四郎
副所長兼管理部長	山崎悦男	山崎悦男	春日光雄
管理部長補佐	宮島孝明	宮島孝明	宮島孝明
調査部長	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫
調査一課長	百瀬長秀	百瀬長秀	百瀬長秀
調査研究員	上田　真	川崎　保	川崎　保
	石原州一	上田　真	

（2）指導者・協力者

発掘調査および調査報告書刊行にあたり下記の方々・機関に大変お世話になりましたので、お名前をあげて謝意を表します。

有賀喜二　岩下文彦　坂詰秀一　坂本敏治　佐藤純一朗　高野守久　原　明芳　福島邦男　依田酒造雄
金井　靖　小諸北佐久シルバー人材センター

（3）発掘調査参加者および整理作業参加者

[発掘調査]井出き久子　井出春江　碓氷隆子　工藤松子　小泉とも枝　小泉政志　小泉やい　小平しづか
小林　茂　篠原浜子　土屋省吾　土屋なおい　橋本みさ子　峯村袈裟雄　宮沢志ゆく　村田　明
吉田三千男　依田キクヨ　依田幸江（以上小諸北佐久シルバー人材センター）大塚正枝　木村清美
[整理作業]西嶋洋子調査員、日向冨美子、竹内幸子、阿部高子、窪田　順、山本和美、今井博子、
臼田知子、丑山和江、中川麻由美、半田純子、柳沢るり子、渡辺恵美子、市川ちず子、滝沢みゆき
[樹脂による復元]憑永哲秀調査員、近藤朋子、浅井とし子、北島康子、日向冨美子、黒岩美枝、加藤周子

第2節　調査の方法

1　調査の方法

調査に当たっては、県埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に基づいて、遺跡ごとに調査計画を作成し、発掘調査を実施した。

（1）遺跡の名称と遺跡記号

遺跡名は、長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、発掘調査および整理作業の便宜上、アルファベット大文字3文字で遺跡を表記する遺跡記号を用いている。頭文字のDは長野県内を9地区に分割したうちの佐久地区を示すものであり、2番目・3番目の文字は遺跡名を省略したものである。各種台帳や遺物の注記記号にはこの記号を使用している。

遺跡名	読み方	遺跡記号
駒込遺跡	こまごめいせき	DKM

（2）遺構の名称と遺構記号

遺跡記号同様に各種台帳や遺物への注記は便宜的に遺構記号を用いている。

記号　種類・性格
SB　竪穴住居跡、竪穴建物跡
ST　掘立柱建物跡
SD　溝、堀、水路など帯状の落ち込み
SK　土坑（墓穴を含む、SB以外のすべての竪穴）
SE　井戸・石組み
SF　焼土集中
SQ　遺物集中個所
SX　性格不明遺構、その他

なお、凡例でも触れたが、SKとPitの関係は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの柱穴として認識できるものはピット（PitあるいはP）を冠している。ただし、それ以外の土坑に関しては、調査段階では柱穴と想定されるものを、ピット（PあるいはPit）、土坑（竪穴）と考えられるものをSKとして区別し、それぞ

れグリッドごとに1から始まる通し番号を付けている。遺物への注記はこの方法に従っている。しかし、こうした方式は県埋蔵文化財センターでは一般的に行われていないこと、柱穴と土坑の峻別が難しいことから、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの柱穴として、認識できるものにはピット（PあるいはPit）を冠したが、それ以外の小土坑は、すべてSKとして遺跡を通しで001番から3桁数字の番号を振ることにした。

現地での呼称および注記と本報告書内での名称の対応は第7章の土坑一覧表を参照されたい。

（3）調査区の設定（第1図）

イ　県埋蔵文化財センターの本来の方法では、調査区は、国土地理院の平面直角座標系第8系（X＝0.0000　Y＝0.0000）を基点に、200×200mの区画を設定し、大々地区とする。大々地区は調査範囲を覆う最小限度に留め、北西から南東にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字を用いる。本遺跡では一大々地区にすべて含まれるためローマ数字は省略した。

ロ　大々地区を40×40mの25区画に分割し、大地区とする。大地区は北西から南東へA～Yの順に計25個の大文字アルファベットを用いる。本遺跡ではR～Yを用いている。

ハ　大地区をさらに8×8mの25区画に分割し、中地区とする。中地区は北西から南東に1～25のアラビア数字を付け、遺構測量、遺物取り上げの基準線とする。

ニ　40×40mの大地区を400分割（8×8の中地区を16分割）する小地区という設定もあるが、駒込遺跡の性格上、とくに必要を認めなかったので、使用していない。

測量の実際は、公共水準点などの測量基準点を利用し、ベンチマークを設定した。遺構測量は原則的に中地区を割り付け線として、オートレベルを利用した簡易遣り方を基本的に用いている。

2　整理の方針と報告書の構成

整理は遺物台帳をまず作成し、洗浄、注記、遺物強化のための樹脂含浸作業、遺物接合などの基礎整理を行った上で、遺物を報告書に掲載する実測用遺物台帳（土器、石器、その他）、作業の進行を確認する台帳（整理台帳）を作成した。これらの台帳を本報告書に掲載することはできなかったが、本報告書の遺物観察表、遺構一覧表などはこれらの整理段階の台帳類と対応できるようになっている。

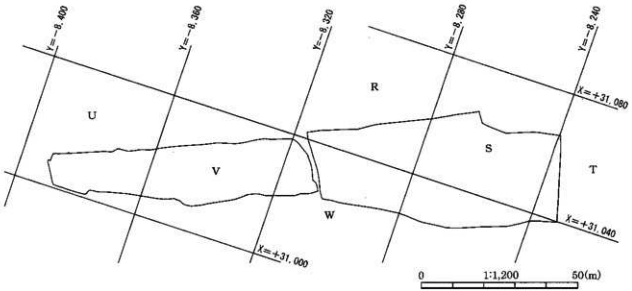
3　土器の硬度強化のための樹脂含浸作業について

整理作業当初、縄文土器が非常に脆弱で従来どおりセメダインやハイスーパーなどの接着剤で接合しても、土器自体が破損し、注記も剥落してしまうような状況であったので、水溶性樹脂ボンコートを含浸した。ボンコートでも強度は十分に発揮され、含浸作業後表面をふき取れば、乾燥後の土器表面の光沢も防ぐことができたが、樹脂含浸時に土器に含まれている空気が土器表面で気泡となったまま硬化してしまうこと、ボンコートはもともと含浸に時間がかかる上に、強度を増すためには樹脂水溶液の濃度を徐々に上げていかなければならないなどの難点が存在した。

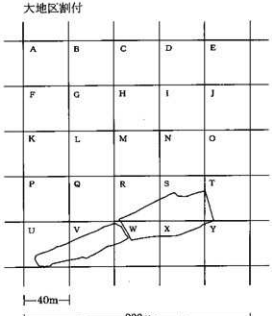
調査工程上、土器の樹脂含浸に多くの時間が本遺跡では割けないため、新たな素材を復元室の徳永哲秀調査員に相談し、①含浸速度が5分以内と速い。②水に溶かす必要はなく、濃度を上げる必要がないなどの利点があるシーラー（外壁下塗りに用いられる樹脂）を試用したところ、非常にスムースに土器の硬化を行うことができた。よって途中から土器の硬化にはシーラーは使用している。

シーラーもボンコート同様にそのまま放置すると表面が光ってしまうが、液から出したあと流水中で表面をすすげば、硬化後の土器表面の光沢を防ぐことができる。ただし、シーラーは硬化すると、有機溶剤にもほとんど溶けることがなく、シーラーで覆われた接着剤は剥がすのは非常に難しい。よって含浸前に接着剤で接合するのは避けたほうがよいので、この点は作業工程を注意する必要がある。

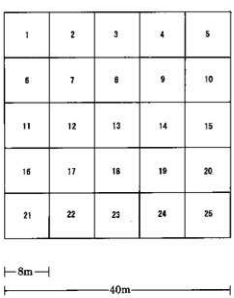
大地区



大地区割付



中地区割付

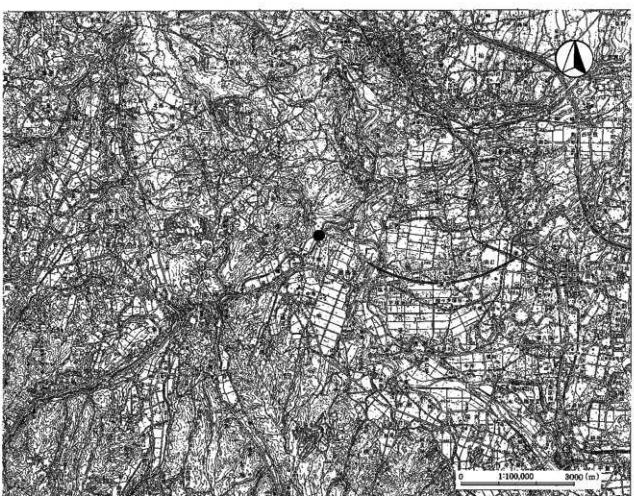


第1図　地区割付・グリッド

第2章　遺跡の環境

第1節　地形・地質的環境

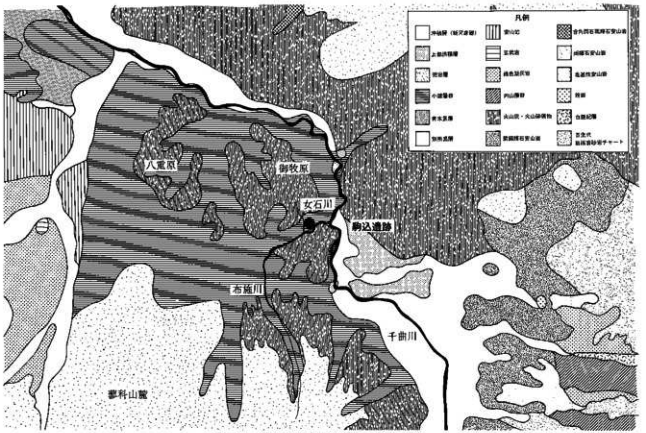
地形的には浅科村は、西から南にかけては蓼科山の裾野が、北側には御牧原台地が広がり、東側に千曲川が北流している。駒込遺跡を含む桑山地区は御牧原台地の南縁に位置していて、駒込遺跡はこの台地の緩斜面の先端、千曲川の支流布施川左岸の河岸段丘にかかる地点にあり、水系としては、浅科村は北流している千曲川が屈曲している部分にあたり、駒込遺跡は千曲川の左岸で、千曲川の支流布施川と女石川の合流する地点に位置しているとも言える（第2図）。



第2図　駒込遺跡位置

地質的には駒込遺跡は、第三系鮮新世から更新世にかかる小諸層群や完新世の火山灰・火山砕屑物からなる御牧原台地の南端の緩斜面に位置している（長野県地学会編1962）（日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会編1988）。遺跡の自体は、これらの基盤を覆った火山岩を多く含んだ堆積物上にある（第3図）。

長野県地学会編1962『20万分の1長野県地質図および同説明書』内外地図株式会社
日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会編1988『日本の地質中部地方Ⅰ』共立出版株式会社



第３図　遺跡周辺表層地質（１／200,000）

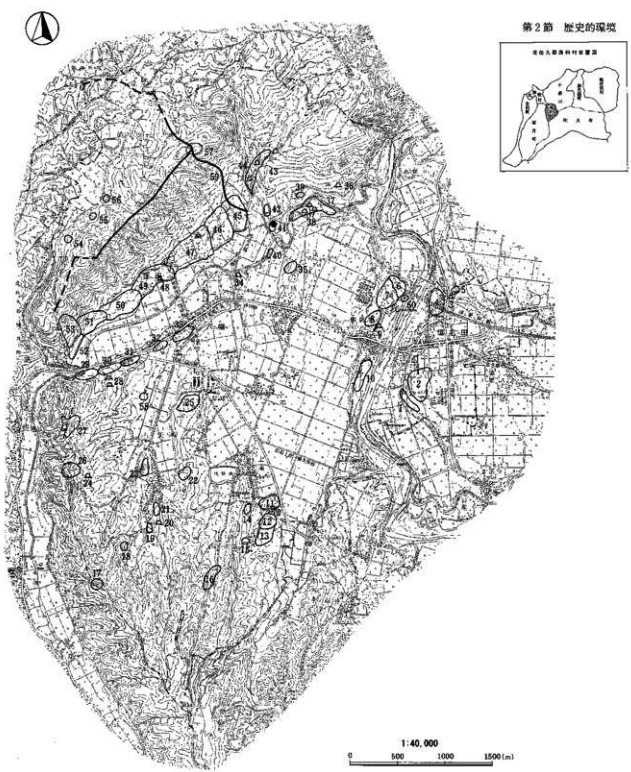
第２節　歴史的環境

浅科村における遺跡は、北部が御牧原台地、中部が布施川や千曲川に伴う河岸段丘、南部は蓼科山の末端の尾根や裾野上に立地している。駒込遺跡は中部の布施川流域の遺跡にあたる。以下時代順に駒込遺跡を巡る歴史的環境を概観したい。とくに煩雑となるので、以下明示しなかった部分もあるが、浅科村文化財保護委員会編1994『浅科村の文化財新版』浅科村教育委員会を参考とした。以下遺跡の番号はいずれも同書をもとに編集した第４図　浅科村遺跡分布と対応している。）

１　縄文時代

浅科村では旧石器時代の遺跡は未確認であるが、蓼科高原には黒曜石産地と多くの旧石器時代の遺跡が知られ、また隣接する望月町では協和西久保Ⅳ遺跡で槍先形尖頭器が出土している（森嶋・福島ほか1994）ので、浅科村にも当然当該期の遺跡が存在する可能性は高い。

縄文時代になると確実な遺跡がいくつか認められる。土合遺跡（37）で、縄文時代前期中葉の土坑が検出され、中平・田中島遺跡（６・７）では前期後葉から末の土器が出土しているので、少なくとも縄文時代前期には人間の生活が営まれていたことがわかる。本格的な集落が発達することがわかるのは、縄文時代中期に入ってからで、同じく土合遺跡から中期初頭五領ケ台式期の住居跡が検出されたほか、中平・田中島遺跡や砂原遺跡（４）でも遺構は検出されていないが、中期初頭から後期にかけての土器やそれに伴うと思われる打製石斧がかなりまとまって出土していて、これらの遺物出土地点周辺はもとより千曲川およびその支流による河岸段丘上の平坦部分に集落遺跡が展開していたことが考えられる（臼田・宇賀神ほ



1	舟久保遺跡	2	塩名田原遺跡	3	洞口古墳	4	砂原遺跡	5	五領城跡	6	中平遺跡
7	田中島遺跡	8	上の平遺跡	9	上平の塚古墳	10	神平遺跡	11	西連寺遺跡	12	一本松遺跡
13	打越窯址	14	葛蒲沢窯址	15	前林窯址	16	中荻久保遺跡	17	布施氏城跡	18	上山の神塚
19	雨の宮遺跡	20	宮脇古墳	21	上屋敷遺跡	22	天徳城跡	23	矢島城跡	24	炭尾根古墳
25	権見山遺跡	26	細久保城跡	27	虚空蔵城跡	28	兜山古墳	29	砂山遺跡	30	鳥久保遺跡
31	吹上遺跡	32	神明遺跡	33	宿遺跡	34	経塚古墳	35	植木辺窯址	36	火の雨塚古墳
37	土合遺跡	38	土合古墳群	39	久保畑古墳跡	40	山の田古墳	**41**	**駒込遺跡**	42	山梨遺跡
43	入の沢古墳群	44	入の沢遺跡	45	明神平遺跡	46	天神平遺跡	47	水地村遺跡	48	蓬田磨沢古墳
49	唐沢遺跡	50	中村遺跡	51	松ケ沢遺跡	52	寺田遺跡	53	西の平遺跡	54	尾尻遺跡
55	須釜原遺跡	56	樽沢窯址	57	富士見塚	58	大平遺跡	59	野馬除遺構	60	御馬寄古城跡

第4図　浅科村遺跡分布

か1998)。

２　弥生時代

弥生時代の遺跡は、塩名田原(２)、田中島(７)、上の平(８)、上屋敷(21)、入の沢(44)、明神平(45)、天神平(46)、須釜原(55)などで後期の箱清水式期の遺跡が分布調査で確認されているという(岡田・佐藤ほか1998)。縄文時代晩期から弥生時代中期に該当する遺跡はまだ見つかっていない。

３　古墳時代

古墳時代にはいると集落がいくつか認められる。前期初頭の竪穴住居跡が砂原遺跡(４)では数軒、中平・田中島遺跡(６・７)では竪穴住居跡３軒、方形周溝墓４基、土合遺跡(37)では竪穴住居跡が１軒検出されていて、千曲川の河岸段丘上に集落が発達したことがうかがえる（臼田・宇賀神ほか1998)。寺田遺跡(52)（寺島ほか1995）や砂原遺跡では東海西部の影響が見られる台付甕が出土している。しかし、いずれの遺跡も初頭以後集落が継続した形跡が認められず、一旦断絶する。しかし、その後砂原遺跡で古墳時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、再び集落が展開する。円頭柄頭、銀象眼八窓倒卵形鍔、馬具、金環・玉類が出土した土合１号墳(38)（畠山1970）（土屋1982)、頭椎柄頭が出土した久保畑古墳(39)（岡田・佐藤ほか1998）火の雨塚古墳(36)などの横穴式古墳も古墳時代後期のものである。

４　古　代

御牧原台地、八重原台地において須恵器生産が始まる。御牧原窯址は須釜原支群が望月町と浅科村境に位置し、望月町側に第１支群５基、浅科村側に第２支群14基の窯址に区分される。また、蓼科山麓にあたる浅科村上原地区と佐久市根岸地区には根岸窯址群が位置し、そのうち浅科村側のものは打越窯址(13)、菖蒲沢窯址(14)と呼称される（堤・峯村ほか1993)。

また官牧としての望月の牧が発達し、牧に関連した遺跡として馬の逃亡を防いだという「野馬除け」遺構が土塁状に残っているほか、八幡神社の高良社、御牧原尾尻から出土した鉄鐘などは牧に関連したものとも言われている。「駒込」はじめ「駒寄」「御馬寄」などの地名は、望月牧の貢馬にかかわる地名とされる。

８世紀中葉から後葉にかけて集落が大平遺跡(58)で出現し、その後９世紀・10世紀代まで継続している（岡田・佐藤ほか1998)。寺田遺跡(52)でも９世紀から10世紀にかかる集落遺跡（寺島・峯村ほか1995）が、砂原遺跡(４)では、仁和の洪水（従来は887年ないし888年とされていた）によって埋没したと考えられる９世紀後半の集落と水田、畑跡が検出されている（臼田・宇賀神ほか1998)。近年年輪年代法によってその原因となった大月川岩屑なだれが発生した年代が887年秋であることが判明し、今や「仁和の洪水」の存在自体は確実となっている。砂原遺跡の事例は「田作り」の時期に埋没した状況を示していると考えられるため、洪水の時期の考古学的な所見と年輪年代法の結果とに齟齬が存在することになり、考古学的な埋没水田面の時期の解釈などに検討の余地を残すものとなっていて、重要である（川崎2000)。

５　中　世

駒込地籍などの浅科村桑山地区は滋野庄あるいは御牧郷に属し、望月氏領であったという。

浅科村にかかわる事象としては、『源平盛衰記』には木曽義仲に従った武士として「八島四郎行忠」のなどの名が見られる。これが浅科村矢島を根拠とした武士と考えられ、「諏訪御符礼之古書」文安５年（1448）条に「矢島沙弥栄春」、享徳４年（1455）条に「大井山城守光政」ほか寛正３年（1462)、文明11年

(1479)、長享3年（1489）の各条などに「大井」、「矢島」の姓が見られるが、これらは大井氏支配下の大井矢島氏であるという。

こうした記事に対応するように、矢島地籍の城跡（矢島城跡）(23)は矢島氏の居城と言われ、すでに浅科村教育委員会により6次にわたる発掘調査が行われている。堀跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡などが検出され、これらの遺構がやはり室町時代のものであることが判明している（上代・小宮山ほか1991、1996）。

また、滋野遠江守光重が延徳3年（1491）に八幡神社の高良社を建立したことが同社の棟札によって知られている。

6　近世以降

戦国時代に佐久郡に武田氏が侵攻し、望月氏は武田氏に降った。その後、織田信長が武田氏を滅ぼしたのちは、織田領となり、さらに天正10年（1582）徳川家康領となった。その後浅科村桑山地区を含む小諸藩は天正11年より松平康国の領するところとなったが、その後、仙石氏、徳川忠長、松平氏、青山氏、酒井氏、西尾氏、石川氏領と変遷する。しかし、元禄15年（1702）に牧野康重領となると以後幕末まで牧野氏領であった（『長野県町村誌』）。

江戸時代には中山道が整備され、塩名田、八幡などの宿場が設置された。この時に八幡宿周辺に集落が移動したとも言われる。また寛永3年（1626）には市川五郎兵衛が許可を得て「五郎兵衛用水」が開鑿された。

幕末には桑山、矢島、蓬田、八幡、塩名田、御馬寄、市左兵衛新田、五郎兵衛新田の八か村であったが、明治9年（1876）に市左兵衛新田、塩名田村が合併して塩名田村に、明治22年（1889）に桑山、矢島、蓬田、八幡が合併して南御牧村となり、塩名田村と御馬寄村が合併し中津村となった。昭和30年（1955）に南御牧村、五郎兵衛新田、中津村の三か村が合併して、浅科村となって現在に至っている。

引用・参考文献

上代純一・小宮山克己ほか1991『矢島城跡－主郭部の試掘調査－』浅科村教育委員会

上代純一・小宮山克己1996『矢島城跡－村道2－8号線道路改良工事に伴う発掘調査』浅科村教育委員会

臼田武正・宇賀神誠司ほか1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－軽井沢町内・御代田町内・佐久市内・浅科村内－県　県西南部　池尻　小田井城南部台地　唄坂　金井城跡　中金井　箱毛坂　下蟹沢　長土呂　雷田居屋敷前田　砂原　中平・田中島　土合』（財）長野県埋蔵文化財センター

岡田　裕・佐藤幸信ほか1998『大平遺跡』浅科村教育委員会

川崎　保2000「『仁和の洪水』砂層と大月川岩屑なだれ」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8

佐久市編纂委員会編『佐久市志歴史編（二）中世』1994

土屋長久1982「土合1号古墳」『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡（北・東信）』

堤　隆・峯村今左夫ほか1993『砂原遺跡』浅科村教育委員会

寺島俊郎・峯村今左夫ほか1995『寺田遺跡』浅科村教育委員会

長野県1936『長野縣町村誌東信篇』長野縣町村誌刊行会（1985郷土出版社再刊）

畠山忠雄1970「浅科村土合一号墳の調査」『長野県考古学会誌』9

森嶋稔・福島邦男1994『望月町誌第三巻原始古代中世編』望月町・望月町誌刊行会

第3章　遺跡と調査の概要

第1節　遺跡の概要

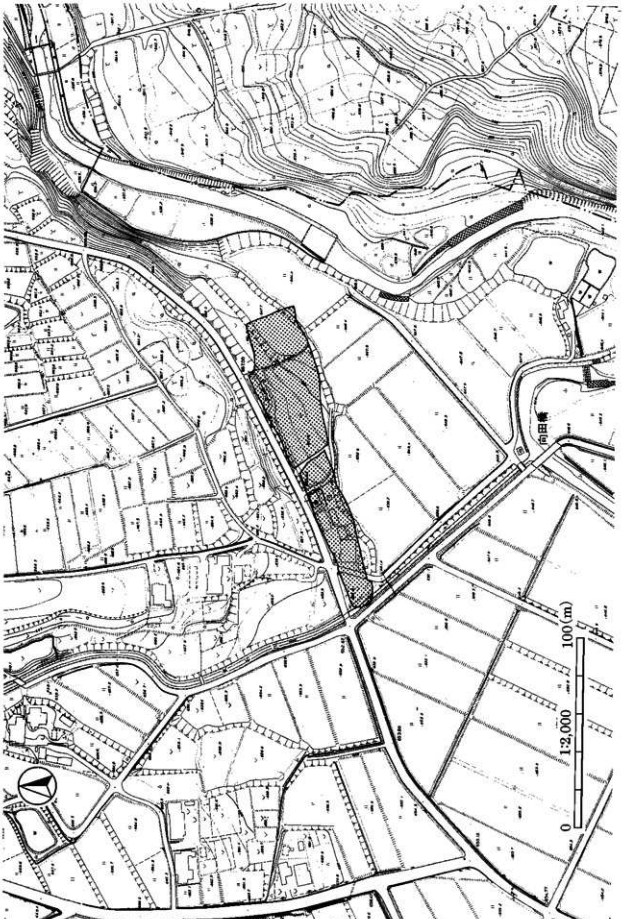
駒込遺跡は、北佐久郡浅科村桑山字駒込173-8ほかに所在する。地形および地質的には千曲川の支流布施川左岸の河岸段丘が御牧原台地を構成する火山灰や火山砕屑物の堆積層によって狭まった部分に位置している。さらに細かくみれば、遺跡の西側は布施川の支流女石（おんないし）川によって切られ、東側と南側は布施川の最下位河岸段丘が広がっていて、この最下位段丘上には遺跡は広がっていないようである。北側はさらに急峻な斜面となっていて、遺構・遺物は認められない。遺跡の西南で布施川と女石川が合している。県単農道整備（ふるさと）大野田地区建設に伴う緊急発掘調査を行った地点の標高はおおよそ651～655mを測る（第5・6図）。

駒込遺跡をはじめ浅科村内では御牧原台地の東南麓、布施川左岸河岸段丘の端の緩斜面上に遺跡が連続していることが知られている。布施川左岸の遺跡群では、過去には寺田遺跡（第4図52）や入の沢遺跡（同図44）で発掘調査が行われ、寺田遺跡からは古代9～10世紀の集落が検出され、入の沢遺跡では縄文時代と古墳時代の遺物が発掘されており、縄文時代から古代、中世にかけての人間の営みが続いていたことが当然予想される。

古東山道はこの布施川河岸段丘と御牧原台地の接点を走っていたともいわれるので、仮にそうであるとすれば、布施川左岸の遺跡群同様、駒込遺跡も古東山道と近世以降の中山道にはさまれる位置にあるとも言えよう。

駒込遺跡の過去の調査例はないが、『県史地名表』によれば、金箱晃氏所蔵の資料として縄文時代中期加曽利E式、後期堀ノ内式の土器、打製石斧、磨製石斧、平安時代土師器が紹介されていて、浅科村指定の遺跡として現在まで周知されている。

小宮山克己ほか1997『入の沢遺跡』浅科村教育委員会
寺島俊郎ほか1996『寺田遺跡』浅科村教育委員会
長野県史刊行会1982『長野県史考古資料編全1巻（1）遺跡地名表』



第5図　地形調査範囲（1）

X = +31,080
X = +31,040
X = +31,000
Y = −8,240
Y = −8,280
Y = −8,320
Y = −8,360
試掘トレンチ
平成10年度調査範囲
平成11年度調査範囲
(1:1,000)
50m
0
N

第6図　地形調査範囲（2）

第2節　調査範囲と経過

調査範囲を確定するために、県教委が試掘調査を平成9年2月3日から4日にかけて実施した。縄文時代の竪穴住居跡をはじめ、方形の竪穴住居跡や柱穴、井戸などが検出された。よって試掘トレンチをいれた付近の4400㎡の調査範囲を確定した（第5図）。

こうした試掘調査の所見および農道建設の工事工程に合わせて、調査区を設定し、面的な調査を行うこととした。平成10年4月27日より発掘調査を開始し、6月30日に調査を終了した。平成10年度の発掘調査面積は3000㎡。また、平成11年5月24日から引き続き発掘調査を再開し、8月6日に調査を終了した。引き続き8月9日から27日までの期間に浅科村福祉センターで出土遺物の洗浄を行った。平成11年度の発掘調査面積は1400㎡で、のべの調査面積は4400㎡となる（第6図）。

個別の説明は第4章以下で行うが、縄文時代から古代・中世にかけての竪穴住居跡13軒、土坑（柱穴と考えられる小土坑を含む）約400基、掘立柱建物跡10棟、井戸・石組2基、溝3本といった遺構が検出されている（7～9図）。

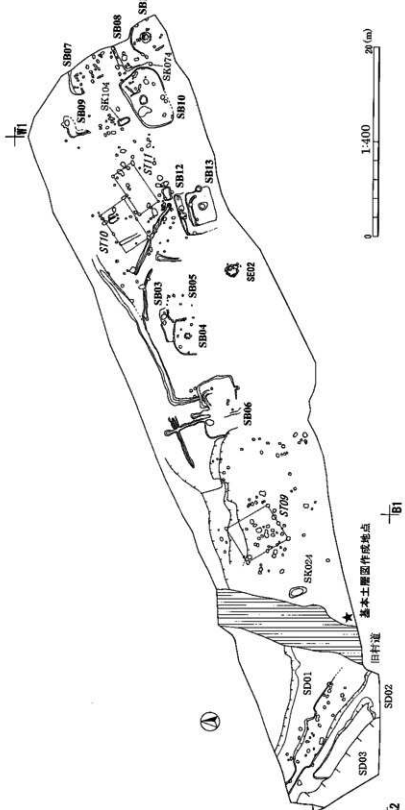
調査経過の詳細は以下のとおり

平成10年4月24日　駐車場、ユニットハウスの設営。
4月27日　建設用重機による表土剥ぎ開始。
5月11日　開始式、作業員による発掘調査、遺構検出開始。
5月28日　県文化財・生涯学習課原明芳、野沢誠一指導主事、浅科村文化財保護委員視察。
6月2日　航空撮影（ユーアール測量）
6月9日　浅科村村議会議員視察。
6月30日　終了式。

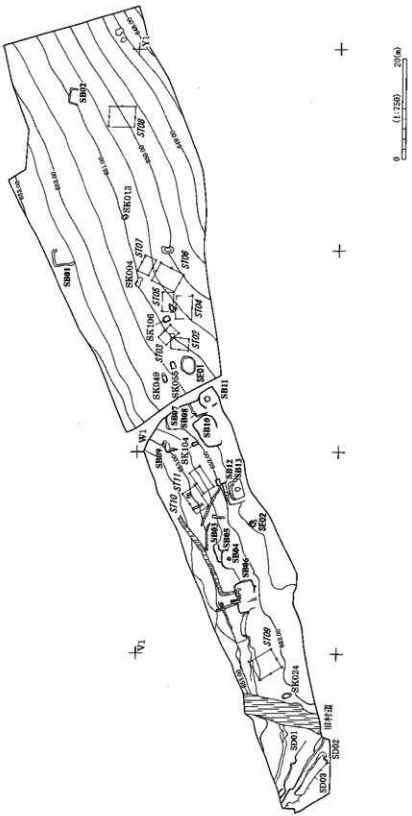
平成11年5月20日　ユニットハウス設営。
5月24日　開始式、建設用重機による表土剥ぎ。
5月25日　県文化財・生涯学習課原明芳指導主事視察、遺構検出のための精査開始。
6月8日～11日　県道付け替え部分試掘トレンチによる調査。
6月22日　浅科村文化財保護委員佐藤氏、峯村氏視察。
7月25日　現地説明会。
7月30日　航空撮影（ユーアール測量）、立正大学坂詰秀一教授、望月町教育委員会福島邦男氏、長野市教育委員会前島卓氏ほか見学。
8月6日　現場終了、器材撤収。
8月9日　浅科村福祉センターにて遺物洗浄開始。
8月26日　終了式。
8月27日　同センター撤収。

SB02
ST08
SK099
SK013
SB01
ST07
SK067
SK004
ST06
ST05
SK105
SK063
SK062
ST04
SK084
SK106
ST03
ST02
SK057
SK055
SE01
SK049
1:400
0
20(m)

第７図　遺構配置（１）


SB07
SB08
SB11
SB09
SK104
SK074
SB10
ST11
SB12
SB13
ST10
SB03
SB05
SB04
SE02
SB06
ST09
SK054
基本土層図作成地点
旧村道
SD01
SD02
SD03
1:400
20(m)

第8図　遺構配置（2）


T1
S1
R1
V1
U1
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SB07
SB08
SB09
SB10
SB11
SB12
SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SK004
SK013
SK024
SK104
SK106
SK107
SK108
SK109
SK110
SK111
SK112
SK113
SK114
SK115
SK116
SK117
SK118
SK119
SK120
SK121
SK122
SK123
SK124
SK125
SK126
SK127
SK128
SK129
SK130
SK131
SK132
SK133
SK134
SK135
SK136
SK137
SK138
SK139
SK140
SK141
SK142
SK143
SK144
SK145
SK146
SK147
SK148
SK149
SK150
SK151
SK152
SK153
SK154
SK155
SK156
SK157
SK158
SK159
SK160
SK161
SK162
SK163
SK164
SK165
SK166
SK167
SK168
SK169
SK170
SK171
SK172
SK173
SK174
SK175
SK176
SK177
SK178
SK179
SK180
SK181
SK182
SK183
SK184
SK185
SK186
SK187
SK188
SK189
SK190
SK191
SK192
SK193
SK194
SK195
SK196
SK197
SK198
SK199
SK200
SK201
SK202
SK203
SK204
SK205
SK206
SK207
SK208
SK209
SK210
SK211
SK212
SK213
SK214
SK215
SK216
SK217
SK218
SK219
SK220
SK221
SK222
SK223
SK224
SK225
SK226
SK227
SK228
SK229
SK230
SK231
SK232
SK233
SK234
SK235
SK236
SK237
SK238
SK239
SK240
SK241
SK242
SK243
SK244
SK245
SK246
SK247
SK248
SK249
SK250
SK251
SK252
SK253
SK254
SK255
SK256
SK257
SK258
SK259
SK260
SK261
SK262
SK263
SK264
SK265
SK266
SK267
SK268
SK269
SK270
SK271
SK272
SK273
SK274
SK275
SK276
SK277
SK278
SK279
SK280
SK281
SK282
SK283
SK284
SK285
SK286
SK287
SK288
SK289
SK290
SK291
SK292
SK293
SK294
SK295
SK296
SK297
SK298
SK299
SK300
SK301
SK302
SK303
SK304
SK305
SK306
SK307
SK308
SK309
SK310
SK311
SK312
SK313
SK314
SK315
SK316
SK317
SK318
SK319
SK320
SK321
SK322
SK323
SK324
SK325
SK326
SK327
SK328
SK329
SK330
SK331
SK332
SK333
SK334
SK335
SK336
SK337
SK338
SK339
SK340
SK341
SK342
SK343
SK344
SK345
SK346
SK347
SK348
SK349
SK350
SK351
SK352
SK353
SK354
SK355
SK356
SK357
SK358
SK359
SK360
SK361
SK362
SK363
SK364
SK365
SK366
SK367
SK368
SK369
SK370
SK371
SK372
SK373
SK374
SK375
SK376
SK377
SK378
SK379
SK380
SK381
SK382
SK383
SK384
SK385
SK386
SK387
SK388
SK389
SK390
SK391
SK392
SK393
SK394
SK395
SK396
SK397
SK398
SK399
SK400
SK401
SK402
SK403
SK404
SK405
SK406
SK407
SK408
SK409
SK410
SK411
SK412
SK413
SK414
SK415
SK416
SK417
SK418
SK419
SK420
SK421
SK422
SK423
SK424
SK425
SK426
SK427
SK428
SK429
SK430
SK431
SK432
SK433
SK434
SK435
SK436
SK437
SK438
SK439
SK440
SK441
SK442
SK443
SK444
SK445
SK446
SK447
SK448
SK449
SK450
SK451
SK452
SK453
SK454
SK455
SK456
SK457
SK458
SK459
SK460
SK461
SK462
SK463
SK464
SK465
SK466
SK467
SK468
SK469
SK470
SK471
SK472
SK473
SK474
SK475
SK476
SK477
SK478
SK479
SK480
SK481
SK482
SK483
SK484
SK485
SK486
SK487
SK488
SK489
SK490
SK491
SK492
SK493
SK494
SK495
SK496
SK497
SK498
SK499
SK500
SK501
SK502
SK503
SK504
SK505
SK506
SK507
SK508
SK509
SK510
SK511
SK512
SK513
SK514
SK515
SK516
SK517
SK518
SK519
SK520
SK521
SK522
SK523
SK524
SK525
SK526
SK527
SK528
SK529
SK530
SK531
SK532
SK533
SK534
SK535
SK536
SK537
SK538
SK539
SK540
SK541
SK542
SK543
SK544
SK545
SK546
SK547
SK548
SK549
SK550
SK551
SK552
SK553
SK554
SK555
SK556
SK557
SK558
SK559
SK560
SK561
SK562
SK563
SK564
SK565
SK566
SK567
SK568
SK569
SK570
SK571
SK572
SK573
SK574
SK575
SK576
SK577
SK578
SK579
SK580
SK581
SK582
SK583
SK584
SK585
SK586
SK587
SK588
SK589
SK590
SK591
SK592
SK593
SK594
SK595
SK596
SK597
SK598
SK599
SK600
SK601
SK602
SK603
SK604
SK605
SK606
SK607
SK608
SK609
SK610
SK611
SK612
SK613
SK614
SK615
SK616
SK617
SK618
SK619
SK620
SK621
SK622
SK623
SK624
SK625
SK626
SK627
SK628
SK629
SK630
SK631
SK632
SK633
SK634
SK635
SK636
SK637
SK638
SK639
SK640
SK641
SK642
SK643
SK644
SK645
SK646
SK647
SK648
SK649
SK650
SK651
SK652
SK653
SK654
SK655
SK656
SK657
SK658
SK659
SK660
SK661
SK662
SK663
SK664
SK665
SK666
SK667
SK668
SK669
SK670
SK671
SK672
SK673
SK674
SK675
SK676
SK677
SK678
SK679
SK680
SK681
SK682
SK683
SK684
SK685
SK686
SK687
SK688
SK689
SK690
SK691
SK692
SK693
SK694
SK695
SK696
SK697
SK698
SK699
SK700
SK701
SK702
SK703
SK704
SK705
SK706
SK707
SK708
SK709
SK710
SK711
SK712
SK713
SK714
SK715
SK716
SK717
SK718
SK719
SK720
SK721
SK722
SK723
SK724
SK725
SK726
SK727
SK728
SK729
SK730
SK731
SK732
SK733
SK734
SK735
SK736
SK737
SK738
SK739
SK740
SK741
SK742
SK743
SK744
SK745
SK746
SK747
SK748
SK749
SK750
SK751
SK752
SK753
SK754
SK755
SK756
SK757
SK758
SK759
SK760
SK761
SK762
SK763
SK764
SK765
SK766
SK767
SK768
SK769
SK770
SK771
SK772
SK773
SK774
SK775
SK776
SK777
SK778
SK779
SK780
SK781
SK782
SK783
SK784
SK785
SK786
SK787
SK788
SK789
SK790
SK791
SK792
SK793
SK794
SK795
SK796
SK797
SK798
SK799
SK800
SK801
SK802
SK803
SK804
SK805
SK806
SK807
SK808
SK809
SK810
SK811
SK812
SK813
SK814
SK815
SK816
SK817
SK818
SK819
SK820
SK821
SK822
SK823
SK824
SK825
SK826
SK827
SK828
SK829
SK830
SK831
SK832
SK833
SK834
SK835
SK836
SK837
SK838
SK839
SK840
SK841
SK842
SK843
SK844
SK845
SK846
SK847
SK848
SK849
SK850
SK851
SK852
SK853
SK854
SK855
SK856
SK857
SK858
SK859
SK860
SK861
SK862
SK863
SK864
SK865
SK866
SK867
SK868
SK869
SK870
SK871
SK872
SK873
SK874
SK875
SK876
SK877
SK878
SK879
SK880
SK881
SK882
SK883
SK884
SK885
SK886
SK887
SK888
SK889
SK890
SK891
SK892
SK893
SK894
SK895
SK896
SK897
SK898
SK899
SK900
SK901
SK902
SK903
SK904
SK905
SK906
SK907
SK908
SK909
SK910
SK911
SK912
SK913
SK914
SK915
SK916
SK917
SK918
SK919
SK920
SK921
SK922
SK923
SK924
SK925
SK926
SK927
SK928
SK929
SK930
SK931
SK932
SK933
SK934
SK935
SK936
SK937
SK938
SK939
SK940
SK941
SK942
SK943
SK944
SK945
SK946
SK947
SK948
SK949
SK950
SK951
SK952
SK953
SK954
SK955
SK956
SK957
SK958
SK959
SK960
SK961
SK962
SK963
SK964
SK965
SK966
SK967
SK968
SK969
SK970
SK971
SK972
SK973
SK974
SK975
SK976
SK977
SK978
SK979
SK980
SK981
SK982
SK983
SK984
SK985
SK986
SK987
SK988
SK989
SK990
SK991
SK992
SK993
SK994
SK995
SK996
SK997
SK998
SK999
SK1000
旧村道
0
(1:750)
20(m)

第9図　遺構検出面地形

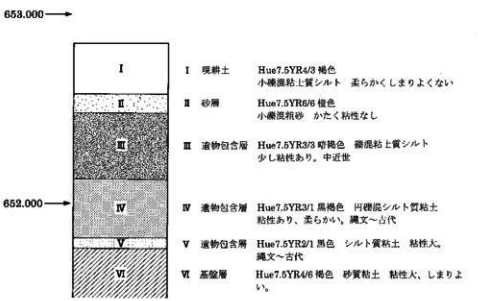
第3節　基本層序

駒込遺跡は、布施川の河岸段丘が、御牧原台地からの斜面で狭まったところに位置している。遺跡の南側と東側は布施川に切られた形となり、北側は急峻な斜面地である。

遺跡の基盤および表土はいずれも御牧原台地起源の土砂が大半で、とくに砂層は女石川に由来するものと考えられ西側ほど砂層が厚く、東側にはほとんど見られなかった。

基本層序（第10図）は上位からⅠ層、耕作土（水田土壌）あるいは宅地になっていた部分の表土で、縄文土器や土師器を多く採集することができる。Ⅱ層は女石川起源の砂層で、遺跡の西側では観察できたが、東側にはあまりなかったようである。Ⅲ～Ⅴ層は遺物包含層で、上位の層ほどグライ化が進んでいる。Ⅲ層は中世以降の遺構の覆土である。Ⅳ層・Ⅴ層は含まれている遺物にほとんど差はない。多少Ⅴ層は土壌化が著しく、マトリックスが粘土であったので、区別した。Ⅴ層中からも平安時代の土師器とともに、縄文土器や打製石斧も同じレベルで検出できるので、縄文時代から堆積ははじまっていたのであろうが、平安時代くらいまで、層の形成が続いていたものと考えられる。遺物包含層も西側ないし南側にいくほど層が厚く、東側ないし北側にいくほど区分が難しくなるので、女石川に由来する堆積物の影響を強く受けて形成され、傾斜のきつい部分には遺物包含層の形成はあまり行われなかったものと考えられる。

Ⅵ層の礫混砂質粘土層は、この層に遺構は掘り込まれているが、プライマリーな層中に遺構、遺物は認められなかった。年代を特定できるような資料はないが、Ⅴ層中に縄文時代中期の遺物が多いことから、おそらく縄文時代中期以前の完新世の早い段階で堆積したものであろうか。この層は西側ほど粘土が多く、東側ほど砂が多い。



第10図　基本土層

第4章　遺構およびそれに伴う土器・陶磁器

第1節　縄文時代

1　竪穴住居跡

竪穴住居跡SB04（遺構第11図・土器第12図）　位置V13

検　出：表土除去後、古墳時代SB03の南側に石囲炉と思われる石組を中心とした円形の落ち込みが認められた。よって切り合い関係を持つSB03および隣接する縄文時代SB05とともに精査し、平面形を検出した。平面形を検出した段階で、SB03を切り、SB05に切られることがわかり、土層観察用ベルトを残して掘り下げた。

構　造：大きさ東西（4.0）m×南北（2.4）m。床面は土層断面では、認められるが、面的に捉えるのは難しかった。とくに住居跡南半は削平著しく検出できなかった。炉は中央やや北よりに石囲炉が1基ある。小土坑が7基検出されたが、深さ、規模が揃っているPit 1～5を柱穴とした。削平著しいが、残存したプランからから径4～5m程度の円形住居と想定される。

炉：石囲炉。東西0.6m×南北0.8m。中央に焼土の広がりがある。炉内の遺物はほとんどなかった。炉縁石は東側がなかったが、住居跡南側にある扁平な礫がこれであったかもしれない。

土　層：1.SB04覆土。黒褐色（Hue7.5YR3/2）シルト質粘土。しまりよく堅い。
2.SB04石囲炉内覆土。黒褐色（Hue7.5YR3/2）シルト質粘土。炭・焼土を多く含む。

切り合い：古墳時代SB03に切られ、縄文時代SB05を切る。

遺　物：1口縁に平行した隆帯が貼付されている。頸部は無文で胴部は平行沈線文が施される。

時　期：縄文時代中期後葉Ⅰ期。

竪穴住居跡SB05（遺構第13図）　位置V13

検　出：表土除去後、古代SB03、縄文時代SB04とともに黒色の落ち込みとして捉えられた。SB03の先行トレンチでSB03の下位にSB05があることが判明し、SB03調査終了後掘り下げたところ、扁平な石の列が検出された。石列のプランを追っていったところ、柄鏡形を呈したので、敷石住居跡の外縁部の石が残存したものと判断した。

構　造：大きさ東西4.8m×南北（2.8）m。長軸方向はW12° N。床面は土層断面などでもはっきりと捉えることができなかった。とくに南半は削平著しく、プランはわからない。石列の上面がほぼ揃っていることから、この水準がおおよその床面であったものと考えられる。炉はよくわからないが、住居跡北辺に焼土が集中する土坑がある。柱穴は検出できなかった。

炉：焼土が覆土に入っていた土坑があるが、住居の平面形からは北偏により過ぎていて炉本体とは考えにくい。

土　層：1.SB05覆土。黒褐色（Hue7.5YR2/2）粘土質シルト柔らかく粘性あり、縄文土器片を含む。

切り合い：古墳時代SB03に切られ、縄文時代SB05を切る。

遺　物：図化できるような破片は出土しなかったが、縄文土器片が出土。敷石住居跡の外縁部の石列直上から打製石斧（第66図2）が出土している。

時　期：縄文時代中期後葉Ⅱ期から後期初頭か。時期を詳細に決定できる遺物に欠くが、中期後葉Ⅰ期の

SB04を切ることや、敷石住居跡は縄文時代中期後葉Ⅱ期から後期の類例が知られていることを根拠とした。

竪穴住居跡SB11（遺構第14図・土器第15図）　位置W７・12

検　出：表土除去後、Ⅵ層上面の遺構精査中に、石囲炉、壁溝、柱穴を検出。

構　造：大きさ東西（3.6）m×南北3.5m。円形を呈す。床面は削平されほとんどのこっていない。北部から西部にかけて幅10から15cm、深さ３～５cmの壁溝が切れ切れ検出された。本来は全周していたものか。炉は中央北よりに石囲炉が１基ある。小土坑がいくつか検出され、うち径30～40cmの４基が主柱穴と考えられる。

炉：東西1.1m×1.1mの方形を呈す。深さは遺構検出面から20cmを測る。縄文土器がまとまって出土した。

土　層：覆土は基本土層Ⅳ層。

遺　物：炉内と中央から北側の石の間に集中して出土した。１～４おそらく同一個体。口縁部に平行した隆帯が二条巡り、半円形の弧状隆帯貼付文がこれらを区画したのちに、羽状沈線文が充填されている。頸部は無文。６・７同一個体か。口唇部を面取りし、刻目隆帯が二条巡る。８波状口縁。波頂部から平行二条隆帯が垂下する。９～12同一個体か。平行沈線と刺突文を地文とし、隆帯文が貼付される。10波状口縁の突起部分。波頂部上面に渦巻沈線文が施される。

時　期：縄文時代中期後葉Ⅰ期

土坑（遺構第31図）

いずれも住居跡などと同様に表土を除去したのち遺物包含層内を掘り下げていく段階で、検出されている。古代以降の土坑とは多少検出面のレベルが異なるようにも思われたが、明確に土層で区別することはできなかった。多少土壌化が進んでいる点と共伴遺物から縄文時代と限定できるものについてここでは取り上げた。

土坑SK028　位置U20

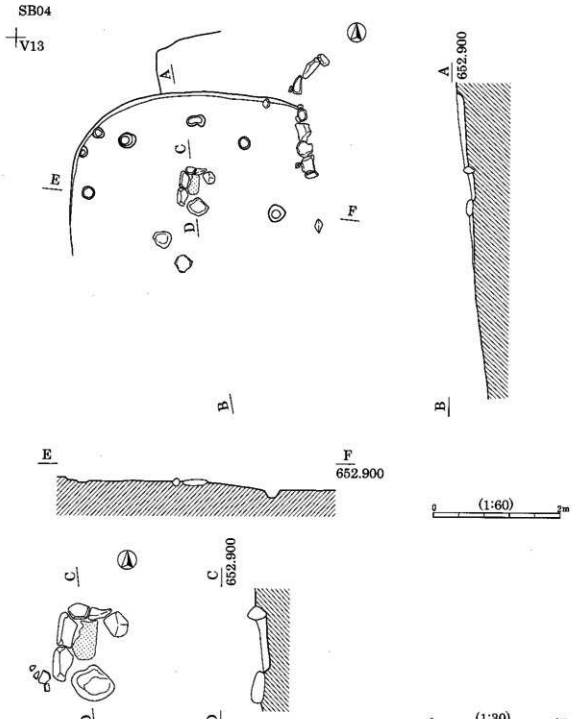
大きさ0.4×0.3m。略円形を呈す。隣接する同じく縄文時代SK027に切られる。図化できなかったが縄文土器数片と磨製石斧（第77図２）が出土している。

土坑SK077　位置W７

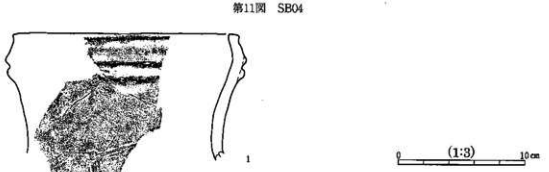
大きさ0.3×0.2m。歪な円形。黒曜石製石鏃（第64図２）と同剥片が出土している。

土坑SK094　位置X２

大きさ0.5×0.３m。東西に長軸をもつ歪な楕円形を呈す。頁岩製打製石斧（第66図６）が出土している。

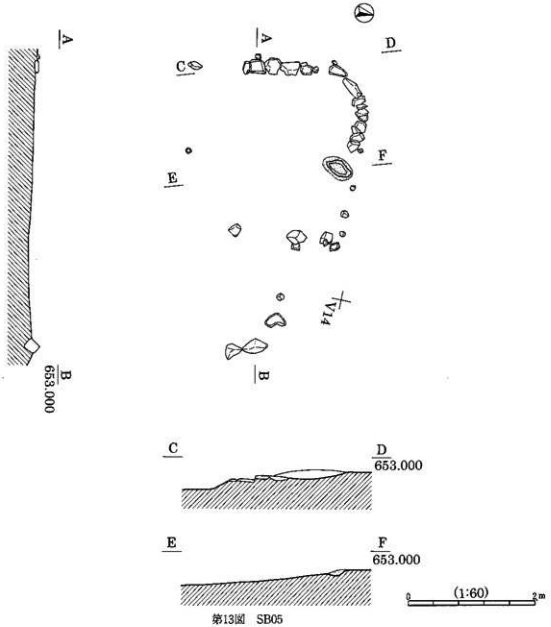


第11図　SB04



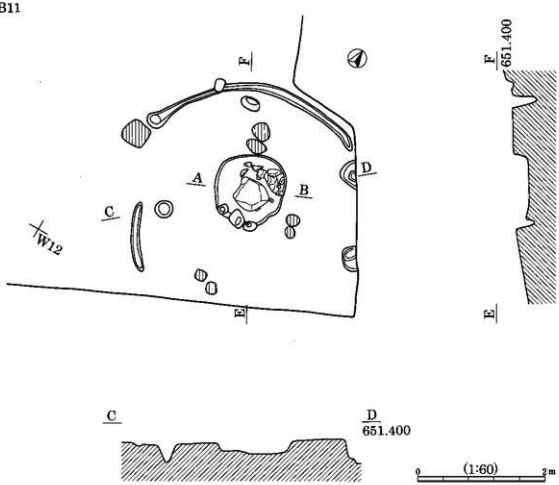
第12図　SB04　出土土器

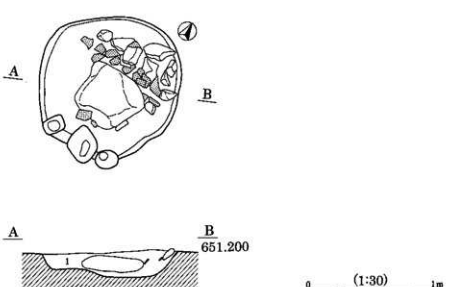
SB05



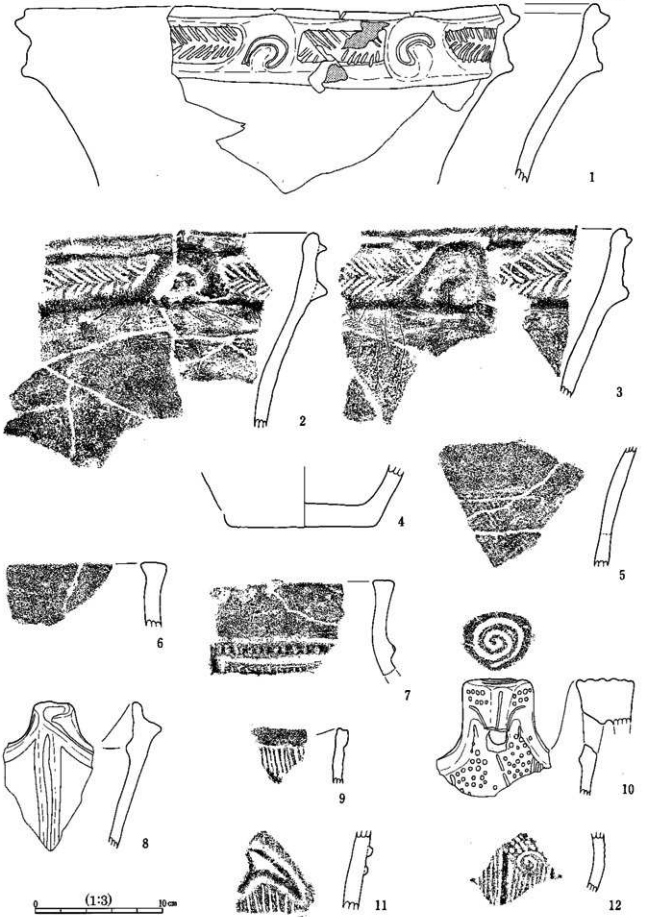
第13図　SB05

SB11





第14図　SB11



第15図　SB11　出土土器

第2節　古墳時代

1　竪穴住居跡

竪穴住居跡SB03（遺構第16図・土器第18図）　位置V 8・13

検　出：表土除去後、方形の黒色土の落ち込みがⅥ層上面で認められた。複数の遺構が切り合っている可能性が考えられたので、先行トレンチを設定し、土層断面を確認した。北辺の立ち上がりおよび床面と考えられる平坦面が認められた。またこの平坦面の下位に縄文土器を含む遺物包含層があり、SB03がさらに縄文時代SB04・SB05を切ることがわかった。

構　造：大きさ東西3.6m×(1.2)m。軸の方向はN14° W。床面は、断面による土層観察では床面が認められたが、面的に掘り下げる段階では縄文時代竪穴住居跡SB04・SB05と切り合っている部分は土壌化が著しく明瞭にその広がりを把握することができなかった。カマドは北辺中央に1基ある。柱穴は北東隅の小土坑が、あるいは柱穴かと思われるが、対応するような他の柱穴らしい小土坑は検出できなかった。

カマド：左袖に石の芯材と中央に支脚石が残存していた。火床もわずかに見られる。また支脚石付近には土師器片が集中して出土していた。おそらくカマド構築材の一部に転用されたものだろう。

土　層：1.SB03覆土。黒褐色（Hue7.5YR3/2）粘土質シルト。柔らかく粘性あり。炭・焼土粒を多く含む。

1´.カマド火床直上覆土。マトリックスは1層と同じだが、さらに炭・焼土が多い。

2.SB05覆土。黒褐色（Hue7.5YR2/2）粘土質シルト。柔らかく粘性あり。縄文土器片を含む。

切り合い：縄文時代SB04・SB05を切る。

遺　物：1土師器球胴甕。底部が半丸底化していることから、7世紀以降の所産と考えられる。佐久地方では8世紀初頭まで存続している。ただし、7世紀末葉から8世紀初頭にかけては極めて微量となるし、形態や器壁の厚さも大きな変容を遂げているため、7世紀末以前と考えた。この他にも土師器の小破片が出土しているが、いずれも在地産の土師器で接合関係が一切なく、時期比定できるようなものではなかったので、図化しなかった。

時　期：古墳時代後期後半。7世紀初頭から後葉。

竪穴住居跡SB10（遺構第17図・土器第18図）　位置W 6・11

検　出：表土除去後Ⅵ層上面の精査で、土質の違いより検出。北辺の立ち上がりが明瞭に認められたので、北辺に直交する形で先行トレンチを設定したところ、床面と思われる平坦面が検出され、竪穴住居跡と判断した。

構　造：大きさ東西6.8m×南北4.2m。略長方形を呈す。長軸の方向はW28° N。北辺の立ち上がりは明瞭であるが、住居跡南半は床面などが削平されている。北辺西よりに焼土集中部分がある。カマドの火床と一応考えたが、古代竪穴住居跡SB12・13の焼土集中部分とも似ており、あるいは鍛冶関連施設の可能性もあろう。

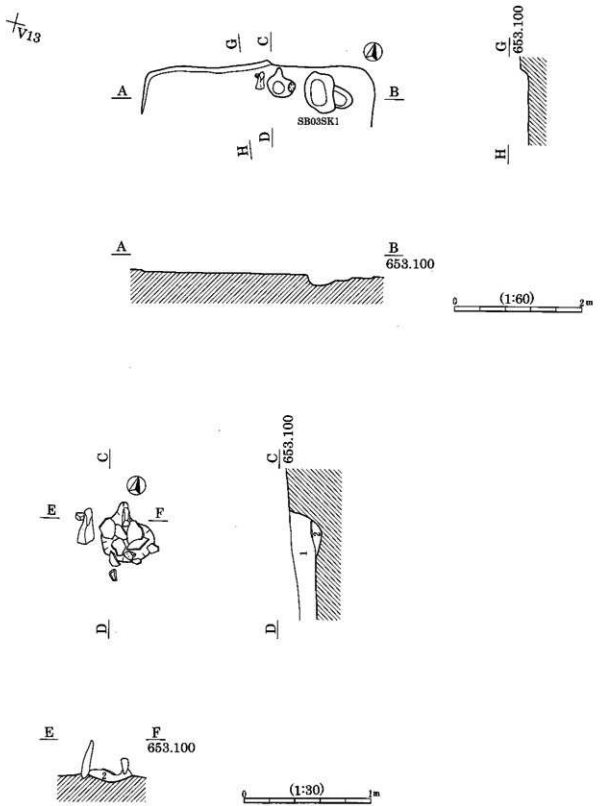
カマド：北辺の焼土集中がカマドの火床か。

土　層：1.SB10覆土。極暗褐色（Hue7.5YR2/3）シルト質粘土。軟らかく、粘性大。

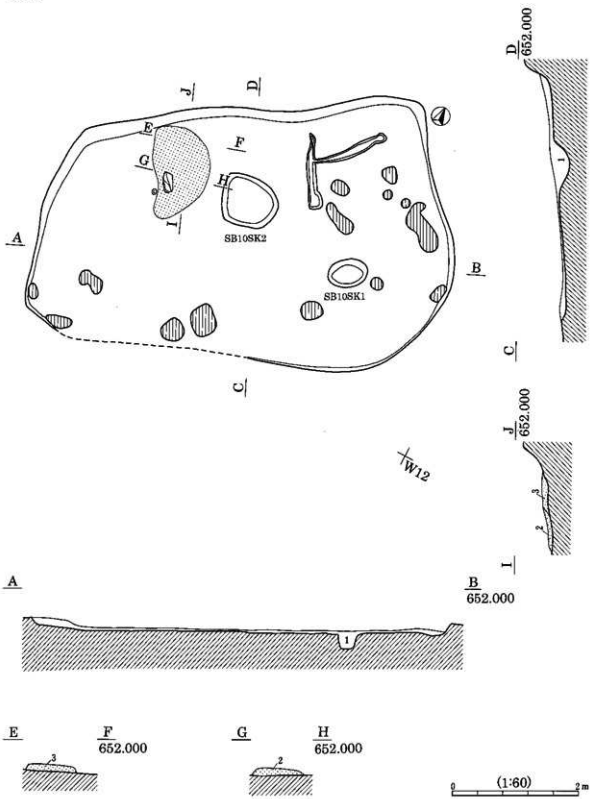
2.SB10カマド覆土。黒褐色（Hue7.5YR3/1）粘土質シルト。粘性少なく脆い。焼土、炭多く含む。

3.SB10カマド覆土。褐灰色（Hue7.5YR4/1）シルト質粘土。軟らかく、粘性大。焼土、炭含む。

SB03



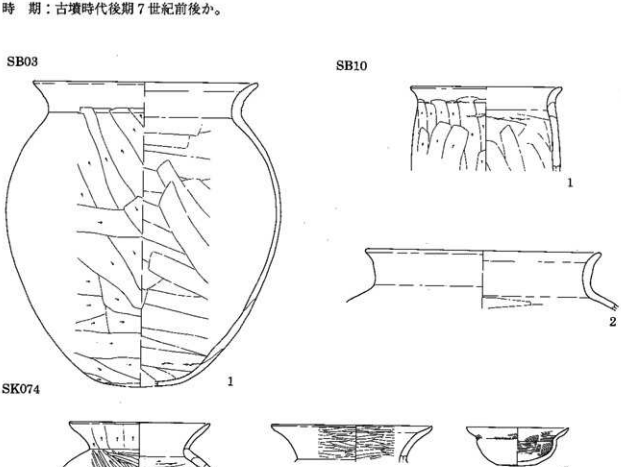
第16図　SB03


SB10
D
652.000
J
D
E
F
G
H
I
SB10SK2
SB10SK1
A
B
C
W12
J
652.000
I
A
B
652.000
1
2
3
E
F
652.000
G
H
652.000
(1:60)
0
2m

第17図　SB10

遺　物：いずれも土師器。1長胴甕、2球胴甕。この他にも土師器が若干存在するが、時期の細部を決定できるものはなく、搬入品らしきものも存在していない。1・2の資料からすれば古墳時代後期でも6世紀後葉以降のものであることは相違ない。1の頸部屈曲が弱いことからさらにやや古い様相とはいえるが、それ以上の時期比定の根拠に乏しい。

時　期：古墳時代後期7世紀前後か。



第18図　SB03・SB10・SK074　出土土器

2　土坑

土坑SK074（遺構第31図・土器第18図）　　位置W6

土層は黒褐色粘土質シルトで、表土除去後Ⅵ層上面で検出された。大きさは径0.4mの円形。この土坑から出土した土師器は、古墳時代SB10が廃絶した時期に伴うものとは考えられないが、覆土から出土した土師器（第63図1・2）とほぼ同じ時期である。SB10とは同じグリッドであるので、この土坑もしくは関連する遺構の資料であったかもしれない。

遺　物：いずれも土師器。1甕。2短頸壺。3小型丸底鉢。すべて在地のものである。3は比較的粗製な

作りで、一見最終段階の様相にも見えるが、1は器壁が薄手であり、口縁部も端部を外反させずに直線的に終焉させていること、また2の口唇部についても内側へ湾曲させ前段階（小型丸底壺・鉢出現以前）の様相を残していることなどから、いまだ屈曲脚高坏が出現していない段階と考えられる。佐久地方では屈曲脚高坏と器台・小型高坏は今なお共伴例がなく、また須恵器出現期をどこに置くべきかが問題となるところであるが、とりあえず屈曲脚高坏の出現ならびに小型精製土器群の崩壊を4世紀から5世紀の隙間に置くとすれば、4世紀後半いずれかの段階かが想定される。

時　期：古墳時代前期後半4世紀後半。

第3節　古　　代

1　竪穴住居跡

竪穴住居跡SB01（遺構第19図・土器第23図）　　位置R15・20

検　出：表土除去後、Ⅵ層上面の精査によって黒色土の落ち込みとして検出。

構　造：大きさ3.7m×3.3m。略方形か。長軸の方向はN10°W。西部と北東部の一部を小土坑に切られる。床面はほとんど削平され、わずかに北西部の壁溝が残る。カマド、柱穴は検出できなかった。

土　層：黒色土の単層。基本土層Ⅳ層か。

遺　物：1土師器鉄鉢。2須恵器坏。3灰釉陶器椀。1は10世紀前葉にも若干存続するものの基本的には9世紀代に終焉を迎えるもの。2も10世紀代まで降る可能性はない。3は刷毛掛けか漬け掛けかはわからないが、口唇部形態からすれば9世紀後半から10世紀前半にかけてのものと思われる。図化できなかった遺物をみると、甕はロクロ調整長胴甕ばかりでいわゆる「武蔵型甕」は存在しない。土師器坏はすべて内面黒色処理されている（いわゆる黒色土器坏）にもかかわらず、ミガキは極めて簡略化され内面に暗文のみを施すものが存在し、あわせて須恵器坏や高台付坏が一定量見受けられる。

時　期：平安時代9世紀第4四半期を中心とした時期。

竪穴住居跡SB02（遺構第19図）　　位置S19・20

検　出：表土除去後、Ⅵ層上面の精査によって黒色土の落ち込みとして検出された。

構　造：大きさ（1.9）m×3.0m。本来略方形であったと考えられる。主軸N14°E。西北部を小土坑によって切られる。床面の削平著しく、わずかに北東部が残る。幅15～25cm、深さ5～9cmの壁溝が北半部は切れ目無く巡る。柱穴、カマドは検出できなかった。

土　層：黒色土の単層。Ⅳ層。

遺　物：なし。

時　期：カマドも検出できず、時期を決定できる要素に欠けるが、土層は古代竪穴住居跡SB01などに類似していたようで、古代の遺構とする。

竪穴住居跡SB06（遺構第20・21図・土器第23図）　　位置V12

検　出：表土除去後、Ⅳ層掘り下げ中に黒色土の落ち込みとして検出された。暗渠排水に切られていたので、暗渠排水を除去したところ、床面と考えられる平坦面が認められた。周辺をさらに精査する

とカマドの煙道と思われる焼土を伴う溝状の落ち込みが見られた。

構　造：大きさ東西6.0m×南北4.0m。長方形を呈す。主軸N16°W。西南部が削平されている。また南壁の立ち上がりは明瞭ではない。カマドは北辺中央に1基。北カマド右袖から住居内北東部にかけて溝が巡る。排水用であろうか。カマド左袖に隣接する形で小土坑Pit1がある。貯蔵穴か。柱穴は検出できなかった。

カマド：大きさ南北2.0m×東西1.2m。両袖ともに芯材に安山岩の扁平な角礫を用いる。カマド中央に平行して検出された扁平な角礫はカマドの天井材であろう。かなり崩壊しているが、カマドを構築した土も部分的に検出されている。煙道は幅20～30cm、長さ1.4mを測る。すでに天井は削平されていたが、比較的遺存状況は良かった。煙道の途中に段がある。

住居跡土層：1.遺物包含層。黒褐色（Hue7.5YR3/2）砂質粘土。しまりよく堅い。粘性大。土器を多く含む。基本土層Ⅳ層が土壌化したもの。

2.SB06覆土。黒色（Hue7.5YR2/2）砂質粘土。しまりよい。粘性大。土器は少ない。

3.遺物包含層。褐灰色（Hue7.5YR4/1）シルト質粘土。軟らかい。土器を多く含む。基本土層Ⅴ層。

4.小土坑Pit1覆土。

カマド土層：1.SB06住居跡内土。

2.カマド内覆土。黒褐色（Hue7.5YR2/2）砂質粘土。炭、焼土を多く含む。

3.カマド袖構築土。黒褐色（Hue7.5YR3/2）砂質粘土。炭、焼土を含まず。堅くしまっている。

4.カマド天井構築土。黒褐色（Hue7.5YR3/2）砂質粘土。3層と基本的に同じだが、炭、焼土、礫が下面にある。

5.カマド内覆土。褐色（Hue7.5YR4/3）砂混粘土。焼土を多く含み、軟らかく、粘性あり。

6.カマド内覆土。褐色（Hue7.5YR4/4）粘土。炭、焼土を多く含む。非常に軟らかく、粘性あり。

遺　物：1須恵器坏。2須恵器提瓶の胴部破片。1は糸切り痕をそのまま残し、内面底径7.4cmを測ることから、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期の所産と推察される。図化できなかった土師器片には「コ」字状口縁化する以前の「武蔵型甕」が多数存在している。2は6世紀代の遺物であるから混入品である。

時　期：奈良時代末から平安時代初頭、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期の初頭。

竪穴住居跡SB07（遺構第19図）　位置W1

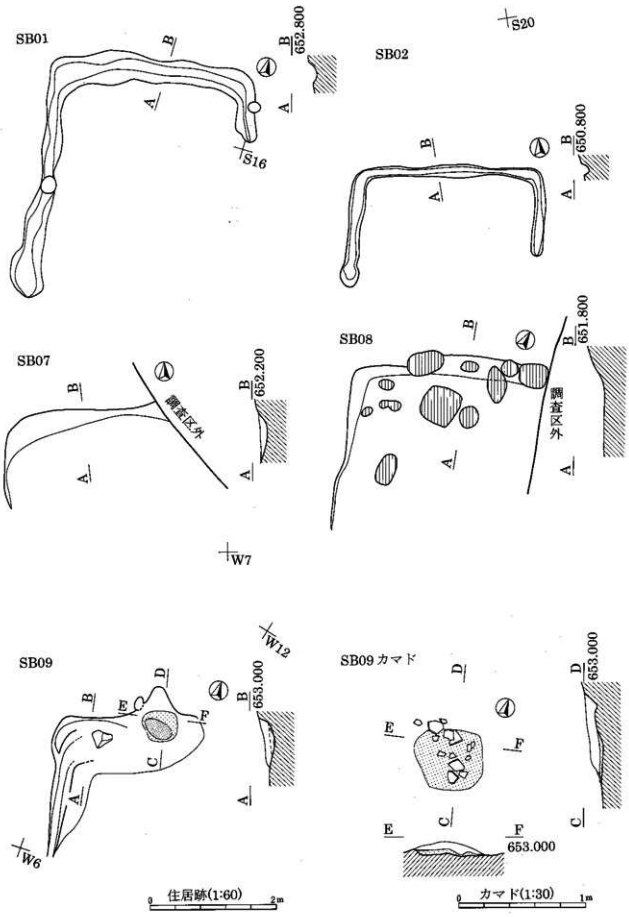
検　出：表土除去後、Ⅵ層上面の精査によって黒色土の落ち込みとして検出され、先行トレンチを設定したところ平坦面と立ち上がりが確認され、竪穴住居跡（建物跡）と判断した。

構　造：大きさ東西（2.4）m×南北（1.5）m。軸の方向はN7°Wで、本来略方形であったと考えられる。床面らしい平坦面がわずかに北部分と、北辺と西辺の立ち上がりが一部残っている。柱穴やカマドは検出できなかった。

土　層：黒色土の単層。基本土層のⅣ層。

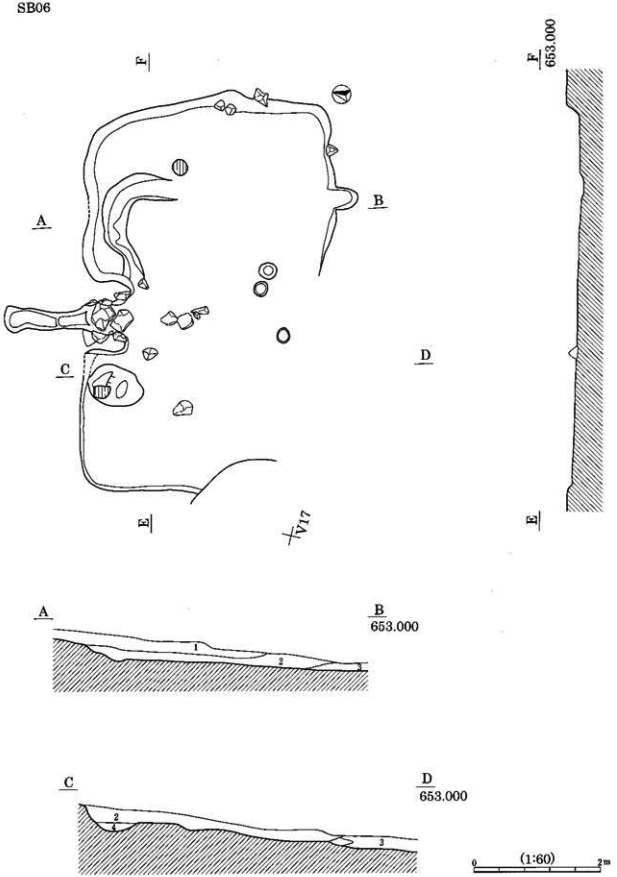
遺　物：なし。

時　期：時期を決定できる遺物はなく、カマドも無いことから中世に降る可能性もあるが、他の古代の竪穴住居跡と軸がほぼそろうことから、古代と考えた。



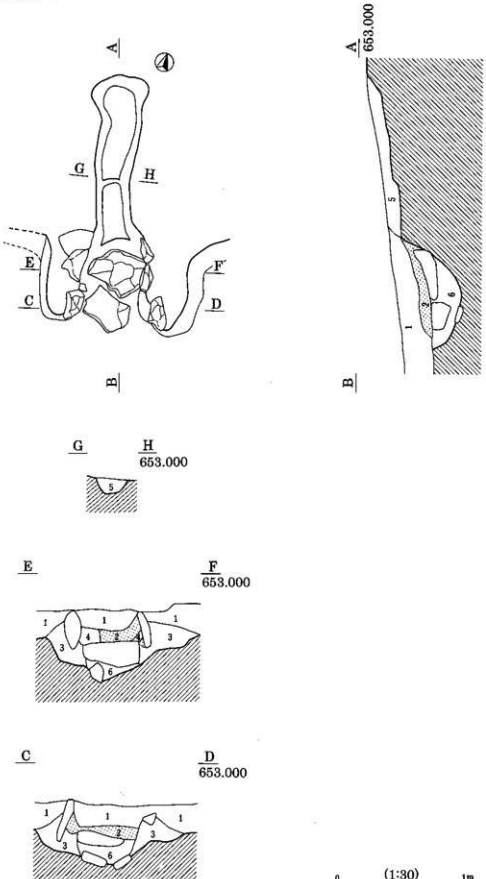
第19図　SB01・SB02・SB07・SB08・SB09

SB06



第20図　SB06

SB06 カマド



第21図　SB06

竪穴住居跡SB08（遺構第19図）　位置W６・７

検　出：表土除去後、Ⅵ層上面の精査によって黒色土の落ち込みとして検出され、先行トレンチを設定したところ平坦面と立ち上がりが確認され、竪穴住居跡（建物跡）と判断した。

構　造：大きさ東西（3.1）m×南北（2.6）m。床面らしい平坦面が北西隅のみ残存。北辺と西辺の立ち上がりが残っていた。軸の方向はN22°Wで本来略方形であったと考えられる。北辺中央に60cm×30cmの焼土集中が見られ、カマドの残存部分と考えられる。

土　層：黒色土の単層。基本土層のⅣ層。

遺　物：図化できるような遺物なし。

時　期：時期を決定できる遺物はないが、他の古代の竪穴住居跡とほぼ軸がそろうことから、古代と考えた。

竪穴住居跡SB09（遺構第19図・土器第23図）　位置W１

検　出：表土除去後、Ⅵ層上面の精査によって黒色土の落ち込みが検出され、先行トレンチを設定したところ平坦面と立ち上がりが確認され、竪穴住居跡と判断した。

構　造：大きさ東西（2.4）m×南北（2.8）m。床面らしい平坦面が北西隅のみ残存。北辺と西辺の立ち上がりが残っていた。軸の方向はN14°Wで本来略方形であったと考えられる。北辺東よりに50cm×55cmの焼土集中（火床）と煙道の残存部が見られ、カマドと考えられる。

カマド：遺存状況はよくない。煙道がわずかに残存し、さらに火床がある。火床には土師器、黒色土器が伴った。火床の中央部分に炭が集中する部分が見られた。

土　層：１.SB09覆土。２～３mmの粗砂粒、黄褐色土粒を含む。しまりよい褐灰色（Hue１0YR1/4）粘土質シルト。

２.SB09カマド覆土。粘性大きく、しまりよく硬い黒褐色（Hue7.5YR3/2）砂質粘土。

３.SB09カマド覆土。粘性大、しまりよく硬い。焼土、炭を多く含む黒褐色（Hue7.5YR3/2）砂質粘土。

遺　物：いずれも土師器。１ロクロ調整の「北信型」といわれる長胴甕。２・３坏。４・５高台付坏。図化されていない遺物を含めて「武蔵型甕」および須恵器類は存在していない。３・４は内面黒色処理が省略され、さらに２～４の坏類に内面ミガキを意っている。

時　期：平安時代10世紀前半段階、より第２四半期に近い時期か。

竪穴住居跡SB12（遺構第22図）　位置V14・15

検　出：表土除去後、方形の黒色土の落ち込みとそれに伴うと思われる焼土集中が３箇所認められた。軸に直交する形で先行トレンチを設定したところ、土層断面から床面と思われる平坦面と立ち上がりが認められたので竪穴住居跡と判断した。

構　造：大きさ東西4.8m×南北（3.5）m、長軸方向はW19°Nで略長方形を呈す。北辺の立ち上がりは明瞭で、これに沿って溝が巡る。床面は貼床であるが、南半は削平されている。北辺中央に焼土集中部分があり、カマド火床の残存部分であろう。北東隅と北西隅の小土坑はあるいは柱穴か。

カマド：遺存状況はよくない。煙道は検出できなかった。火床とカマド構築材と考えられる石塊が両袖に残っている。

土　層：１.SB12覆土。しまりよく硬い黒褐色（Hue7.5YR3/1）砂礫混シルト質粘土。

２.SB12周溝覆土。軟らかく粘性大きくしまりはよくない、１層に比べ還元化されている

灰褐色（Hue7.5YR4/2）粘土。

3.SB13覆土。しまりよく硬い黒褐色（Hue7.5YR3/2）砂質粘土。

4.SB13周溝覆土。3層より基盤のⅥ層をブロック状に多く含む黒褐色（Hue7.5YR3/2）砂質粘土。

5.SB12・SB13床土。粘性大きく、基盤のⅥ層をブロック状に多く含み、かなり硬い暗褐色（Hue7.5YR3/4）砂礫混粘土。

6.基本土層Ⅴ層。黒褐色（Hue7.5YR3/1）砂礫混シルト質粘土。縄文土器、打製石斧片を含む。

切り合い：古代SB13に切られる。

遺　物：図化できるような遺物はない。

時　期：古代か

竪穴住居跡SB13（遺構第22図）　位置V14・15

検　出：古代SB12の土層断面を観察ところ、SB12覆土を切る形の立ち上がりと平坦面が認められた。さらにSB12の床面を精査していたところ、SB12の床面を切る溝と床面が検出された。よってSB12を切る竪穴住居跡があると判断した。

構　造：大きさ東西3.8m×南北2.8m。略長方形を呈する。長軸方向はW17°E。北辺の立ち上がりは明瞭で、これに沿って溝が巡る。床面は貼床で比較的残りはよいが、南辺は削平著しい。住居跡中央と東辺中央にそれぞれ焼土集中がある。

焼土集中：焼土集中は2箇所ある。SF01の大きさは0.7×0.6m、SF02は1.0×0.8mで中央にそれぞれ径0.4～0.6mのとくに硬く焼けている部分が残る。SF01はSB13の東辺中央に位置するが、SF02はSB13のほぼ中央に位置すること、カマド構築材と考えられるものがまったく検出できなかったこと、さらにSB13に伴った形で出土しているわけではないが、高温で焼成され変形された土器、鉄滓や炉壁の一部が本遺跡では出土していることを合わせて考えるとこれらは鍛冶もしくは製鉄関連施設の痕跡の可能性もある。とくに焼成変形土器、鉄滓や炉壁がこの遺構に伴うものであったとすれば、非常に高い温度を受けていること、鉄滓の構造が粗く、炉壁も対応するようにスサを多く含んでいて、粗い作りをしていることや検出時に磁石で精査したが、自然砂鉄は多く見つかるが、鍛造剥片をまったく検出されなかったことを考えると鍛冶関連施設というよりは製鉄関連施設の可能性が高い。

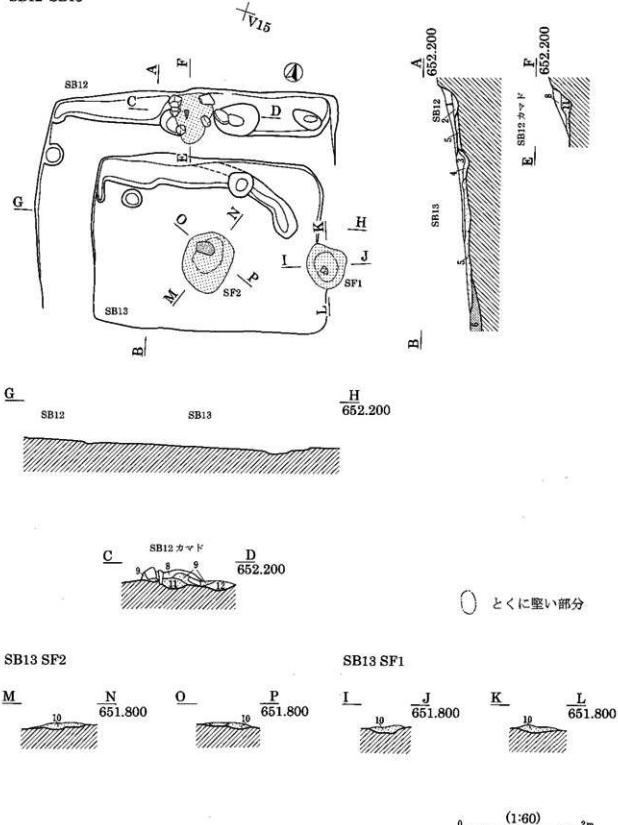
土　層：SB12土層の項目参照。

切り合い：古代SB12を切る。

遺　物：図化できるような遺物はない。

時　期：古代か。

SB12・SB13

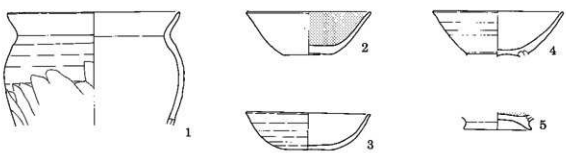


第22図　SB12・SB13

SB01

SB06

SB09



SK067

第23図　SB01・SB06・SB09・SK067　出土土器

2　掘立柱建物跡

いずれも表土除去後、遺物包含層（Ⅲ～Ⅴ層）を精査しながらⅥ層上面まで掘り下げた段階で検出されている。掘立柱建物跡に伴う明確な遺物はないが、柱穴の土層の土壌化が進んでいて、中近世の遺構の覆土とは一応区別できるⅣ層ないしⅤ層起源の黒色土であることと本遺跡の古代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡と軸が揃うものがあることを根拠として、掘立柱建物跡を古代に属するものとした。ただし、近接する類似した柱穴と思われる小土坑からは中世の遺物も含まれているので、あるいは中世に下るものを含めているかもしれない。

掘立柱建物跡ST02（第24図）　位置W3・8

側柱式で、梁行・桁行は1×2柱間、大きさ東西2.4m×南北3.5m。棟軸はN8°E。東側に位置するST04と軸方向が揃う。柱穴は、径20～40cmの略円形を呈す。

掘立柱建物跡ST03（第24図）　位置W3・4

側柱式で、梁行・桁行は1×2柱間、大きさ東西2.2m×南北3.4m。棟軸はN44°W。柱穴は、径20～30

cmの円形ないし、長辺35cmの隅丸方形を呈す。遺構検出面より深さ15～25cmを測る。ST02とプランが重複するが切り合い関係はわからない。

掘立柱建物跡ST04（第25図）　位置W4・9

側柱式で、梁行・桁行は1×2柱間、大きさ東西3.2m×南北4.6m。棟軸はW2°N。柱穴は、径20～25cmの円形、長径40cmの楕円形、長辺35cmの隅丸方形を呈す。深さは遺構検出面より12～25cmを測る。北隣のST05と軸方向が一致し、西隣のST02と軸および南辺がほぼ一致する。

掘立柱建物跡ST05（第25図）　位置W4・5

側柱式で、梁行・桁行は1×2柱間、大きさ東西2.3m×南北4.0m。棟軸はW3°N。柱穴は、径15～30cmの円形または隅丸方形、長径35cmの楕円形を呈す。深さは遺構検出面より7～20cmを測る。南隣のST04と主軸方向が一致する。

掘立柱建物跡ST06（第26図）　位置W4・5・10

側柱式で、梁行・桁行は2×2柱間、大きさ東西4.0m×南北5.1m。棟軸はN28°E。柱穴は、径15～35cmの円形または長径30～40cmのやや角張った楕円形を呈す。深さは遺構検出面より5～45cmを測る。北隣のST07と軸方向と東辺が揃う。

掘立柱建物跡ST07（第27図）　位置R25・W5

側柱式で、梁行・桁行は1×2柱間、大きさ東西3.4m×南北2.4m。棟軸はW26°N。柱穴は、径20～25cmの円形または長径60cmの楕円形を呈す。深さは遺構検出面から15～50cmを測る。南隣のST06と軸方向および西辺が揃う。

掘立柱建物跡ST08（第28図）　位置S24

側柱式で、梁行・桁行は2×2柱間、大きさ東西4.1m×南北5.2m。棟軸N1°E。柱穴は、径20～25cmの円形または長径35cmの楕円形を呈す。深さは遺構検出面より10～45cmを測る。発掘担当者所見によると北東隅の柱穴から、須恵器蓋が出土しているという。

掘立柱建物跡ST09（第29図）　位置U15・20・V16

側柱式で、梁行・桁行は2×2柱間、大きさ東西4.2m×南北5.0m。棟軸N30°W。柱穴は、径35～45cmの円形・楕円形あるいは長辺40cmの隅丸方形を呈す。深さは遺構検出面より10～30cmを測る。

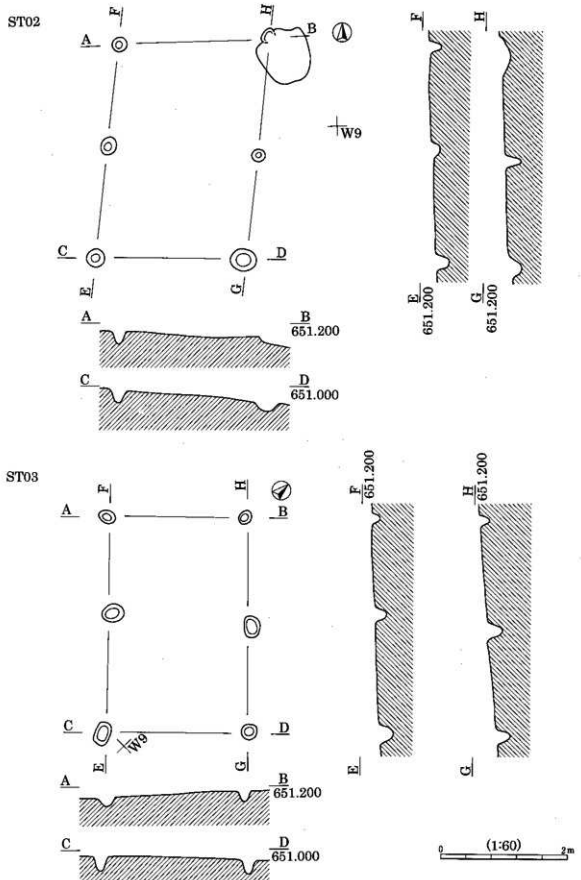
掘立柱建物跡ST10（第27図）　位置V9・10

側柱式で、梁行・桁行は1×2柱間、大きさ東西4.9m×南北3.0m。棟軸E34°N。柱穴は、長径30～45cmの楕円形または一辺25cmの隅丸方形を呈す。深さは遺構検出面より15～45cmを測る。南隣のST11と軸が一致する。ST10の東辺がST11南北軸の延長上にある。

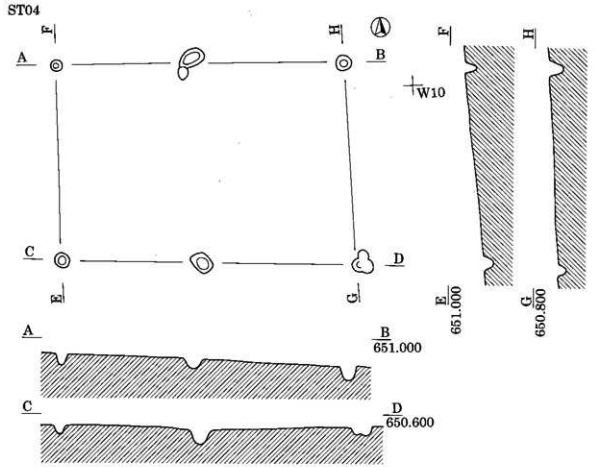
土　層：柱痕は見られず、黒色土の単層。

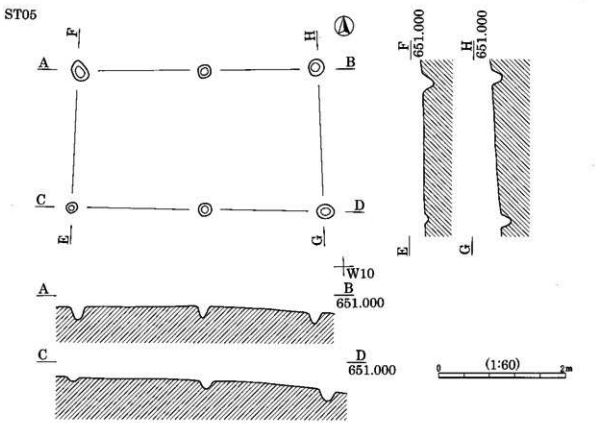
掘立柱建物跡ST11（第30図）　位置V9・10

構　造：側柱式で、梁行・桁行は1×2柱間、大きさ東西5.0m×南北2.5m。棟軸E34°N。柱穴は、直

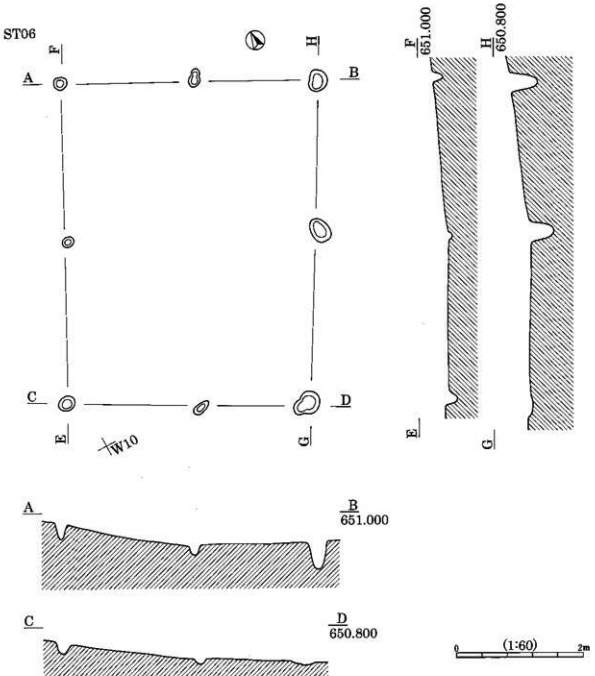


第24図　ST02・ST03

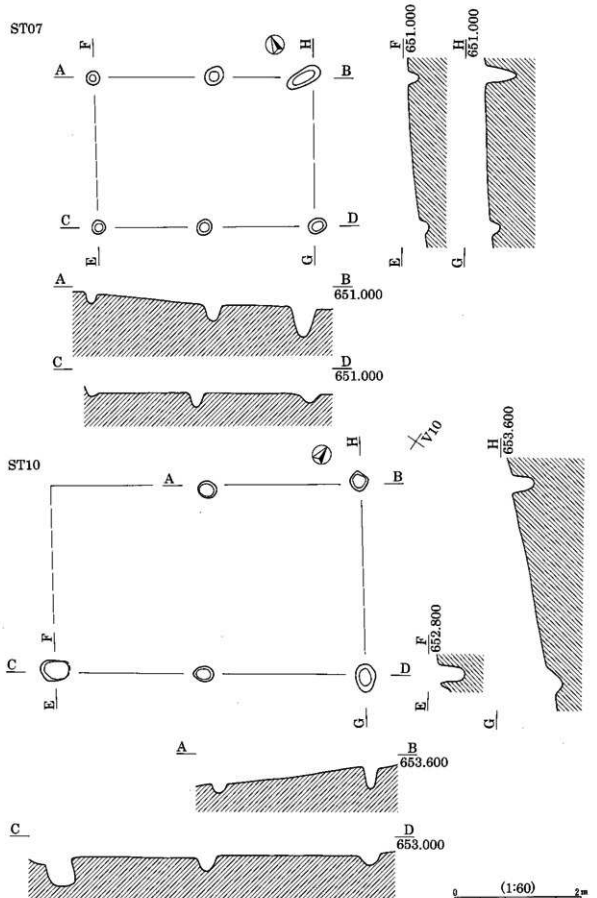




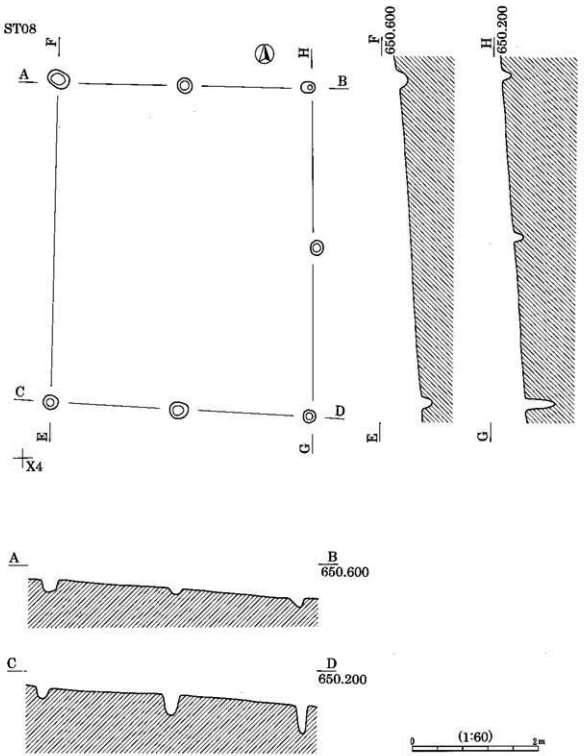
第25図　ST04・ST05


ST06
F
H
A
B
C
D
E
G
W10
F
651.000
H
650.800
E
G
A
B
651.000
C
D
650.800
(1:60)
0
2m

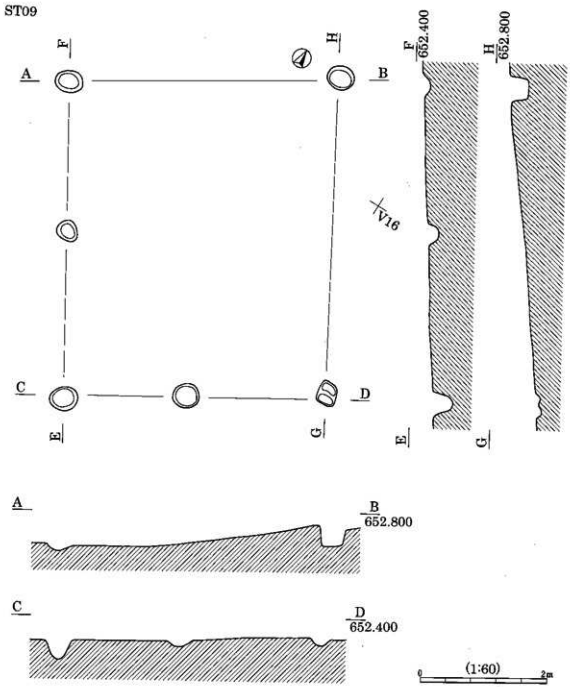
第26図　ST06



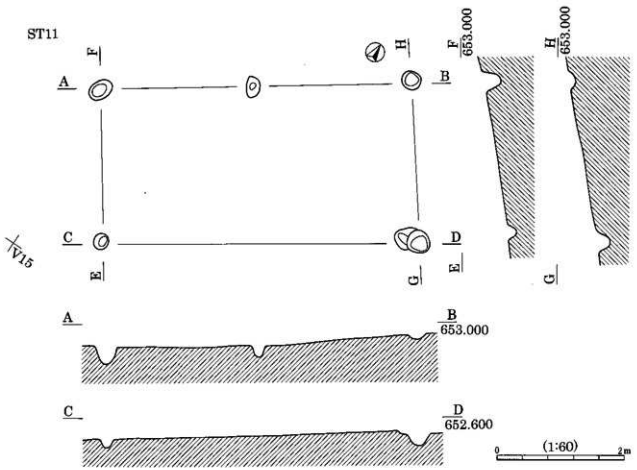
第27図　ST07・ST10



第28図　ST08



第29図　ST09



第30図　ST11

径25～40cmの円形または長径45cmの楕円形を呈す。深さは遺構検出面より8～30cmを測る。北隣のST10と軸が一致する。ST11の西辺はST10の南北軸の延長上にある。

土　層：柱痕は見られず、黒色土の単層。

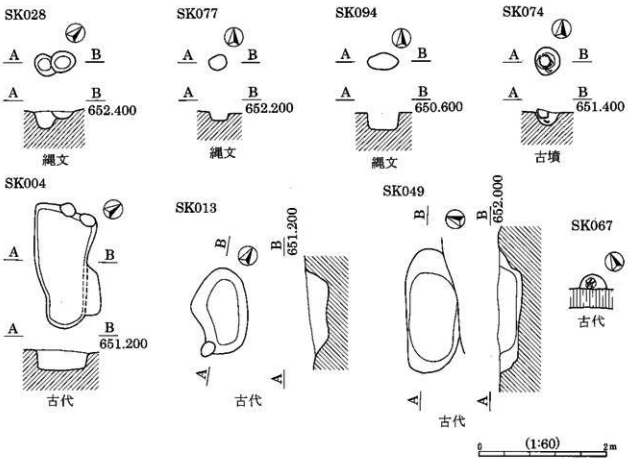
3　土　坑

土坑SK067（遺構第31図・土器第23図）　　位置W5

構　造：大きさ0.5×(0.3)m。略円形を呈す。西南側を暗渠排水に切られる。

遺　物：1須恵器坏蓋。焼成は良好、火襷も顕著に残っている。ツマミの形態からすると9世紀前半の可能性が高いが、8世紀後半に遡る可能性もある。

時　期：奈良時代後半から平安時代前期8世紀後半から9世紀前半。



第31図　縄文・古墳・古代のSK

第4節　中世以降

1　土坑（遺構第32図・土器第33図）

本遺跡の400基を超える小土坑（第7・8図）の多くはいずれも基本土層Ⅲ層起源の土を覆土していることから中近世の所産と考えられるが、時期を比定できるような明確な遺物を伴っているものは、少ない。ここでは、伴出した遺物および土層から中世以降のものと考えられる土坑を取り上げた。

SK104・105・106の土坑はいずれも時期を特定する遺物を欠くが、覆土が中近世の遺物を多く含む遺物包含層Ⅲ層に酷似し、中世土坑SK055と軸も揃い、規模も似通っていることから、中世の土坑に含めた。

SK024　位置U19

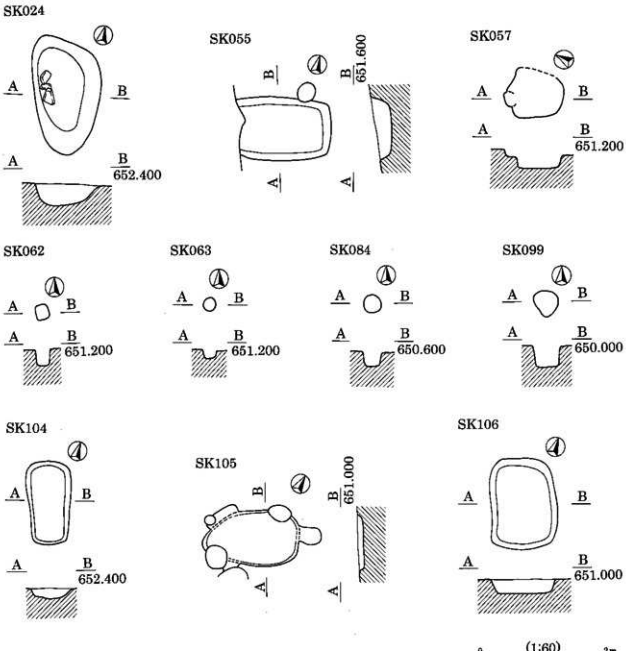
大きさ2.0×1.0m、長軸方向はN30°Wの歪んだ長円形。西辺から石塊が連なって出土した。図化できなかったが、内耳鍋が出土している。

SK055　位置W3

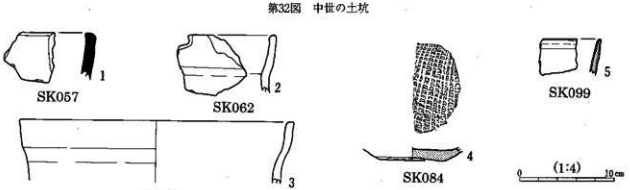
大きさ（1.4）×1.0m、長軸方向はE11°Nの略長方形。左辺は試掘トレンチで切られる。図化できなかったが、内耳鍋、施釉陶器が出土している。

SK057　位置W3

大きさ0.9×0.8m、長軸方向はN28°Wの略台形。14世紀前半の在地系で軟質の須恵質擂鉢（1）が出土している。



第32図　中世の土坑



第33図　中世の土坑出土土器

SK062　位置W 4

大きさ一辺0.25mの方形。15世紀中ごろの内耳鍋（2）が出土している。

SK063　位置W 4

大きさ径0.2mの円形。15世紀中ごろの口縁部が外反する内耳鍋（3）が出土している。

SK084　位置W 9

大きさ径0.3mの円形。14世紀代の古瀬戸卸皿（4）が出土している。

SK099　位置X 3

大きさ0.4×0.4mの不整形。14世紀後半の古瀬戸平碗（5）が出土している。

SK104　位置W 6

大きさ1.4×0.7m、長軸方向N20°Wの長方形。覆土は褐灰色（Hue10YR4/1）粘土質シルトでしまりよく、黄褐色土（Ⅵ層）をブロック状に含む。

SK105　位置W 4

大きさ1.5×1.1m、長軸方向N22°Wの長方形を呈す。

SK106　位置W 4

大きさ1.5×0.9m。長軸方向W38°Nの略長方形を呈す。

2　井戸跡・石組

井戸跡SE01（遺構第34図・土器第35図）　位置W 7・8

表土を除去した後、遺物包含層中を掘り下げていったところ、6.0×2.8mの人頭大の石塊が集中する地点が検出された。さらに掘り下げたところ、石組みの井戸であることが判明した。大きさは2.0×1.8m、長軸方向はほぼE-Wの隅丸方形。断面図を作成するために断ち割ったが、周辺土層が脆く崩落してしまったために、深さや詳細な状況は不明である。

遺　物：1波状文を有する須恵器。2布目瓦。3龍泉窯系青磁碗。1・2は古代、3は中世13世紀代。よってこの井戸が廃絶したのは中世以降と考えられる。

石組SE02（遺構第36図）　位置V14

表土を除去したのち遺物包含層を掘り下げていったところ、石組SE02が検出された。当初井戸を想定して、石組みを残して掘り下げ断ち割ったが、SE01のように石組みや落ち込みは下位には続かない。石組みおよび周辺には被熱して赤化した石塊があった。時期を決定できるような遺物は出土していないが、遺物包含層の中でも比較的高いレベルで検出されたことから古代以降の遺構と考えた。

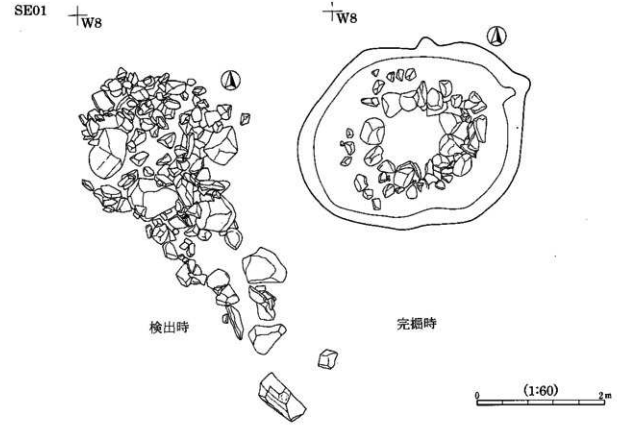
大きさは1.4×1.2m、長軸方向N26°Wの方形。覆土はしまりよく炭化物を多く含む黒褐色（Hue10YR3/2）粘土質シルト。

3　溝

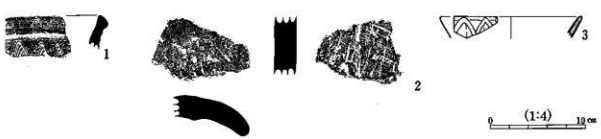
表土除去後遺物包含層Ⅲ層掘り下げ段階で、プランが検出された。覆土中には縄文土器から中世の土器までが含まれていた。土層の状況はいずれも中近世の小土坑と近似していることから中世に廃絶した遺構と考え、この節に含めた。

溝SD01（遺構第37図・遺物第38図）

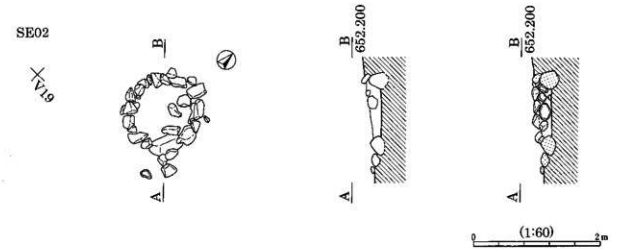
長さ7m、幅1.2～3.0m、深さは遺構検出面から0.3～0.5mを測る。東側は現村道に削平されている。西側は女石川に続くものと思われる。



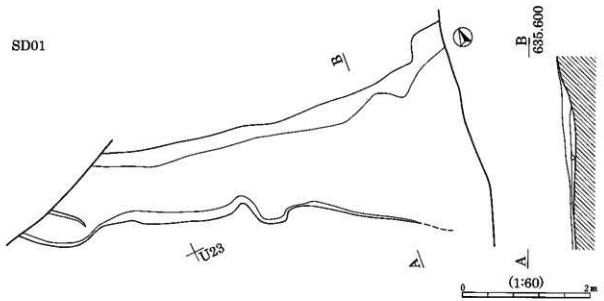
第34図　SE01



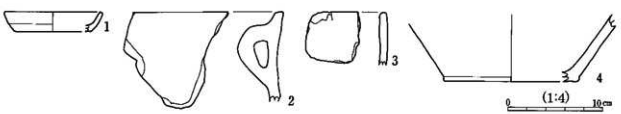
第35図　SE01　出土遺物



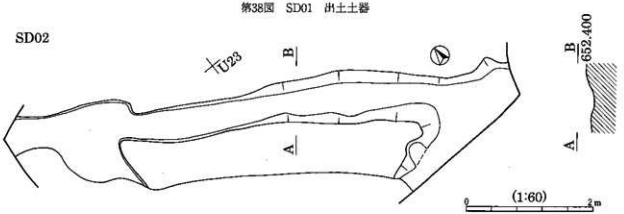
第36図　SE02



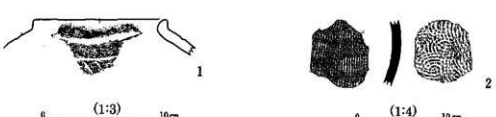
第37図　SD01



第38図　SD01　出土土器



第39図　SD02

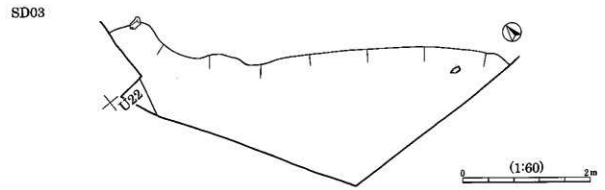


第40図　SD02　出土土器

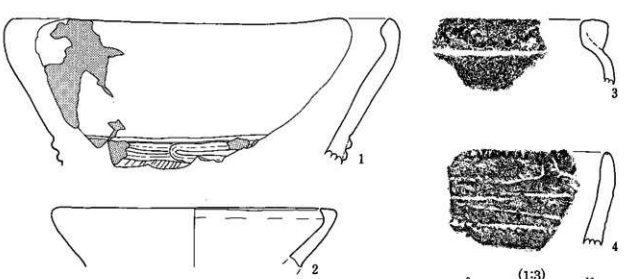
遺物：１土師質土器の皿。いわゆる「カワラケ」。２～４内耳鍋。
時期：中世後期か。

溝SD02（遺構第39図・遺物第40図）
長さ８m、幅0.6～2.0m、深さは遺構検出面から0.2～0.3mを測る。
土層：溝SD01の１層と同じ。
遺物：１縄文時代後期の注口土器か。２須恵器甕の胴部か。
時期：須恵器は古代のものであるが、土層はSD01と共通しているので、廃絶した時期は中世以降に降るものと考えられる。

溝SD03（遺構第41図・遺物第42図）
一応溝としたが、河岸段丘の端部かもしれない。遺物包含層の堆積は非常に厚く、発掘調査の安全確保のため底まで掘り切れなかった。



第41図　SD03



第42図　SD03　出土土器

遺物：1～4縄文時代中期の土器。1・2口縁部は開き、胴部は膨らまない。口縁端部は折り返したように肥厚する。曽利Ⅰ～Ⅱ式。1は区画隆帯文が胴部と口縁部を区分し、胴部には斜行沈線文が施されている。3口縁断面が方形に肥厚し、胴部が張る鉢。加曽利E1～2式。器面の剥落が著しいが、本来は丁寧に磨かれていたと思われる。かすかに赤彩の痕跡が見られる。4口縁端部に連続刻みが施される。口縁部には沈線文をなぞるように連続刻みが施される。胎土はかなり粗い。五領ヶ台Ⅱ式の最終末か。

時期：図化できた遺物は縄文土器ばかりであるが、土師質土器の破片などが覆土に含まれており、土層もSD01、SD02と共通していることから、溝や流路としての機能を失ったのは中世以降と考えた。

第5章　遺構に伴わない土器・陶磁器

第1節　縄文時代

駒込遺跡の縄文土器は、溝SD03から中期初頭の五領ヶ台式と思われる破片が1点出土しているだけで、すべて中期後葉から後期の枠に収まる。無論、これらを編年研究が進んだ隣接地域の事例から様々な解釈をし、時期的に細分することは可能かとも思われる。しかし本遺跡では中期後葉の土器が、竪穴住居跡や溝からは型式学的にやや古手の土器が出土し、V17・18グリッドを中心とした遺構外の遺物包含層からはやや新手の土器が出土していることぐらいの出土状況の傾向がつかめるだけで、遺構などにおける良好な一括資料には恵まれていない。

竪穴住居跡SB04・11や溝SD03出土土器のほか遺構外にもこれに対応する時期の土器、加曽利E1～2式期、井戸尻（八ヶ岳南麓）編年でいう曽利Ⅰ・Ⅱ式期の土器が見られるが、ここではこれらを中期後葉Ⅰ期とし、胴部磨消縄文を施す加曽利E3・4式、井戸尻編年で曽利Ⅲ～Ⅴ式期をここでは中期後葉Ⅱ期とした。Ⅱ期の資料は遺構に伴出したものはなく、いずれも遺構外遺物包含層のグリッドなどで出土した資料である。

この大別が隣接地域の土器型式編年との関係や系統の問題などについては、第9章で触れたい。

1　中期後葉Ⅰ期（曽利式系・唐草文系土器）（第43図1～5）

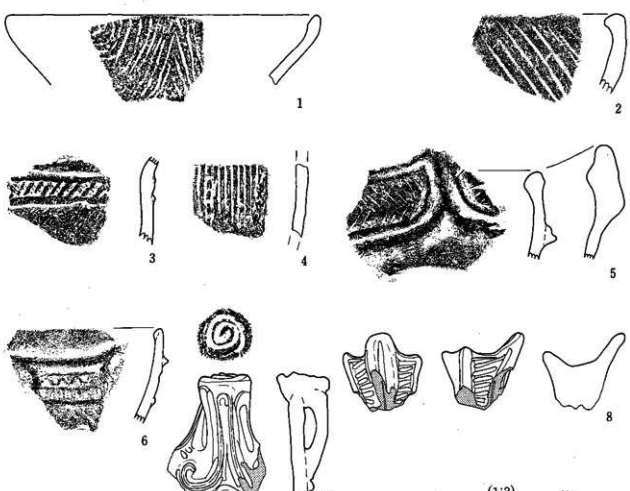
1・2口縁端部が内湾、もしくは肥厚する。口縁部は開き、斜行沈線が施される。1は連弧状のモチーフを描く。3頸部と胴部をやや細めの斜格子目の貼付文が区画する。胴部および貼付文上には縄文LRが施される。4胴部を半截竹管状工具による縦位並行沈線、結節沈線文が施される。5口縁部平行隆帯区画の中に矢羽状沈線文が施される。頸部は無文。

Ⅰ期の土器で図化できたものは、遺構内出土土器と合わせても極めて少ない。小諸市郷土遺跡や佐久市寄山遺跡などで当該期の資料が増加し、当地の様相も明らかになりつつあるが、本遺跡のみならず当該期の佐久地方の様相はいまだ不明な点が少なくない。とりあえず、曽利式系・唐草文系としてここに一括した。個別に見れば1～4曽利式系土器。5唐草文系土器か。これらは、胎土から見ると両者の間に決定的な差異は見られない上に、搬入品とも考えられない。よってここでいう曽利式系あるいは唐草文系土器のいずれも当地のいわゆる「在地」の土器である可能性も十分考えられる。

2　中期後葉Ⅱ期（第43図6～8、第44～60図）

中期後葉Ⅱ期の土器は、地文が沈線文か、縄文かで大別し、前者を唐草文系、後者を加曽利E式系と大別することもできる。しかし、近年の佐久地方を当該期の発掘調査の進展により、松本平や諏訪湖盆など中南信地方で唐草文土器の典型的な器種である樽形の土器は佐久平を始めとする東信地方ではむしろ少数派である。胴部の隆帯や沈線による区画文の中を沈線文で充填していくという手法は、いわゆる唐草文土器と共通している。しかし、文様帯の構成は隆帯などで区画された口縁部文様帯をもち、胴部も基本的に縦位区画を意識した意匠をもっていて、器形はバケツ形や緩やかなキャリパー形を基本とした深鉢形土器であることは、いわゆる唐草文土器にその淵源を求めることは難しく、加曽利E式の特徴そのものとは言えないにしろ、その影響を深く受けたものと考えざるを得ない。無論、隆帯で区画し、沈線で充填するという手法自体は唐草文土器の手法を引き継いではいると思われるが、本遺跡を始めとして、中南信地方でいわれている唐草文土器とは一線を画す地文の充填沈線が弧状を描くことやU字もしくは逆U字状の胴部区画の意匠など独自要素が見られ、これらを引き続き唐草文土器もしくは唐草文系土器と呼称するのはためらわれる。これらを百瀬忠幸は「鱗状短沈線文を地文とする佐久地方に主体的分布を見せる土器」であることから「佐久系土器」と仮称したが（百瀬1991）、「佐久系」という土器型式名としては、適当ではないという小林真寿や桜井秀雄らの指摘（桜井2000）を鑑み、ここではこれらをⅠ群土器と分類した。

また、当該期の縄文を地文とし、胴部には磨消縄文を施す一群の土器は、胎土は、色調は赤味がかっていて、焼成はやや硬質で、基面調整の磨きも丁寧であるので、Ⅰ群土器とは容易に判別できる。これら



第43図　中期後葉曽利式系・唐草文系土器

をとりあえずⅡ群土器としてまとめた。このⅡ群土器は、関東地方でいう加曽利E式の特徴を備えているが、本遺跡出土資料の大半は胎土が施く、器形も変化に乏しく、ずん胴な形態をしている。こうした特徴はあるいは佐久地方や中央高地の特性であるのかもしれない。

よって、以下唐草文系土器、Ⅰ群土器（鱗状短沈線文を地文とする土器・「佐久系土器」）、Ⅱ群土器（加曽利E式系土器）に分けて記述する。

桜井秀雄2000「郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19－小諸市内３－本文編』長野県埋蔵文化財センター
百瀬忠幸1991「吹付遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２－佐久市内その２－』長野県埋蔵文化財センター

唐草文系土器（第43図６～８）

６口縁部の区画文様帯内に交互刺突文を施す。７・８口縁部の把手。７頂部に渦巻文を施す。８縦位区画沈線内を横位沈線で充填する。いずれも胎土の様相はどちらかといえば中期後葉Ⅰ期の土器と似ていて、後述するⅠ群土器とは異なる。

Ⅰ群土器（鱗状短沈線文を地文とする土器・「佐久系土器」）（第44～55図）

本群の土器の全体的な特徴としては、胎土が全体に脆く、色調は乳白色がかっている。後述のⅡ群土器（加曽利E式系土器）に比べ、軟質である傾向がある。器形は、深鉢形土器（１～23、26～61）が主体で、鉢形土器（24・25）、浅鉢形土器（第60図１）が見られる。

口縁部文様帯をもつもの（１～23、26～53）とないもの（24・25・54）とに、また胴部の区画手法に注目すれば沈線で区画するもの（１～13）と隆帯で区画するもの（14～25）などに区分することもできる。以下器形、施文方法、意匠などに着目してA～F類までに分類した。

A類：幅広肥厚した口縁部文様帯を持つ深鉢形土器（１～11）

口縁端部の無文部が５㎝程度と広い。また隆帯もしくは沈線で渦巻文が単位文様として施され、波頂や胴部の単位文様とおおよそ一致している。この口縁部単位文様の渦巻文の間には渦巻文を取り込んだ形の横長の勾玉状の区画文が配置される。この横長の区画文は短斜行弧状沈線が充填される。

１～11胴部が平行沈線によってU字もしくは逆U字状に区画される。いわゆる田の字区画。U字区画中央には蛇行沈線文が擬走し、さらに間隙に短弧状沈線文（鱗状短沈線文）が充填される。また、口縁部文様帯の渦巻文に対応して、胴部中央にも渦巻沈線文が配置されている。

１～６口縁部が平縁もしくは波状であってもきわめて緩やかなもの。６は底部に網代痕をナデ消した痕跡が見られる。７～11は口縁部が波状を呈するもの。７と８、10と11は法量、胎土、施文工具などが酷似しており、同一個体かもしれない。胴部の区画文は１～６とほぼ同一意匠である。若干蛇行沈線や区画内に充填された鱗状短沈線は直線的である。

B類：直立した口縁部で胴部は斜行沈線のみが施されている深鉢形土器（12・13）

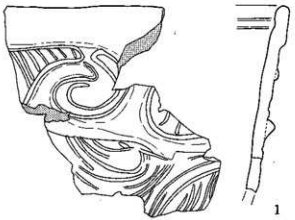
胴部の斜行沈線は複合鋸歯状の意匠をとっている。13口縁部が欠損している。

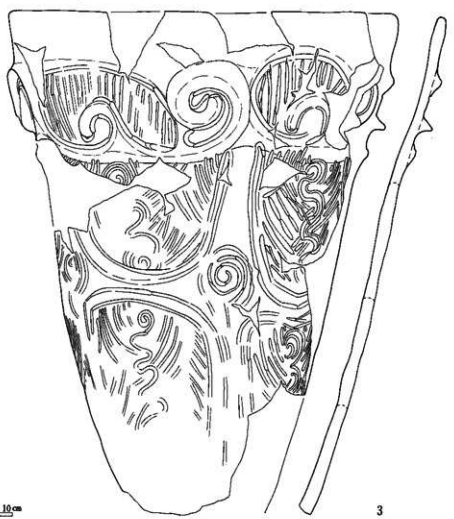
C類：口縁部がやや内湾し、胴部が刻目隆帯文で区画される深鉢形土器（14～17）

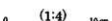
14と15、16と17は法量、胎土、施文工具などが酷似しており、おそらく同一個体。口縁部は平縁もしくは緩やかな波状を呈する。16・17の器形をみると胴部は若干膨らむ器形をしているものと考えられる。波頂部と口縁部渦巻文にほぼ対応して、直下の胴部に円形の隆帯文が貼付され、さらに垂下する刻目隆帯文が施される。刻目隆帯による区画の中央に平行沈線が配され、間隙を鱗状短沈線文が充填される。

D類：胴部が隆帯文で区画がされる深鉢形土器（18～23）

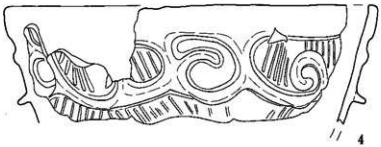
18～23は同一個体か。接合はしなかったが、胎土が酷似している。口縁部の渦巻文がそのまま垂下して蛇行隆帯文となる。胴部はU字形の隆帯文で区画されて、蛇行隆帯文が区画の中央に配される意匠をとる。区画隆帯文の間隙を短斜行沈線文が充填している。器高は30㎝程度とA～C類がいずれも40～50㎝程度と

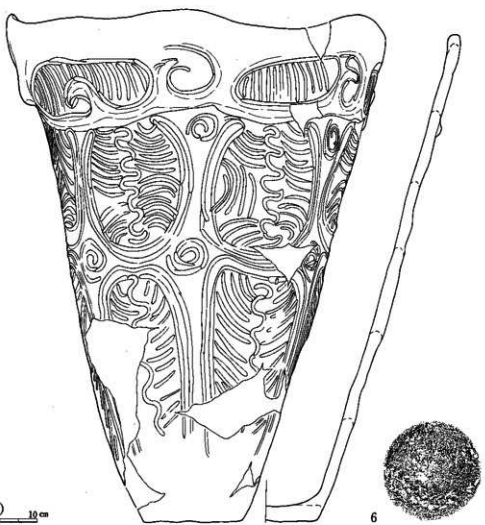




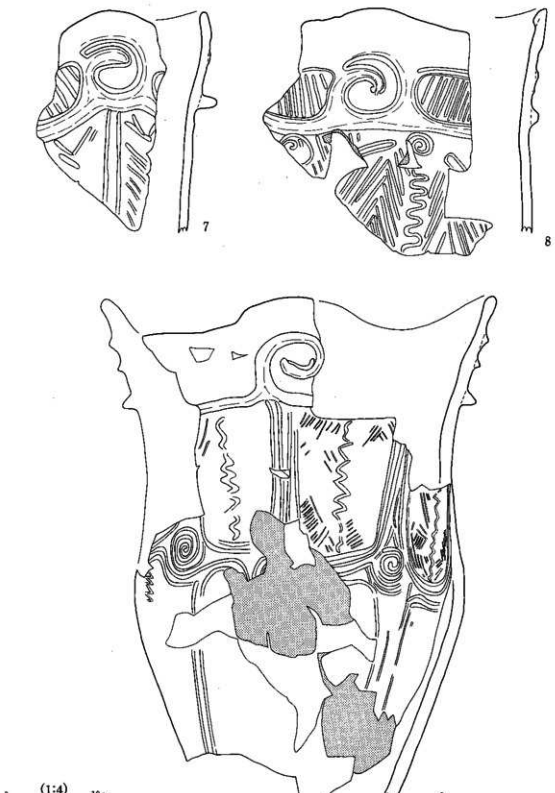


第44図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）1

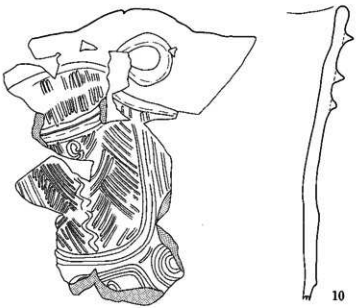


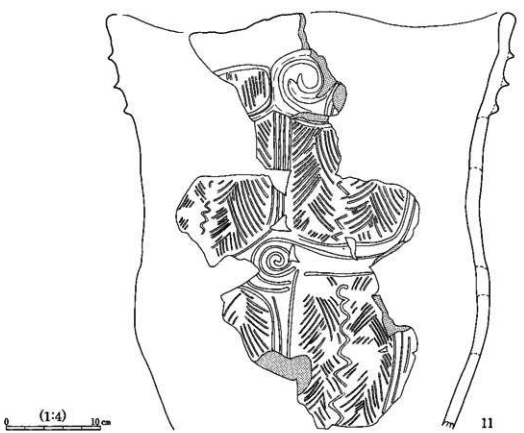


第45図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）2

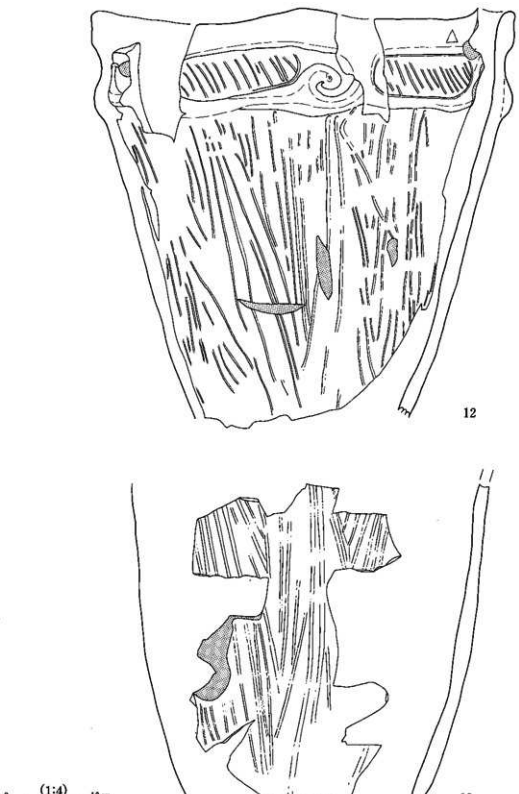


第46図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）３

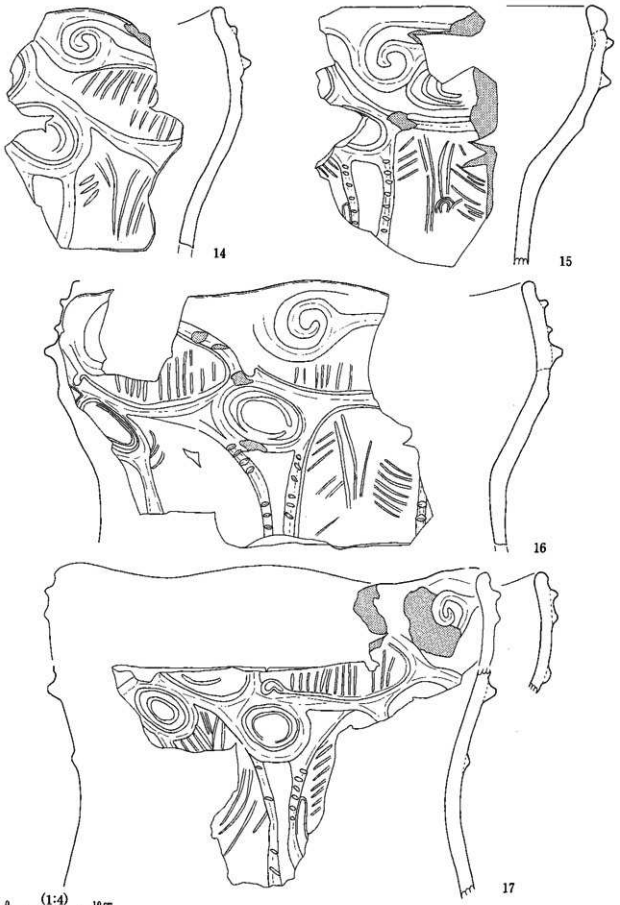




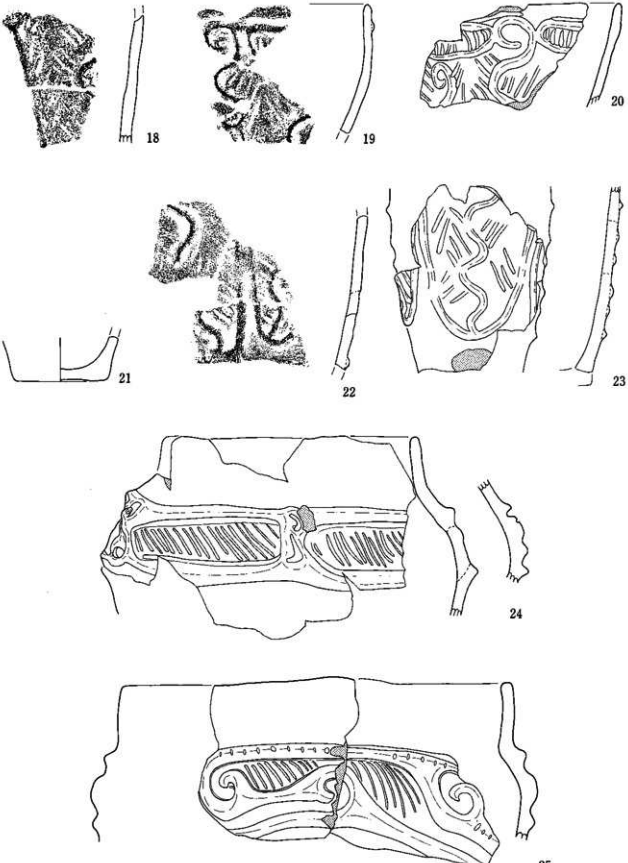
第47図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）4



第48図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）5



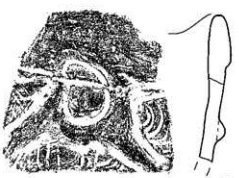
第49図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）6



第50図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）7

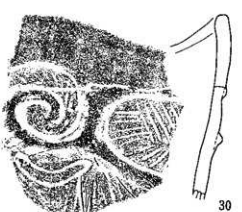
26

27



28

29



30

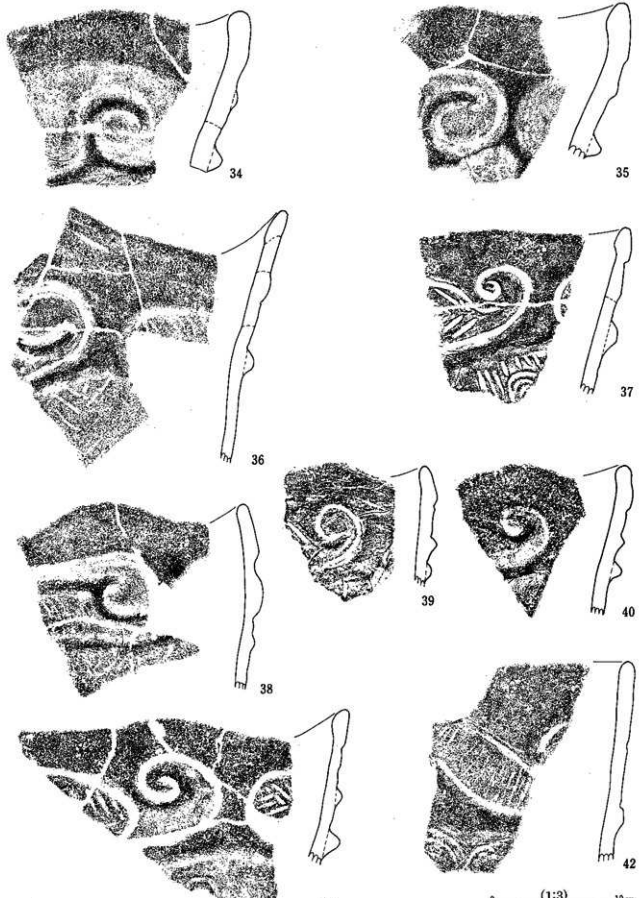
32

31

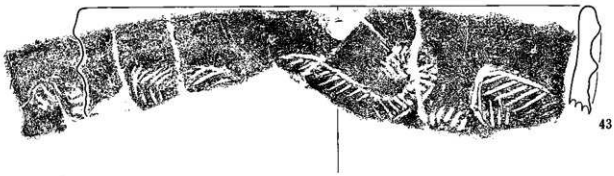
33

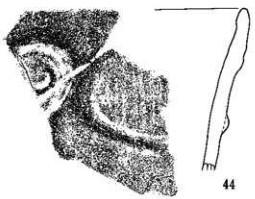
0　(1:3)　10cm

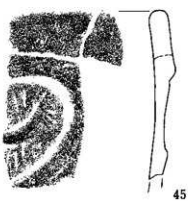
第51図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）8

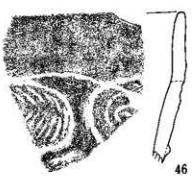


第52図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）９

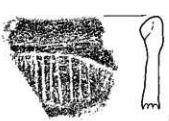

43

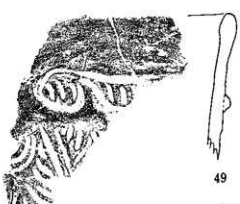

44


45


46

47

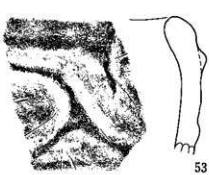

48


49

50

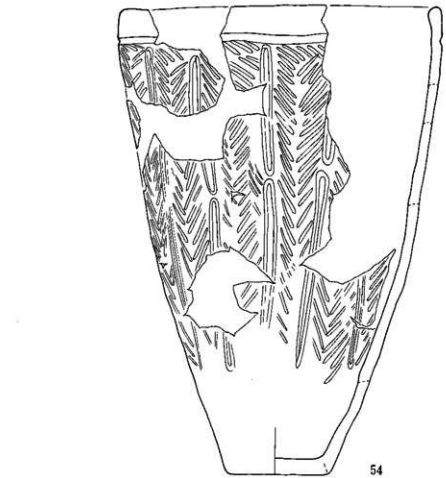
51

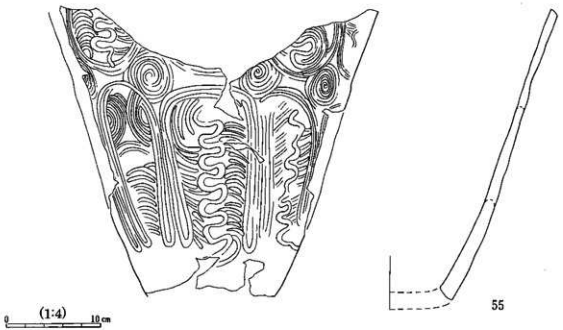
52


53

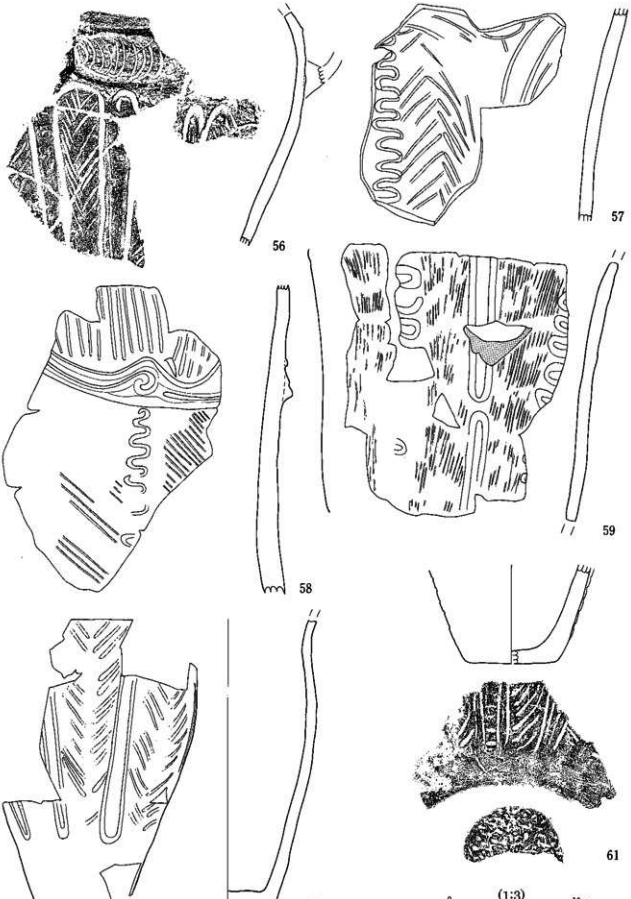
0　(1:3)　10cm

第53図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）10





第54図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）11



第55図　中期後葉Ⅱ期（Ⅰ群土器）12

大きいのに比べて小型である。

E類：鉢形土器（24・25）

口縁部は直立し無文で、胴部が張る鉢形土器。胴部には深鉢形土器A～D類の口縁部文様帯の意匠である渦巻文が単位文様として配され、渦巻文を繋ぐように隆帯が横長に区画している。さらに区画内を鱗状斜行短沈線が充填されている。24平縁で渦巻文は非常に簡略化されている。25基本的に平縁であるが、部分的に口縁部が波状を呈している。隆帯上にはかすかに刻みが見られる。

A～D類の口縁部（26～53）

口縁部文様帯をもつ深鉢形土器。26・29・30はC類、それ以外はおそらくほとんどA類が占めると思われるが、口縁部のみでの細分は難しいので、本項目に一括した。43口縁部文様帯に横長の渦巻文を取り込んだ勾玉状楕円形区画沈線文が施される。区画内には矢羽状沈線文が充填される。49・51・52も同様な意匠か。51・52口径は復元できなかったが、おそらく口径20～30cm程度の小型の深鉢形土器。同一個体だろう。

F類：口縁部文様帯を持たない深鉢形土器（54）

あきらかに無いと認定できるものは54の1点だけであるが、60のように胴部だけになったもののようにいくつかは存在している可能性が高い。口縁直下に沈線文がめぐり、胴部は縦位に平行沈線文で区画され、矢羽状短沈線文が充填される。幅広に肥厚した口縁部文様帯を持つものとは年代差であると考えられるが、本遺跡では出土状況に差異は特に認められない。

胴部もしくは底部破片（55～61）

55はA類、60はF類か。これも各類に峻別するのは難しいので、本項目に一括した。56橋状把手が口縁部につくもの。胴部は縦長の楕円区画内を縦位矢羽状沈線文が充填されている。鉢形土器か。57・58縦位蛇行沈線文で区画され、斜行沈線が地文のもの。59蛇行沈線文と対向する縦長のU字状沈線文で区画され、条線文が地文に施される。60縦長の楕円沈線文が区画し、縦位の矢羽状沈線文が充填される。61刻目隆帯文や平行沈線文が垂下し、区画する。斜行沈線文が充填される。底部には網代痕が残る。

Ⅱ群土器（加曽利E式系土器）（第56～59図）

器形は深鉢形土器（第56～58図62～92）、鉢（82・93）ないし壺形土器（第59図1～3、14）がある。また深鉢形土器には平縁（第56図62～72）と波状口縁（第57図73～81、83～85）が存在する。地文は縄文で、口縁部は隆帯もしくは沈線で横長に区画し、胴部は縦位に沈線で区画した磨消縄文を施した深鉢形土器が主体である。また、これ以外の手法の土器でも加曽利E式の組成をなすとみなされるものはここに含めた。

平縁の深鉢形土器（第56図62～72）

口縁部は隆帯で基本的に横長の楕円形に区画し、縄文を区画内に充填する。62・64・66本来単位文様として独立していた渦巻文を取り込んだ形の勾玉状の楕円区画文が施される。62・64は同一個体だろう。68・71幅広の低隆帯が眼鏡状に区画する。胴部は縦位の沈線で区画し、無文部分は縄文施文部分とほぼ同じ位の面積を占める磨消縄文。

波状口縁の深鉢形土器（第57図73～81、83～85）

73～79渦巻部分が楕円区画化する。80小波状口縁を呈す。口縁部は隆帯で区画され。胴部は地文の縄文の上を縦長の楕円文を施す。81・83～85口縁部の把手（突起）。

鉢形土器（第57図82、第53図93）

82口縁部が内側に屈曲する。横長の楕円区画内を単節回転縄文が充填される。93橋状把手。口縁部は外

反し、頸部が内傾する器形。頸部は上下の屈曲部に窓枠状に隆帯を貼付し、単節回転縄文が充填される。

壺形土器（第59図1～3、14）

1～3同一個体。全体に丁寧に磨かれ、かすかに内外に赤彩の痕跡が残る。口縁部は無文で直立する。頸部に横状の把手が胴部は張る器形。10㎜を超えるやや幅広の凹線文が胴部に施される。14甕形の壺形土器の胴部把手。縦位に穿孔される。

その他の土器（第59図4～13）

以上の分類には含まれないが、Ⅱ群土器に伴出し、組成をなすと思われる土器をここに一括した。4沈線で縦位に区画し、簇状工具による蛇行条線文が施される。5緩い波状口縁。波状口縁に沿う平行沈線文と波状ないし連弧状の平行沈線文が施される。6～8把手（突起）。6逆S字状沈線文が施された橋状把手。7口縁部のX字状の突起。8いわゆる大型甕形土器胴部のX字状の把手か。9～13列点文が施される土器。9は下端に列点文が施され、その部分で欠損している。9・10地文縄文で連弧状あるいは波状の磨消部分を意匠とする。11・12地文はなく、列点文のみが口縁部に施される。11は端部が欠損か。13器形不明。全体にかなり摩滅している。図は深鉢形土器の口縁部の突起をイメージして図化したが、あるいは浅鉢かもしれない。区画沈線文内に列点文が施される。また縦位隆帯上を浅く連続して刻む。

浅鉢（第60図）

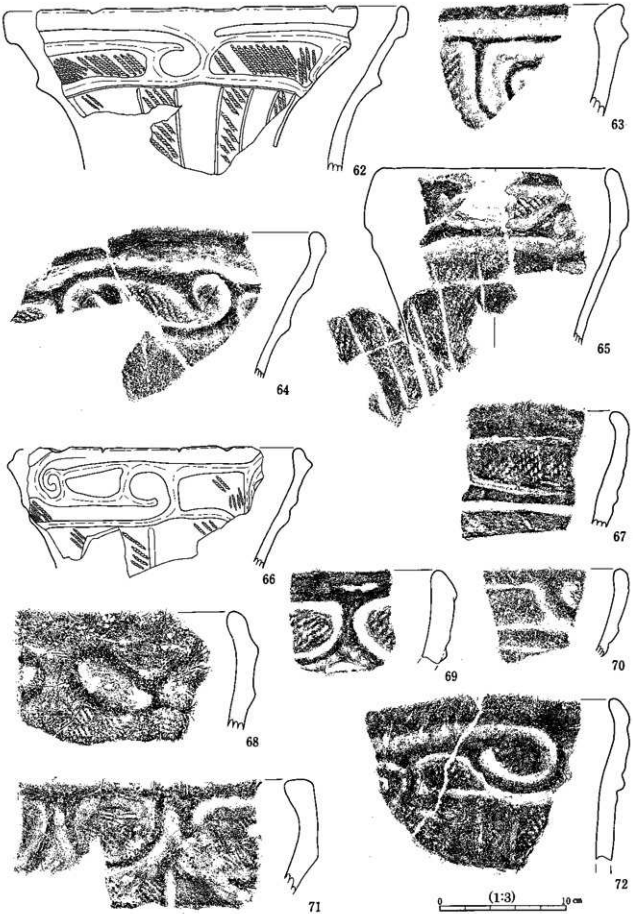
1口縁部が屈曲し、端部が若干肥厚する。2口縁部内面に断面三角形の隆帯が1条貼付される。口縁端部は若干内湾する。1・2ともに詳細な時期を決定する要素に欠けるが、胎土が黄褐色でやや軟質な特徴は中期後葉Ⅰ群土器にもっとも似てはいる。ただし、2のような口縁部内面に隆帯を巡らせるような浅鉢は当該期には知られていない。あるいは後期中葉加曽利B式に伴う可能性もある。

3　後期（第61図）

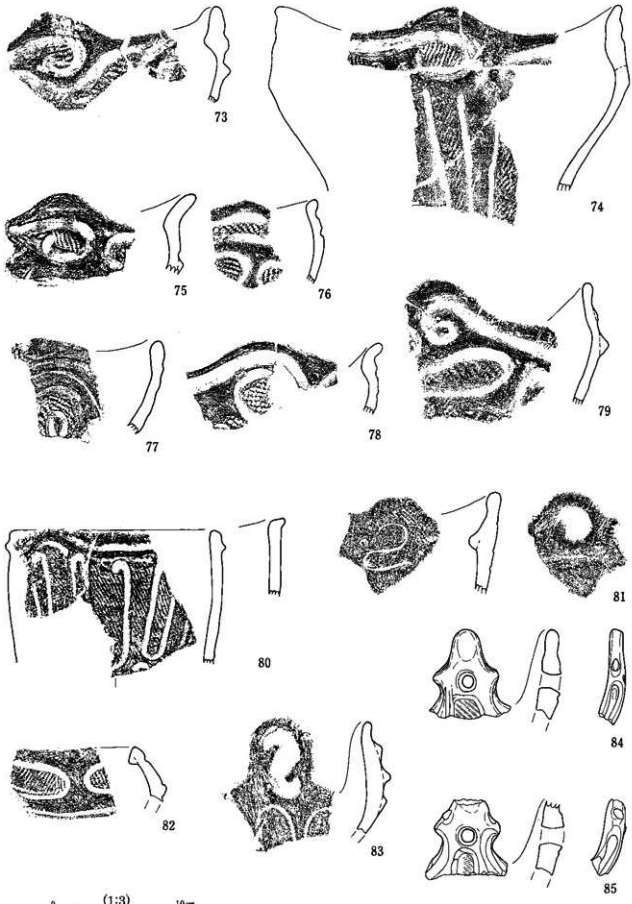
1堀之内1式成立段階の鉢形土器。頸部は無文で、胴部上端に中心に刺突がある円形浮文が施される。胴部は磨消縄文。2・3網代痕のある底部。3堀之内式の小型鉢形土器の底部か。2はあるいは中期後葉に遡る可能性もあるが、ここに含めた。4・5ミニチュア土器の底部。

4　土偶・土製品（第62図）

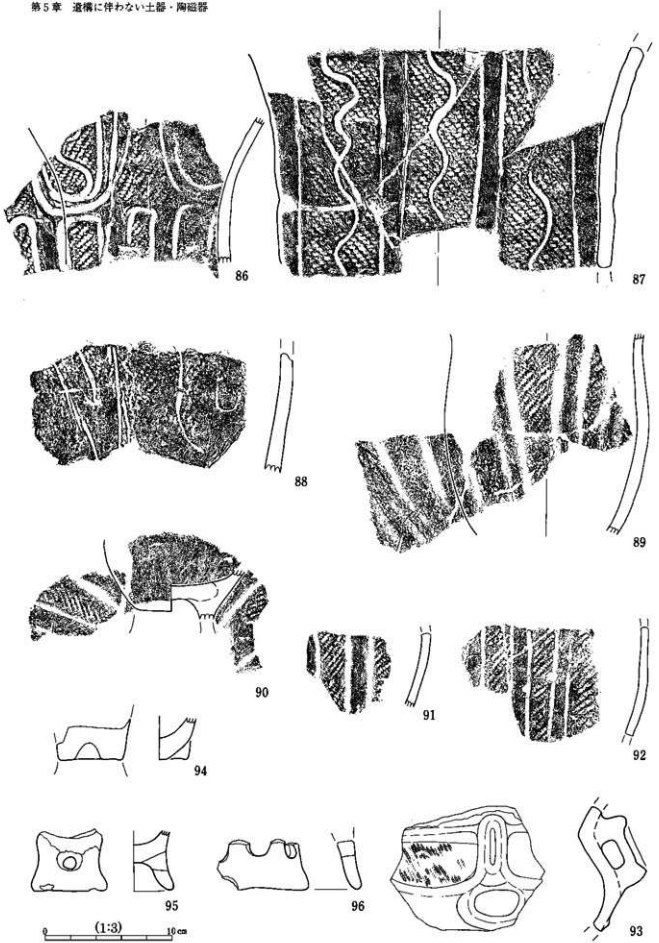
1～3土偶。1胴部上端が欠損。胴部中央に円形浮文が施される。2頭部、胴部下半、両手欠損した胸部。乳房の表現がある。側面および背面にかすかに沈線文が施される。3脚部か。4～6土製品。4頂部に渦巻文、側面に平行沈線文が施される。5土鈴か。摩滅が著しいが、かすかに表面に沈線文と刺突文が見られる。6耳栓。



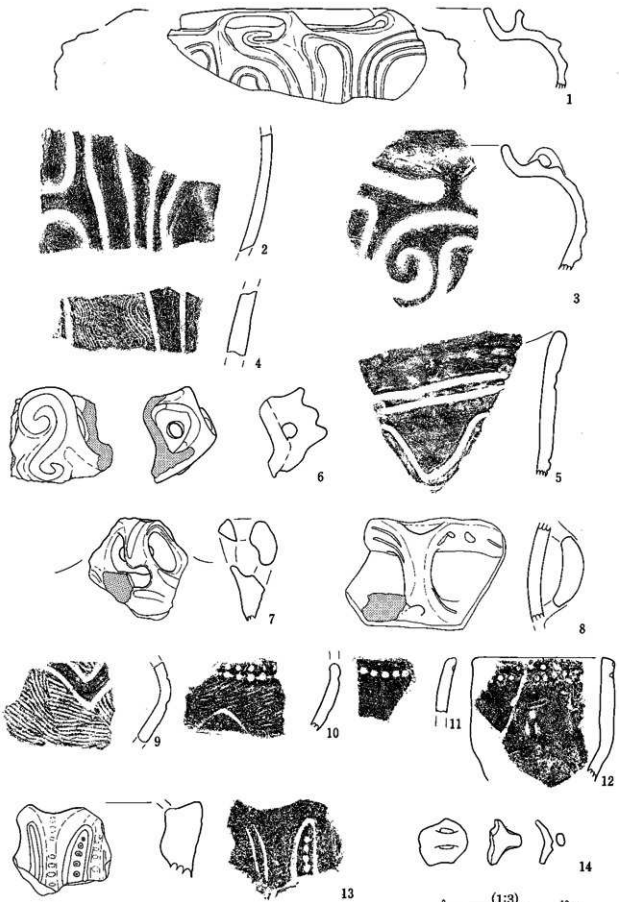
第56図　中期後葉Ⅱ期（Ⅱ群土器）１



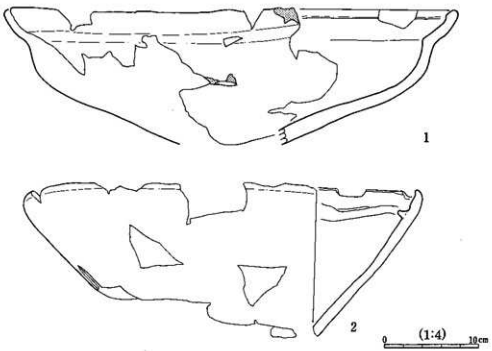
第57図　中期後葉Ⅱ期（Ⅱ群土器）2



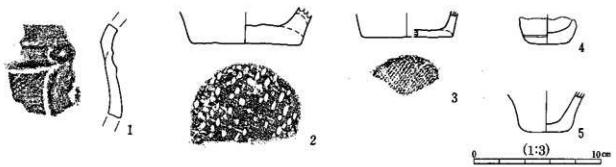
第58図　中期後葉Ⅱ期（Ⅱ群土器）３



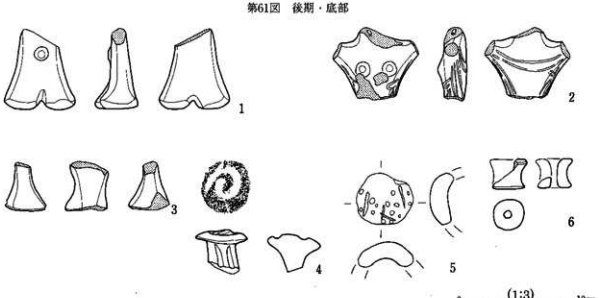
第59図　中期後葉Ⅱ期（Ⅱ群土器）4



第60図　浅鉢



第61図　後期・底部



第62図　土偶・土製品

第2節　古墳時代以降

古墳時代以降中近世までの土器陶磁器（第63図）

1～18土師器・土師質土器

1～5古墳時代土師器。1小型丸底鉢。2小型丸底壺。1は完全な在地の模倣品、2はヨコナデや細いミガキが施された精製品である。古墳時代前期後半と考えられるが、中期初頭の可能性も考えられる。3～5は高坏の脚部で、3・4は古墳時代中期中葉、5は古墳時代後期初頭のものであろう。

6～12古代土師器。6土師質椀か盤の一種と考えられるが、内面黒色処理およびミガキは行われず、かなり高めの足高高台が付加されるらしい。一般的な当該器種の製作方法とはことなりかなり粗雑な過程で製作されており、詳細な年代を決定することが難しい。土師質小皿類を見れば10世紀後半から11世紀後半しか存在していないので、この時期のいずれかの段階であると考えられよう。7・8「武蔵型甕」で、ともに口縁部が「コ」の字状に変化していることから、平安時代に属するものである。ただし、7は屈曲度が弱く初源的な状況を示していることから9世紀第1四半期後半、8は典型的な「コ」の字状口縁を呈し、9世紀第4四半期に顕著な退化傾向が認められないことから、9世紀第2四半期～第3四半期の所産である公算が高い。9～12土師質小皿。平安時代でもいわゆる「古代末」に属し、9は10世紀後半から11世紀前半、10～12については11世紀後半に相当する。なお11・12は灯明皿に転用されている。

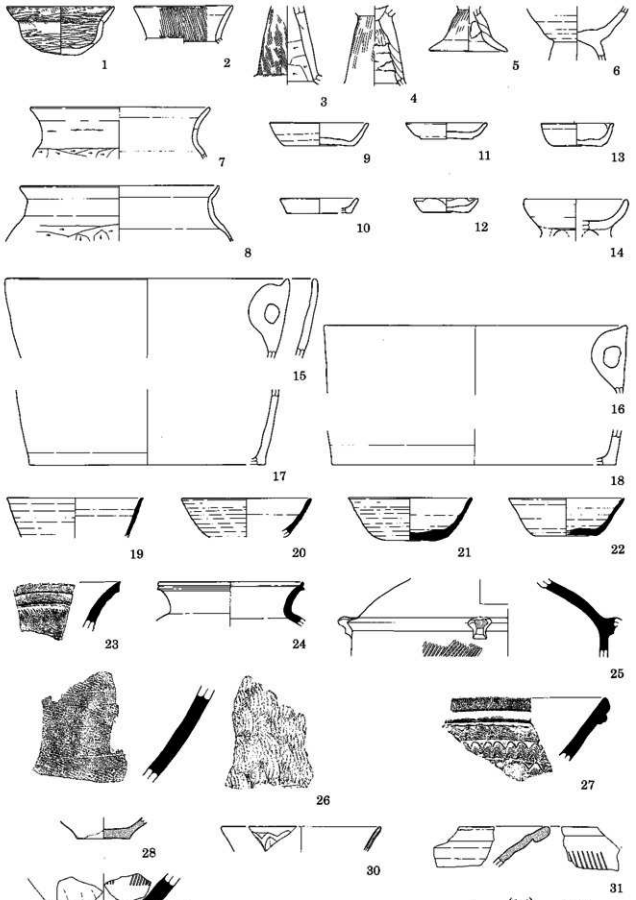
13～18中世の在地産土器で酸化炎焼成された褐色系の色調を呈したもの。13はロクロ調整が行われているものの胎土を精選していないカワラケで、時期は15世紀後半から16世紀。14は香炉で同じくロクロ調整が行われているもので、足は4本、時期は15～16世紀。15～19は内耳鍋で、15・16は15世紀後半から16世紀、17・18も同時期のものだろう。なお、13は灯明皿として利用されている。

19～31須恵器・陶磁器

19～27須恵器出現期から平安時代末までの須恵器。19器高の深い須恵器高台付坏。7世紀末から9世紀前半にこのような形態のものがあるが、佐久地方ではとくに8世紀後葉から9世紀前葉に顕著に見られるものである。高台部と口縁部の接合痕が残存していないものの、器壁が薄く、しかも口縁部の外反度が比較的弱いことから最終段階のものではないことは確かであり、奈良時代後葉から平安時代初頭8世紀後葉から9世紀初頭と考えられる。20～22須恵器坏。いずれも軟質須恵ではない。21・22底部回転糸切りをするもので、おそらく20も同様であろう。内面底径は21が7.4cm、22が推定6.6cm、20は7cm前後が想定され、20・21は8世紀第4四半期から9世紀第1四半期、22は9世紀前半のいずれかの時期のもの。奈良時代後葉から平安時代初頭の土器である。

23・24須恵器甕。時期比定は難しい。波状文が施された23は須恵器出現期以後から古墳時代後期、無文の24を奈良時代から平安時代10世紀初頭までと大まかに捉えておくが、それ以後の可能性もある。25須恵器突帯付四耳壺。8世紀中葉に出現し、9世紀中葉から末にかけて増大し、以後激減し、10世紀中葉には使用されなくなるもので、奈良時代中葉から平安時代前葉のもの。26・27須恵器大甕。26須恵器出現以降から10世紀前半。27奈良時代から平安時代10世紀初頭。

28～30中近世陶磁器。28古瀬戸。29青灰色の還元炎焼成された在地須恵質土器。30青磁。28は瓶類であるが、器種は不明。時期は14～15世紀。29は擂鉢で、14世紀。30は龍泉窯系蓮弁文で13世紀。31は瀬戸美濃系の擂鉢。時期は江戸時代18世紀に下るもの。



第63図　古墳時代以降の土器・陶磁器

第6章　石器・石製品・金属製品ほか

本遺跡の石器・石製品はほとんどが遺物包含層をはじめとする、遺構に伴わない状況で出土しているので、型式学的な検討を行って縄文時代のものと古墳時代以降のものとに分類した。

第1節　縄文時代の石器（第64～77図　PL9～19）

縄文時代の石器は小型剥片素材石器（石鏃、石錐、未製品を含む連続剥離を有するもの、微細な連続剥離を有するものなど）、大型剥片素材の石器（打製石斧、スクレイパーなど）、礫素材石器（磨製石斧、磨石類）に大別した。

小型剥片石器（第64・65図1～36　PL9）

1～17石鏃。石材は1珪質頁岩、8チャート、それ以外はすべて黒曜石製。平面形は1・6有茎式、2・14平基式でそれ以外は凹基式。1土坑SK026出土。2土坑SK077出土。3・4溝SD03出土。5～17遺物包含層や遺構検出面で出土したもの。

18～22石錐。石材は18ガラス質安山岩、19・20黒曜石、21チャート、22玉髄。18～20溝SD03出土。21・22グリッドV17遺物包含層出土。

23～29連続した調整剥離を有する剥片。23楔形石器。黒曜石。24～26小型のスクレイパー。25はあるいは楔形石器か。27～29石鏃未製品か。27・28両面加工されている。29先端を作りだしたところで廃棄されたものか。

30～35微細な連続剥離を有する剥片。いわゆるUF類。すべて黒曜石。

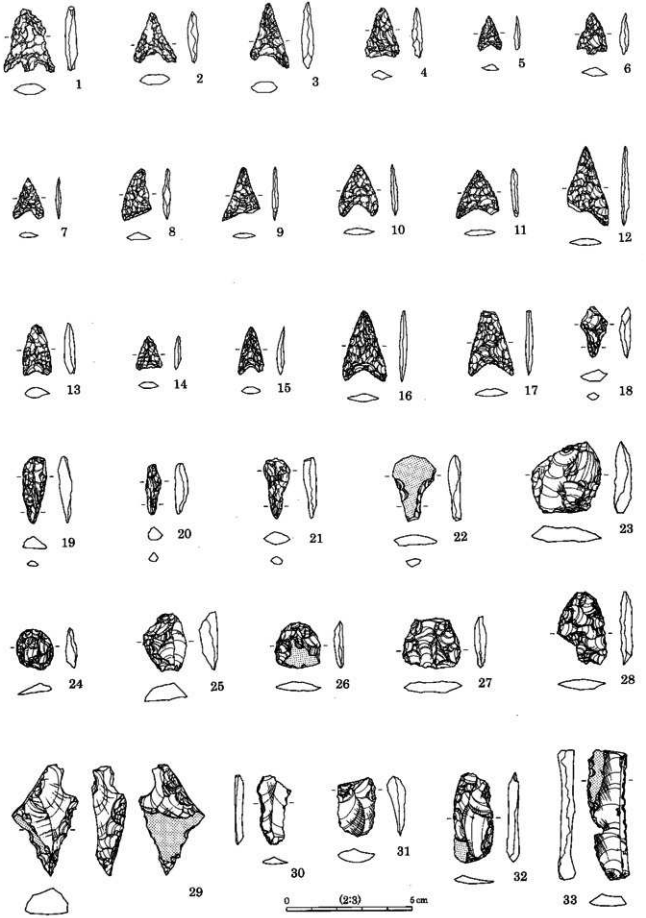
36～39石核。すべて黒曜石。いずれも遺物包含層から出土している。

大型剥片石器（第66～76図　PL10～18）

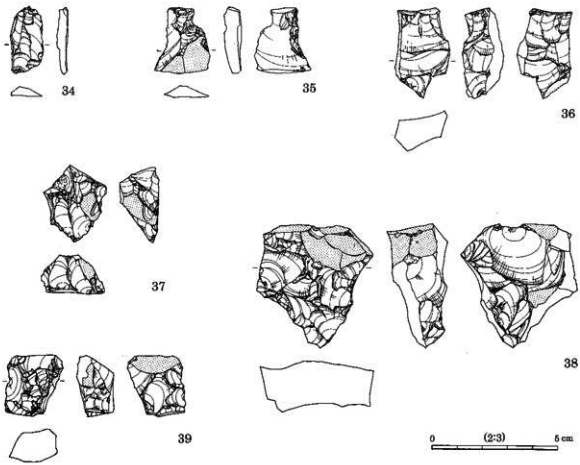
打製石斧・両面加工石器　両側辺が平坦もしくはわずかに開く形状のものが大半を占める。一部撥形のものもある（3、24、63、76、78）。石材は粘板岩・千枚岩（2、7、13、15、16、17、40、44、46、57、58、66、68、70、71、72、73、81、82）、頁岩（3、6、67）、砂岩・硬砂岩（14、24、45）、ガラス質安山岩（19、38）、結晶片岩（80）がある。これ以外はすべて板状節理の発達した安山岩である。板状節理の発達した安山岩や片状構造の発達した粘板岩には節理面を残すものが多い。

1縄文時代竪穴住居跡SB04出土。刃部が欠損している。2縄文時代敷石住居跡SB05の外縁部から出土。先端がつぶれている。千枚岩質粘板岩で硬いが脆く薄く剥がれやすい。3・4古代竪穴住居跡SB06出土。混入か。3は若干刃部が開く短冊形。先端がつぶれている。4は抉られて基部が成形されていて、撥形をなす。転石の面が残っており、転石素材である。素材は頁岩で表面が剥離しやすい。5古墳時代竪穴住居跡SB10出土。混入か。基部と刃部が欠損しているが、短冊形をなすと思われる。板状節理の発達した安山岩。6縄文時代土坑SK094出土。寸詰まりの短冊形。脆い頁岩。7溝SD03出土。刃部が若干ひらく。粘板岩製。

8～82いずれも遺構外の遺物包含層出土。44打製石斧類に含めたが、主要剥離面は横剥ぎである。ある



第64図　石鏃・石錐など剥片石器



第65図　剥片石器・石核

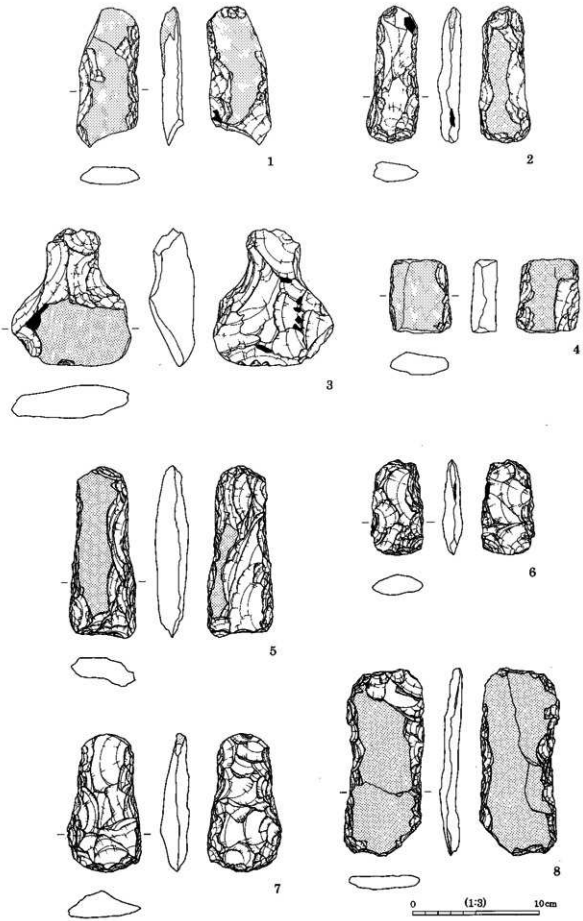
いは横長のスクレイパーかもしれない。凝灰岩質粘板岩。38これも一応打製石斧類に含めたが、小型剥片石器の石核か。原石の段階の風化面を残す。ガラス質安山岩。82両面加工され、石材は粘板岩であるが、器厚は3.8cmと厚いが、長さは9.9cmと寸づまりであり、本遺跡ではこうした形状の打製石斧は他にない。刃部に磨耗痕も見られないので、打製石斧に含めるのはあるいは適当ではないかもしれない。

この他図化できなかったが、破損した打製石斧片が大量に出土している。ただし、打製石斧製作の過程を想定できるような剥片は見られない。

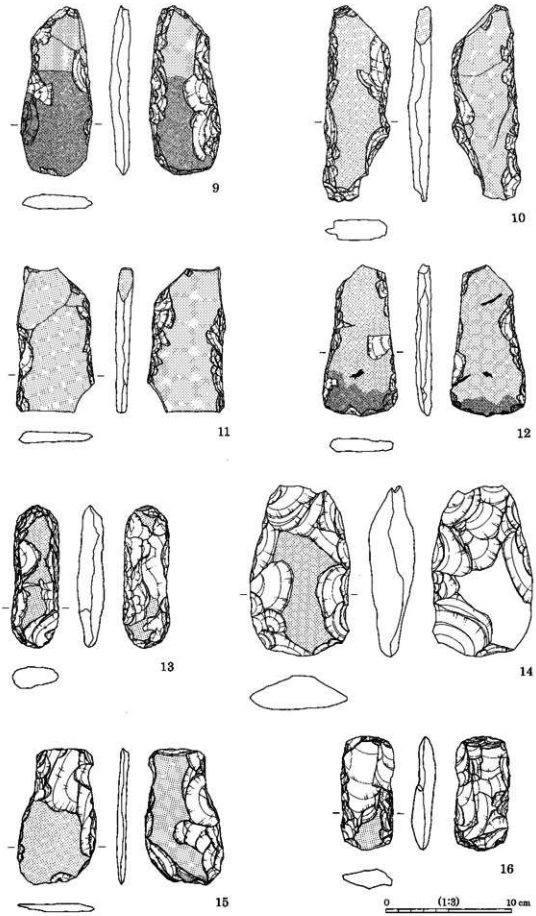
礫素材石器（第77図　ＰＬ19の上）

1・2定角式の磨製石斧。側面は丁寧に研磨されているので、擦切かどうかはわからない。2基部が欠損した斜刃の縦斧。縄文時代の土坑SK028から出土している。いずれも比較的堅緻な変成岩。角閃岩か。

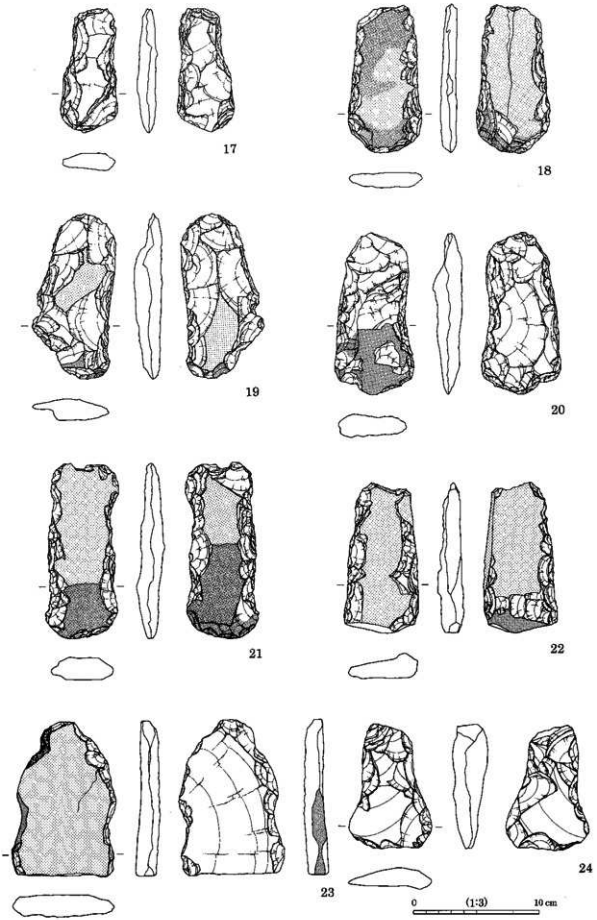
3～6磨石類。3凹石。磨面ははっきりしないが、中央に敲打痕が見られる。硬砂岩。4磨面は顕著ではない。5・6磨面は発達し、偏面に敲打痕が見られる。4～6多孔質で斑晶の発達した粗粒の安山岩。



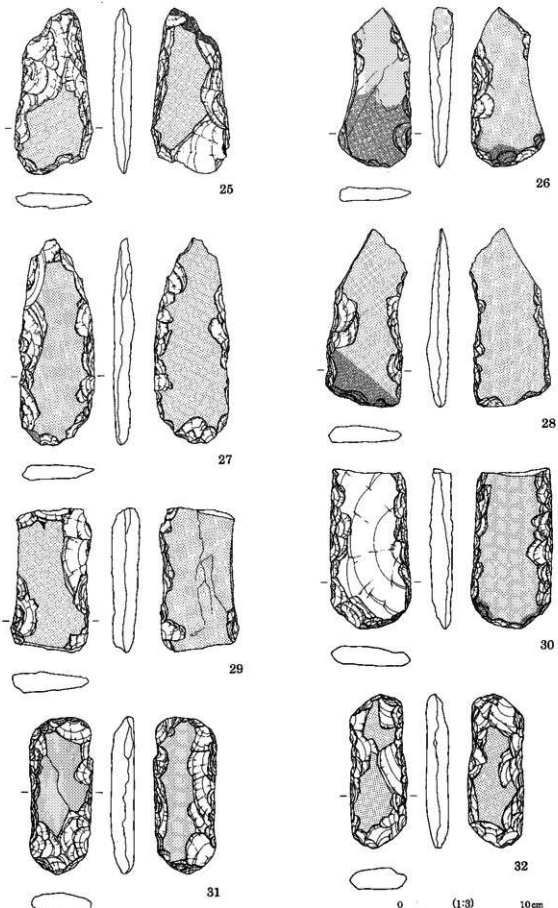
第66図　打製石斧1



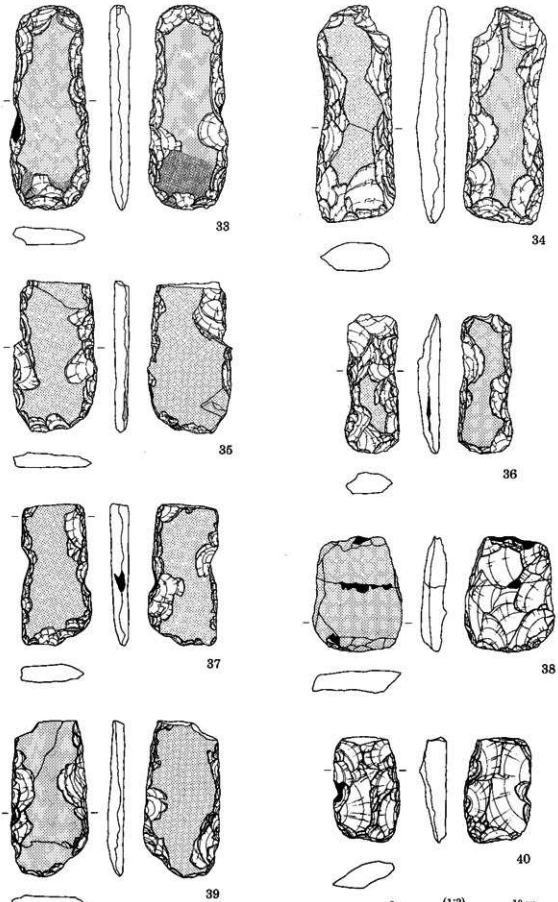
第67図　打製石斧2



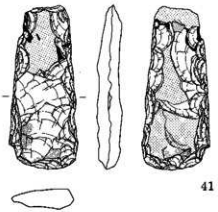
第68図　打製石斧3

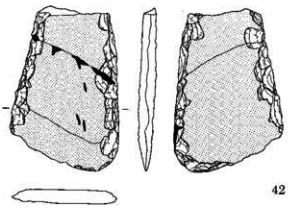


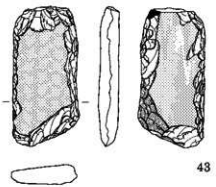
第69図　打製石斧4

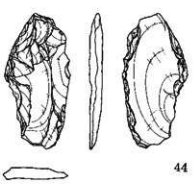


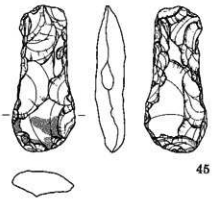
第70図　打製石斧5

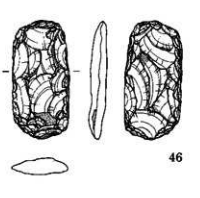

41

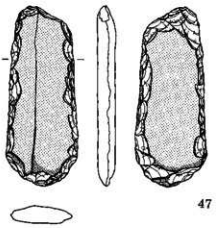

42

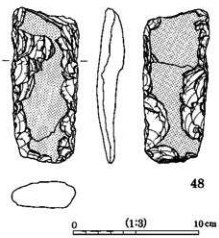

43


44


45

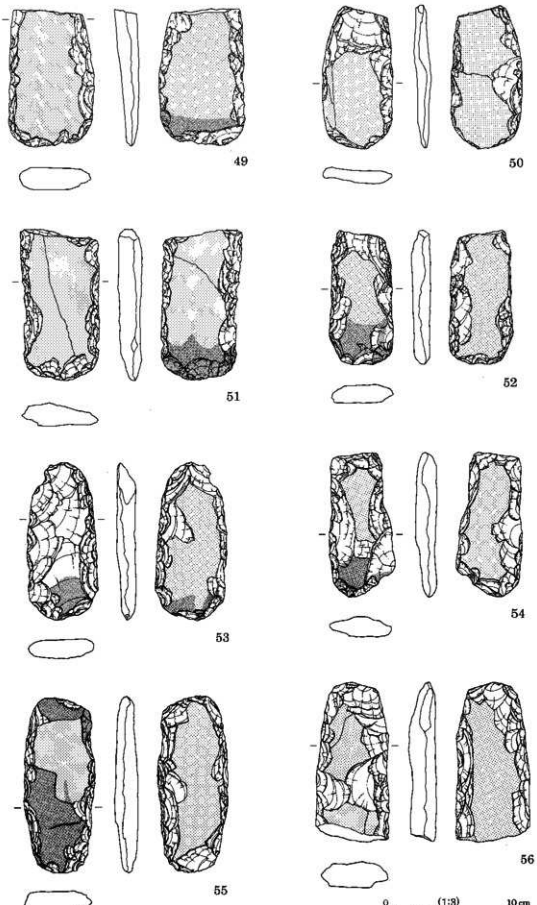

46


47

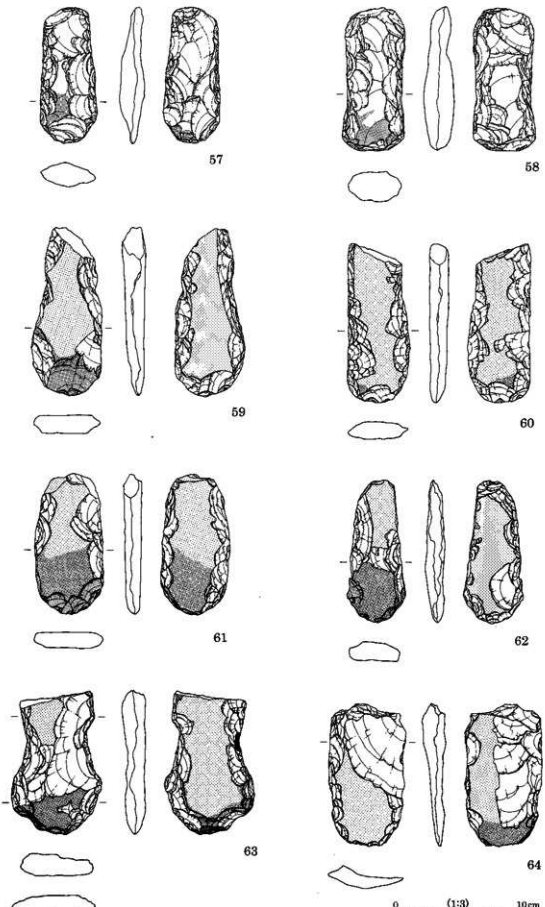

48

0　(1:3)　10cm

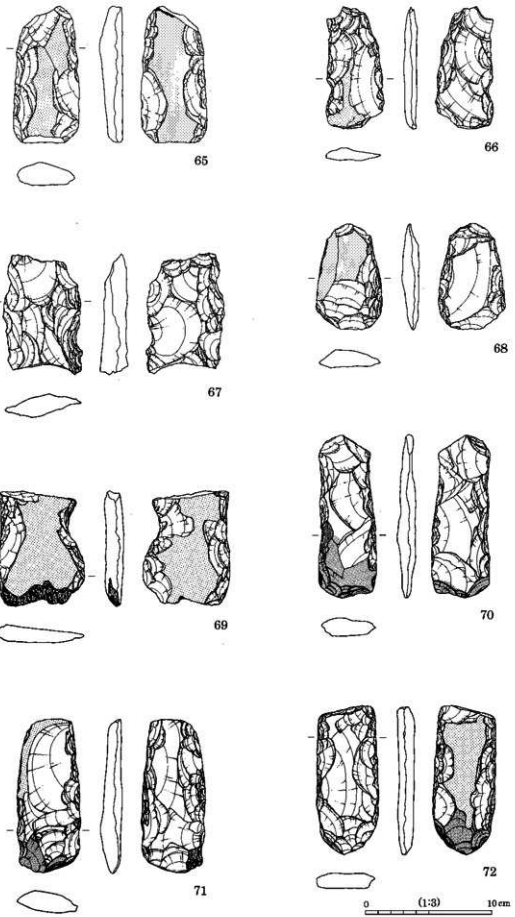
第71図　打製石斧6



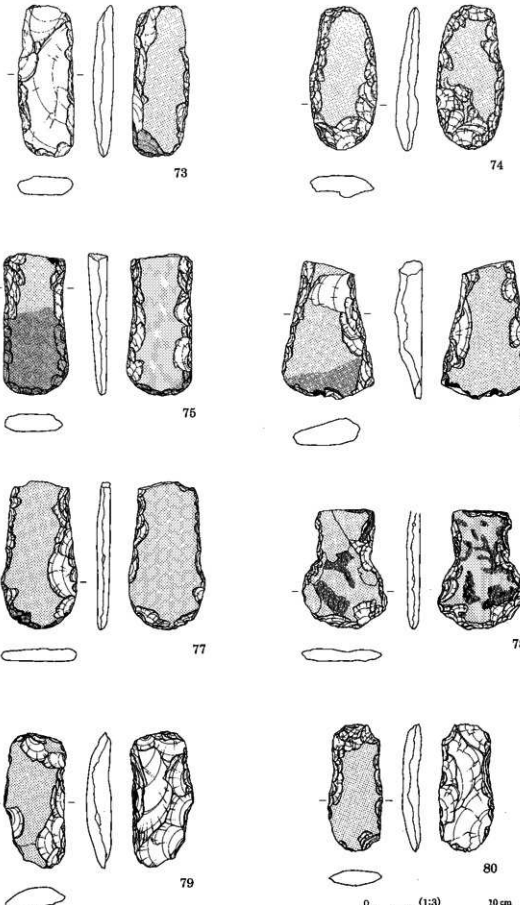
第72図　打製石斧7



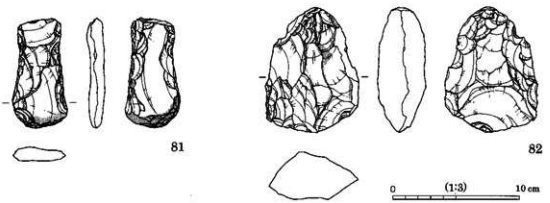
第73図　打製石斧8



第74図　打製石斧9



第75図　打製石斧10



第76図　打製石斧11

第2節　古墳時代から中近世の石製品（第78・79図）

古墳時代から中近世の石製品を一括した。いずれも礫素材の石器である。

小型礫素材石製品（第78図　PL19の上）

1～6砥石。1砂岩、それ以外は凝灰岩製。1・2中世井戸SE01出土。いずれも鋭利な金属の刃先を研いだような痕跡が見られる。7磨石。中世井戸SE01出土。4面に磨面が帯状に発達。安山岩製。ススが付着する。

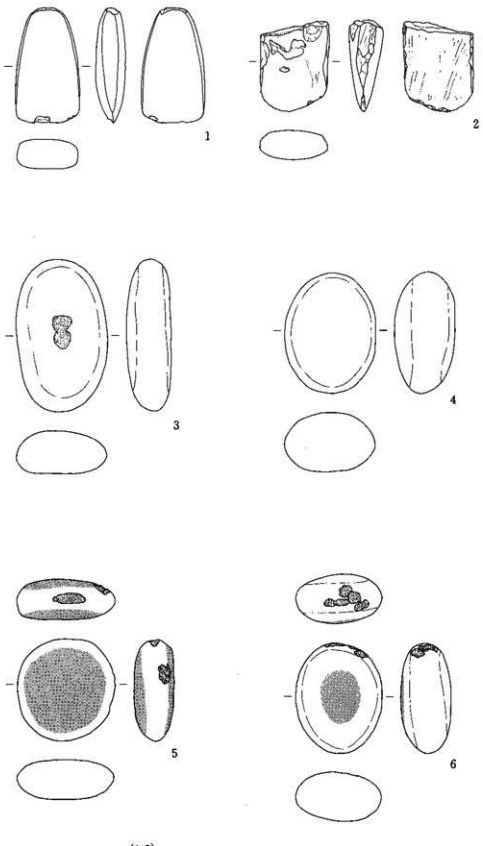
大型礫素材石製品（第79図　ＰＬ８の右下）

1・2石鉢。古代から中世。佐久地方を含む東信地方ではしばし擂鉢の代用品として用いられたようである。3・4石臼。5・6五輪塔。5火輪。6空風輪。いずれも中世後期かそれ以降のもの。すべて石材は多孔質の安山岩。

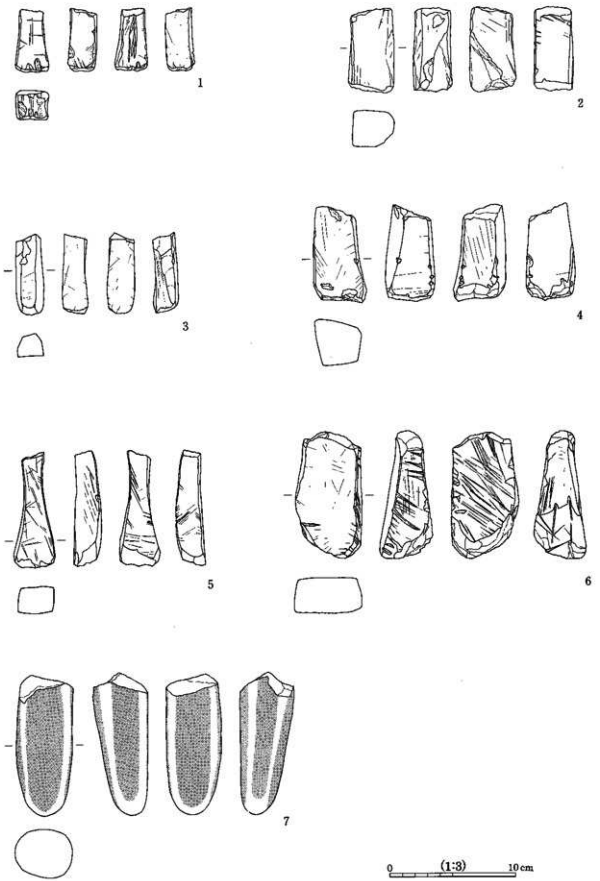
第3節　銭　　貨（第80図　PL19の下）

銭貨の多くは表土を除去したのち、遺構検出の最初の段階で主に取り上げられている。おそらく基本土層のⅢ層に伴うものと考えられる。土坑（V15グリッドSK１、平面図不明のため位置を特定できない）から出土した皇宋通寶？が1枚出土しているが、摩滅著しく、拓本は取れなかったものがある。以下初鋳年順に配列している。

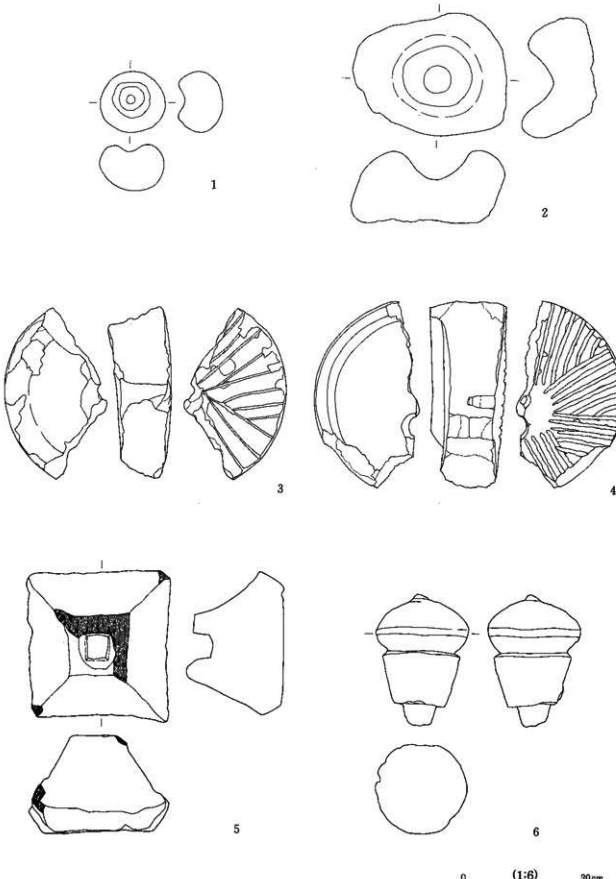
1景徳通寶。2祥□通寶。祥符通寶の真書体。3天禧通寶。4天聖通寶。5～7熙寧元寶。8元豊通寶。9元祐通寶。10紹聖元寶。11政和通寶。以上北宋銭。12・13洪武通寶。明銭。14寛永通寶。1668年以降に発行された古銭業界でいうところの「新寛永」。



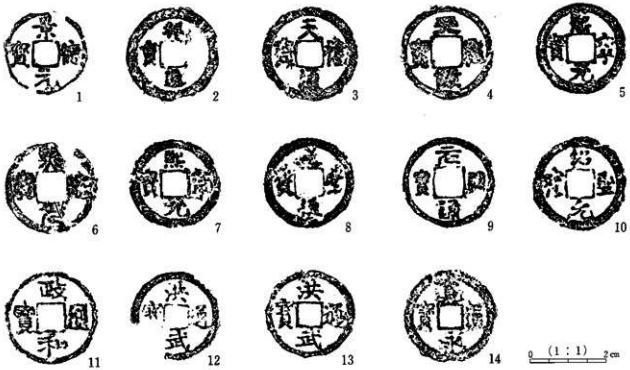
第77図　磨製石斧、磨石類



第78図　砥石、磨石



第79図　石鉢、石臼、五輪塔



第80図　銭　　貨

第4節　鉄　　滓 (PL20)

図化できるような鉄滓系遺物はほとんどないが、遺構外から検出段階時に鉄滓の砕片が採集されている。以下写真図版PL20の番号である。1・2同一個体、鉄滓。内部の構造は粗い。試掘時にトレンチ内で採集された。3～5炉壁の一部。スサなどの混和材が含まれ、粗いつくりをしている。4直方体の隅状になっている。箱型炉の一部であった可能性がある。6～8還元化して変形した土器。15・16などは発泡している。いずれも二次的な被熱によるものだろうが、かなりの高温であると推測され、日常的な煮焚によるものとは考えにくい。いずれも鍛冶製鉄関係の遺物としてここに記載した。

古代竪穴住居跡SB12・13の項目でも記述したが、焼土集中部分をともなうSB12・13は遺構検出時に磁石で精査した。その結果自然砂鉄は多く見つかるが、鍛造剥片をまったく検出されなかったので鍛冶関連施設というよりは製鉄関連施設の可能性が高いと考えられる。これら遺物は、SB12・13の所見と調和的である。

第7章 付　　表

本章には以下の表が収録されている。

焼物(土器・陶磁器)観察表(第1表)、石器観察表(第2表)、銭貨一覧(第3表)、土坑一覧(第4表)である。

第1表　焼物観察表(1)

図版番号	写真図版	地点名	台帳番号	焼物種	器種	時期	部位	色調	混和材	法量(cm)	特徴・残存度	出土位置・備考
12-1		SB04	1	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR4/6赤褐	φ1mmの石英・角閃石多・白色粒子多	口:18.0	口縁部平行隆帯、胴部に櫛状工具による平行条線文。	P1
15-1		SB11	1-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～胴	10YR7/4にぶい黄橙	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子	口:(38.0)	口縁部隆帯貼付→矢羽状沈線文充填。	炉出土。P1・(W7-SK1)SK075と接合。図15-1～5は同一個体。
15-2		SB11	1-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR7/4にぶい黄橙	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		同上	炉出土。P1・(W7-SK1)SK075と接合。
15-3		SB11	1-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR7/4にぶい黄橙	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		同上	炉出土。P1・(W7-SK1)SK076と接合。
15-4		SB11	1-(5)	縄文	—	中期後葉	底	10YR7/4にぶい黄橙	φ0.5mmの石英・長石	底:11.5		炉出土。P1・(W7-SK1)SK077と接合。
15-5		SB11	1-(4)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	10YR6/4にぶい黄橙	φ0.5mmの長石・石英		胴部区画沈線・縦位羽状縄文。	炉出土。P1・(W7-SK1)SK078と接合。
15-6		SB11	3	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR4/6赤褐	φ1mmの長石・角閃石			P1
15-7		SB11	6	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR4/6赤褐	φ0.5mmの長石・角閃石・石英φ2～3mm砂粒		刻目隆帯→隆帯縁沈線。	炉出土。
15-8		SB11	8	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR6/6橙	φ0.3mmの長石・褐色粒子・石英		隆帯が波頂部から垂下、波状口縁に沿って貼付。	炉出土。
15-9		SB11	4	縄文	—	中期後葉	口縁	2.5YR5/8明赤褐	φ1mmの砂・角閃石		口唇部に沈線、緩い波状口縁。	炉出土。
15-10		SB11	5	縄文	深鉢	中期後葉	口縁突起	5YR4/4にぶい赤褐	φ0.3mmの長石・角閃石・石英		刺突文、波頂部上面に渦巻沈線文。	炉出土。
15-11		SB11	7	縄文	深鉢	中期後葉	胴	2.5YR4/6赤褐	φ0.5mmの長石・角閃石・砂		隆帯貼付→平行沈線文。	炉出土。
15-12		SB11	2	縄文	深鉢	中期後葉	胴	2.5YR4/6赤褐	φ0.3mmの石英・角閃石		隆帯貼付→平行沈線文・刺突文。	P1
18-1	PL8-4	SB03	1	土師器	球胴甕	古墳	口縁～底	5YR6/6橙	φ2mmの長石・石英・褐色粒子	口:(23.6) 胴:29.0 底:8.2 高:(32.2)	口縁部ヨコナデ・胴部内面ヘラナデ→胴部外部ヘラケズリ、4/5残。	カマド、カマド内SK出土。P1～P8接合、カマド構築材に転用されたが粘土の付着なし。
18-1		SB10	2	土師器	長胴甕	古墳	口縁	5YR6/6橙	φ4mmの砂・石英・褐色粒子・角閃石	口:(16.0)	口縁部ヨコナデ・胴部内面ヘラナデ→胴部外部ヘラケズリ、口縁部1/2残。	
18-2		SB10	3	土師器	球胴甕	古墳	口縁	7.5YR6/4にぶい橙	φ1mmの長石・石英・角閃石・褐色粒子	口:(25.0)	口縁部ヨコナデ・胴部外部ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面を除きヨコミガキ、口縁部1/10残。	
18-1	PL8-5	SK074(W6-P1)	1	土師器	甕	古墳	口縁～胴	7.5YR5/4にぶい褐	φ1mmの長石・石英・褐色粒子	口:(14.8) 胴:20.0	口縁部ヨコナデ・胴部外面タテヘラケズリ・胴部内面ヨコヘラケズリ→口縁部外面タテヘラケズリ・胴部外面ミガキ、口縁部3/4・胴部下位以下	
18-2		SK074(W6-P1)	3	土師器	短頸壺	古墳	口縁	10YR6/4にぶい黄橙	φ1mmの褐色粒子・長石・石英	口:(16.0)	外面タテヘラナデ・内面ヨコヘラナデ→口唇部ヨコナデ→全面ヨコミガキ、口縁部1/4残。	
18-3	PL8-6	SK074(W6-P1)	2	土師器	小型丸底鉢	古墳	口縁～底	5YR6/6橙	φ1mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子	口:10.7 胴:4.1 底:4.0	胴部外面以下を除きハケメ・体部外面以下はユビナデか→口縁部ヨコナデ、完形。	権掘品。
23-1		SB01	3	土師器	鉄鉢	古代	口縁	5YR7/6橙	φ1～2mmの褐色粒子	口:(21.0)	ロクロ調整、口縁部1/8残。	
23-2		SB01	2	須恵器	坏	古代	口縁	2.5GY5/1オリーブ灰	精	口:(14.0)	ロクロ調整、口縁部1/8残。	
23-3		SB01	1	灰釉	椀	古代	口縁	2.5Y7/1灰白	精	口:(17.2)	ロクロ調整、口縁部1/8残。	窯式名不明。
23-1		SB06	2	須恵器	坏	古代	底	2.5Y5/1黄灰	φ2mmの長石	底:7.3 内底:7.4	ロクロ調整→底部回転糸切り、底部4/5残。	
23-2		SB06	1	須恵器	提瓶	古墳	胴	10YR6/1褐灰	精		ロクロ調整、胴部一部残。	混入。
23-1		SB09	1	土師器	長胴甕	古代	口縁～胴	7.5Y6/4にぶい橙	φ1mmの褐色粒子・角閃石・石英	口:(16.0) 胴:(19.0)	ロクロ調整→胴部外部ヘラケズリ(方向不明)内面剥落、胴部中位以上1/3残。	カマド出土。P5・P20「北信型」。
23-2		SB09	2	黒色土器	坏	古代	口縁～底	7.5Y6/4にぶい橙	φ2mmの褐色粒子・角閃石・石英・長石	口:(13.2) 底:5.2 高:4.5	ロクロ調整→底部回転糸切り、1/2残。	カマド出土。P10内面黒色処理。

第1表　焼物観察表（2）

図版番号	写真図版	地点名	台帳番号	焼物種	器種	時期	部位	色調	混和材	法量(cm)	特徴・残存度	出土位置・備考
23-3		SB09	4	土師器	坏	古代	口縁～底	7.5YR7/6橙	φ1mmの褐色粒子・長石・角閃石	口:13.2 底:5.6 高:3.9	ロクロ調整→底部回転糸切り、1/2残。	カマド出土。P5・P17。
23-4		SB09	3	土師器	高台付き坏	古代	口縁～底	5YR5/6明赤褐	φ1mmの褐色粒子・長石・角閃石	口:(13.8)	ロクロ調整、坏部1/2残。	カマド出土。P13。
23-5		SB09	5	黒色土器	高台付き坏	古代	底	7.5YR7/6橙	φ2mmの褐色粒子・長石・角閃石	高台:7.2	ロクロ調整→底部回転糸切り、高台部4/5残。	カマド、カマド付近出土。P2内面黒色処理。
23-1		SK067(W5-SK30)	1	須恵器	坏蓋	古代		10YR6/1褐灰	φ2mmの長石	口:15.7(最大15.9) 高:4.8摘み高1.6摘み径2.2	ロクロ調整→天井部外面回転ヘラケズリ、完形。	
33-1		SK057(W3-SK14)	1	須恵質	擂鉢	中世	口縁	10YR8/1灰白	φ0.5mmの石英・角閃石		在地系軟質。	
33-2		SK062(W4-SK12)	1	土師質	内耳鍋	中世後期	口縁	5YR3/1黒褐	φ0.5mmの石英・褐色粒子・雲母		口縁外反。	
33-3		SK063(W4-SK13)	1	土師質	内耳鍋	中世後期	口縁	5YR3/1黒褐	φ0.2mmの角閃石・長石	口:(29.0)	口縁外反。	
33-4		SK084(W9-SK42)	1	古瀬戸	卸皿	中世前期	底	2.5Y8/1灰白	精	底:(4.4)		
33-5		SK098(X3-SK3)	1	古瀬戸	平碗	中世	口縁	10Y6/2オリーブ灰	精			
35-1		SE01	2	須恵器	甕？	古代？	口縁	2.5YR6/1黄灰	φ0.2mmの長石・石英		櫛描波状文。	
35-2		SE01	3	瓦	平瓦	古代？	—	5B1.7/1青黒	φ0.2mmの長石・石英		裏面布目痕。	
35-3		SE01	1	青磁	碗	中世前期	口縁	7.5GY7/1明緑灰	精	口:(14.8)	龍泉窯系ヘラ削り蓮弁文。	
38-1		SD01	3	土師質	皿	中世後葉	口縁～底	10YR7/4にぶい黄橙	φ0.2mmの石英・長石・褐色粒子	口:(10.4) 底:(8.2) 高:2.1	ロクロ調整。	
38-2		SD01	1	土師質	内耳鍋	中世後葉	口縁	10YR7/4にぶい黄褐	φ0.3mmの石英・長石		口縁部内耳部分残。	
38-3		SD01	5	土師質	内耳鍋	中世後葉	口縁	5YR6/6橙	φ0.2mmの石英・長石・角閃石			
38-4		SD01	2	土師質	内耳鍋	中世後葉	胴～底	7.5YR7/4にぶい橙	φ0.2mmの長石・角閃石	底:(14.0)		
40-1		SD02	1	縄文	注口	後期	口縁	10YR7/2にぶい黄褐	φ0.5mmの長石・石英・角閃石	口:(10.8)	堀之内式。	
40-2		SD02	2	須恵器	甕?	古代	胴	5YR5/1暗赤灰	φ0.1mmの長石		外:平行タタキ→櫛歯状工具による平行条線。 内:青海波。	
42-1		SD03	1	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR6/3にぶい黄褐	φ0.5mmの長石・角閃石・石英	口:(30.2)	口縁端部が内湾、胴部上端に平行隆帯貼付→平行沈線文。	
42-2		SD03	2	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR7/2にぶい黄橙	φ0.3mmの長石・石英・角閃石	口:(20.4) 胴:(23.0)	口縁端部内湾。	
42-3		SD03	3	縄文?	浅鉢	中期後葉	口縁	5YR6/6橙	φ0.2mmの石英・長石・褐色粒子・角閃石	口:40.6	口縁部断面四角く肥厚。表面の剥離著しいが、おそらく本来は内外面磨かれていたものと思われる。かすかに赤彩の痕跡が見られる。	
42-4		SD03	4	縄文	深鉢	中期初頭	口縁	5YR5/4にぶい赤褐	φ0.5mmの砂粒多・角閃石・長石・雲母		口唇端部にヘラ刻み、沈線施細いが連続刺突。	
43-1		W-11	1	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/4にぶい褐	φ0.5mmの石英・長石	口:(24.4)	同心弧状沈線文。口縁端部内面が少し肥厚。	
43-2		V-18	36	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR6/4にぶい黄褐	φ0.5mmの長石・石英多・赤色粒子・角閃石		口縁端部内側肥厚、斜行沈線文。	
43-3		V-13	2	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR4/4褐	φ0.5mmの長石・赤色粒子～チャート		斜格子・区画平行隆帯→縄文LR横位。	
43-4		V-12	8	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR4/6赤褐	φ0.3mmの長石・石英・角閃石		半截竹管の平行沈線文・結節沈線文。	
43-5		V-12	7	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR3/4暗赤褐	φ1～2mmの白色粒子・砂粒多		口縁部区画隆帯貼付→ヘラ描矢羽状沈線文。	
43-6		V-17	45	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR4/4褐	φ0.5mm位の白色粒子多・石英・角閃石		隆帯→沈線文・交互刺突文。口縁部内面を肥厚。	
43-7		V-17	55	縄文	深鉢	中期後葉	口縁突起	5YR4/6明赤褐	φ0.2mmの長石・角閃石・雲母		波頂部上面に渦巻文。	
43-8		W-7	1	縄文	—	中期	口縁突起	5YR4/6赤褐	φ0.5mmの石英・雲母・角閃石・褐色粒子		口縁部突起。	
44-1		V-18	17-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/4にぶい褐	φ1mmの砂粒・石英・長石・角閃石		陰刻風区画文→斜行沈線→区画をなぞる。	
44-2		V-17	27	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの長石・褐色粒子	口:(48.0) 高:(7.2)	隆帯→斜行沈線→隆帯脇沈線。口縁端部強いヨコナデ。下端接合痕部分で欠損。	
44-3	PL7-2巻頭口絵2	V-18	3	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～底	5YR6/6橙	φ0.5mmの長石・角閃石・褐色粒子	口:40.4 高:(53.2)	口縁部渦巻文を取り込んだ横長楕円区画文→短沈線文→区画を沈線でなぞる。胴部は田の字区画、U字状平行区画沈線文・蛇行沈線文→鱗状短沈線文。	A類基準資料。

第１表　焼物観察表（３）

図版番号	写真図版	地点名	台帳番号	焼物種	器種	時期	部位	色調	混和材	法量(cm)	特徴・残存度	出土位置・備考
45-4		V-17	4-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/4にぶい褐	φ0.3mmの石英・長石・角閃石・赤色粒子	口:28.4	口縁部渦巻文を取り込んだ横長の隆刻風の区画文、胴部鱗状短沈線文、内面ヨコミガキ。	
45-5		V-17	4-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/4にぶい褐	φ0.3mmの石英・長石・角閃石		口縁部渦巻文を取り込んだ横長の隆刻風の区画文、胴部鱗状短沈線文、内面ヨコミガキ。	図45-5と4は同一個体か。
45-6	PL7-1	V-18	41	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～底	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子多	口:40.3 底:10.6 高:54.5	口縁部渦巻文を取り込んだ隆刻風楕円区画文→鱗状短沈線文→区画をなぞる沈線、胴部田の字状区画、U字状区画沈線文→縦位蛇行沈線文→鱗状短沈線文。	A類の基準資料。
46-7		V-17	8	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR3/4暗褐	φ1mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		隆帯貼付などによる口縁部肥厚→斜行沈線→隆帯脇沈線。	
46-8		V-17	9	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		胴部はおそらくU字形平行区画沈線文の中を蛇行沈線や鱗状短沈線文が充填される。	
46-9	PL7-4	V-17	1-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～胴	5YR4/6赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子	口:(41.0) 胴:(35.0) 高:(53.7)	4単位の波状口縁か。表面の剥離著しい。	A類の基準資料。
47-10		V-17	1-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/4にぶい褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		胴部田の字区画の鱗状短沈線文土器。	図47-10と11は同一個体か。図46-9とは別個体。A類の基準資料。
47-11		V-17	1-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～胴	7.5YR6/6橙	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子	口:(42.0) 胴:(37.6) 高:(44.0)	U字状区画沈線文→蛇行沈線文→鱗状短沈線文→渦巻沈線文。	
48-12	PL7-3 巻頭口絵2	V-17	3-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～胴	2.5YR3/4暗赤褐	φ1～2mmの褐色粒子・長石・石英・角閃石	口:(44.0) 胴:(44.6) 高:(44.5)	胴部鋸歯状の斜行平行沈線文。	B類の基準資料。
48-13		V-17	3-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR4/6赤褐	φ0.5mmの長石・石英・角閃石・赤色粒子	胴:48.0	鋸歯状の斜行平行沈線文。施文方向は向かって左から右。	B類の基準資料。
49-14		V-17	6-(4)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～胴	2.5YR5/6明赤褐	φ1mmの石英・角閃石・赤色粒子・雲母		緩い波状口縁。	C類基準資料。
49-15		V-17	6-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～胴	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・赤色粒子・角閃石	口:(40.2)	平縁。胴部隆帯上に浅い刻み、隆帯区画内鱗状短沈線文充填。口縁部は渦巻文をとりこんだ横長の隆帯区画文。	C類基準資料。図49-16と17とは別個体。
49-16		V-17	6-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～胴	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子	口:(48.0) 胴:55.4 高:(27.8)	ゆるい波状口縁。胴部隆帯上に浅い連続刻みあり。隆帯区画内鱗状短沈線文充填。口縁部は渦巻文を取り込んだ横長の隆帯区画文。	C類基準資料。図49-16と17は同一個体か。
49-17		V-17	6-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁～胴	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子・角閃石	口:(48.0) 胴:(50.0) 高:(35.0)	同上。	同上。
50-18		V-18	4-(6)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	2.5YR5/8明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石			図50-18～23同一個体か。D類の基準資料。
50-19		V-18	4-(5)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR5/8明赤褐	φ0.5mmの長石・石英・角閃石・褐色粒子			
50-20		V-18	4-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR4/6赤褐	φ0.5mmの長石・石英・褐色粒子		口縁部渦巻文と縦位蛇行隆帯文が一体化している。口縁部には渦巻文をはさんで横長楕円隆帯区画→短沈線文、口縁部では隆帯脇を沈線がなぞるが、胴部はなぞらない。	
50-21		V-18	4-(3)	縄文	深鉢か	中期後葉	底	5YR4/4にぶい赤褐	φ0.5mmの長石・石英・褐色粒子	底:(7.2)		
50-22		V-18	4-(4)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	2.5YR5/8明赤褐	φ1mmの石英・長石・褐色粒子・角閃石			
50-23		V-18	4-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	胴～底	2.5YR5/8明赤褐	φ0.5mmの長石・石英・褐色粒子		U字および縦位蛇行隆帯区画文→鱗状短沈線文。	内面スス付着。
50-24		V-17	10	縄文	鉢	中期後葉	口縁～胴	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・赤色粒子	口:(19.8) 胴:(29.8)	頸部に隆帯による横長の区画文→斜行沈線充填→隆帯脇沈線。	E類の基準資料。
50-25		V-18	5	縄文	鉢	中期後葉	口縁～胴	2.5YR5/8明赤褐	φ1mmの石英・長石・褐色粒子	口:(28.8)	基本的に平縁だが、部分的に波状を呈する。胴部隆帯上に浅い刻目あり→鱗状短沈線文。	E類の基準資料。
51-26		V-18	1-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR3/6暗赤褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子・角閃石		隆帯貼付などによる口縁部肥厚→斜行沈線→隆帯脇沈線。	
51-27		V-18	32	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR5/3にぶい黄褐	φ0.3mmの長石		隆刻風区画→鱗状短沈線文→区画を沈線でなぞる。	
51-28		V-13	3	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR7/6橙	φ0.3mmの長石・赤色粒子多・角閃石		隆帯→鱗状短沈線文。	
51-29		V-18	1-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR3/6暗赤褐	φ0.5mmの長石・石英・褐色粒子・角閃石		隆帯貼付などによる口縁部肥厚→斜行沈線→隆帯脇沈線。	

第1表 焼物観察表(4)

図版番号	写真図版	地点名	台帳番号	焼物種	器種	時期	部位	色調	混和材	法量(cm)	特徴・残存度	出土位置・備考
51-30		V-18	9-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR4/3にぶい黄褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子		波状口縁、隆刻風横長勾玉状区画→矢羽状短沈線文、内面ミガキに近いナデ。	
51-31		V-18	9-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR5/4にぶい黄褐	φ0.5mmの長石・石英・角閃石		波状口縁、隆刻風横長勾玉状区画→矢羽状短沈線文、内面ミガキに近いナデ。	
51-32		V-18	20	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR6/8明黄褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		渦巻文を取り込んだ楕円区画→矢羽状短沈線文→沈線で区画をなぞる。口縁端部内面に面取り。胴部は地文に条線文あり。内面ミガキに近いナデ。	
51-33		V-15	3	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR3/2黒褐	φ0.3mmの石英・角閃石・赤色粒子		口縁端部肥厚、内面にゆるい稜あり。	
52-34		V-17	7-(4)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子			
52-35		V-17	7-(5)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		口縁部肥厚→沈線充填→隆刻風に隆帯脇沈線施文。	
52-36		V-18	14	縄文	深鉢	中期後葉	口縁〜胴	7.5YR4/4褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		波状口縁、胴部矢羽状短沈線文。	
52-37		V-17	28-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR5/4にぶい黄褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		緩い波状口縁。口縁部横長勾玉状区画→矢羽状短沈線。	
52-38		V-18	6-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子・角閃石		波状口縁。	
52-39		V-17	42	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR6/4にぶい黄橙	φ0.5mmの石英多・長石・角閃石・赤色粒子		波状口縁。	
52-40		V-17	41	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR6/6橙	φ0.5mm位の石英多・白色粒子・赤色粒子		波状口縁。	
52-41		V-17	28-(4)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		口縁部横長勾玉状区画→矢羽状短沈線。内面ヨコミガキ。	
52-42		V-18	10-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの石英・角閃石・褐色粒子		隆刻風横長楕円区画文、短斜行沈線文。	
53-43		V-17	12	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5YR4/6赤褐	φ1〜2mmの石英・長石・角閃石	口:(38.6)	横長の勾玉状区画文→矢羽状短沈線文充填。	
53-44		V-17	11	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR4/3褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子			
53-45		V-18	10-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR5/8明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		隆刻風横長楕円区画文、短斜行沈線文。	
53-46		V-18	9-(4)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR5/8黄褐	φ0.5mmの長石・褐色粒子・角閃石		隆刻風横長楕円区画文→矢羽状短沈線文→楕円区画沈線文でなぞる。	
53-47		V-18	19	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR6/8明黄褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		隆刻風横長楕円区画→短沈線、口縁端部内面に面取り。内面ミガキに近いナデ。	
53-48		V-13	5	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR7/8黄褐	φ0.3mmの長石多		区画沈線→縦位沈線文。	
53-49		V-18	9-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR3/2黒褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子		平縁、隆刻風横長勾玉状区画→斜行短沈線文。	
53-50		V-15	4	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR7/6橙	φ0.3mm多の石英・角閃石・赤色粒子		ゆるい波状口縁、口縁無文部分ヨコミガキ。	
53-51		V-17	15-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR5/6黄褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石		歪んだ土器。口縁内面をつよくヨコナデ。	図53-51と52は同一個体か。
53-52		V-17	15-(2)	縄文	ミニチュア？	—	胴	10YR5/6黄褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石		歪んだ土器。口縁内面をつよくヨコナデ。	
53-53		V-18	27	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR5/6黄褐	φ0.5mmの長石・角閃石		緩い波状口縁、隆帯→縄文(あるいは沈線か)を充填。	
54-54	PL8-1 巻頭口絵2	V-18	2	縄文	深鉢	中期後葉	口縁〜底	5YR4/8赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石	口:33.2 胴:34.2 底:10.8 高:49.8	矢羽状短沈線文→縦長楕円区画沈線文。	F類基準資料。
54-55	PL8-2	V-17	32	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR4/6褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子	体:35.0 底:35.0 高:(30.3)	田の字区画の鱗状短沈線文。施文順序は鱗状短沈線→蛇行沈線→U字状平行沈線。	A類胴部。
55-56		V-17	V-18 9-(5)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	10YR5/3にぶい黄褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子		口縁部に橋状把手の剥離痕あり。貼付隆帯楕円区画→鱗状短沈線、胴部縦長楕円区画沈線→矢羽状短沈線文。	V-18 9-(5)のV18は誤り。V17が正しい。
55-57		V-18	13-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR3/4褐	φ1mmの石英・長石・褐色粒子		矢羽状短沈線文、蛇行沈線文。	内面スス付着。
55-58		V-18	1-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	2.5YR3/6暗赤褐	φ0.5mmの長石・石英・褐色粒子・角閃石		口縁部隆帯→斜行平行沈線→隆帯脇・上沈線、胴部斜行条線→縦位蛇行沈線。	

第1表　焼物観察表(5)

図版番号	写真図版	地点名	台帳番号	焼物種	器種	時期	部位	色調	混和材	法量(cm)	特徴・残存度	出土位置・備考
55-59		V-18	16	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		櫛状工具による縦位条線文→蛇行・縦長楕円区画沈線文。	
55-60		V-17	5	縄文	深鉢	中期後葉	胴・底	2.5YR4/6赤褐	φ0.3mmの石英・長石・角閃石・φ3~4mm赤色粒子	胴:(14.0) 底:6.0 高:(23.0)	施文順序は逆ハ字状沈線文→縦長U字形区画沈線文。内面スス付着。	F级基準資料。
55-61		V-18	39	縄文	深鉢	中期後葉	底	2.5YR5/8明赤褐	φ0.5mmの長石・赤色粒子・角閃石	底:9.0	刻目隆帯→縦位区画沈線文→鎖状短沈線文。底部網代痕。	
56-62	PL8-3	V-17	21-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁~胴	5YR5/8明赤褐	φ0.5mmの長石・石英・角閃石・赤色粒子	口:(27.6)	口縁部・胴部ともに縄文LR縦位。向かって左から右へ回転縄文施文。	図56-62と64は同一個体。
56-63		V-18	28	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	2.5Y7/4浅黄	φ0.5mmの長石・角閃石多		平縁、隆帯→縄文RL縦位→隆帯脇なぞる。内面ヨコナデ→ヨコミガキ。	
56-64		V-17	21-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁~胴	5YR5/8明赤褐	φ0.5mmの長石・石英・赤色粒子・角閃石		縄文LR縦位。	
56-65		V-17	20	縄文	深鉢	中期後葉	口縁~胴	10YR5/4黄褐	φ0.5mmの長石・石英多・角閃石	口:(18.6) 胴:(20.6)	縄文RL→区画凹線文→ミガキ(磨消)。	
56-66		V-17	19	縄文	深鉢	中期後葉	口縁~胴	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの長石・石英・角閃石	口:(22.6)	口縁部・胴部ともに縄文LR縦位。	
56-67		V-12	6	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR5/6明赤褐	φ2~3mmの赤色粒子・長石・石英・角閃石		縄文LR横位。	
56-68		V-17	43	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR5/8黄褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・赤色粒子多		平縁。縄文LR縦位。	
56-69		V-18	29	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR4/3にぶい黄褐	φ0.5mmの長石多・石英・雲母		隆帯区画→縄文LR横位→隆帯脇沈線文。	
56-70		V-18	25	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR4/6褐	φ1mmの白色粒子など		縄文LR横位。	
56-71		V-18	21	縄文	深鉢	中期後葉	口縁~胴	2.5YR5/8明赤褐	φ1mmの長石・赤色粒子多・石英少		口縁部は低隆帯の楕円区画→縄文LR?、胴部幅広の凹線文・縄文LR縦位。	
56-72		V-12	4	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR4/4にぶい赤褐	φ0.5mmの長石・石英多・赤色粒子・角閃石		口縁部区画隆帯貼付→縄文LR、胴部磨消縄文。	
57-73		V-17	16	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/6明褐	φ0.3mmの長石・石英・赤色粒子・角閃石		施文順序は縄文LR→区画凹線文。	
57-74		V-17	23	縄文	深鉢	中期後葉	口縁~胴	5YR4/6赤褐	φ0.5mmの長石・石英・赤色粒子・角閃石	口:(26.6) 胴:(28.4)	口縁部縄文LR横位→区画凹線文、内面強いヨコミガキ、胴部縄文→縦位区画凹線→ミガキ、内面ミガキに近いナデ。	
57-75		V-17	44	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/3褐	φ1mmの白色粒子・赤色粒子多・石英		区画凹線→縄文LR縦位→ミガキ。	
57-76		V-18	34	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR4/2灰黄褐	φ0.3mmの長石・石英・赤色粒子・角閃石		緩い波状口縁。縄文RL→凹線文。	
57-77		V-13	1	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR3/4暗褐	φ0.3mmの長石・石英多・角閃石少		縄文LR横位→凹線文→ミガキ。	
57-78		V-17	17	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR3/3暗褐	φ0.3mmの石英・長石・角閃石・赤色粒子		施文順序は縄文LR→区画凹線文。	
57-79		V-18	35	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR5/4にぶい黄褐	φ0.3mmの長石・石英・角閃石		波状口縁。区画隆帯→縄文RL→隆帯脇凹線文。	
57-80		V-17	14	縄文	深鉢か	中期後葉	口縁	5YR3/2暗赤褐	φ0.3mmの石英・長石・角閃石	口:(15.6)	緩い波状口縁。縄文LないしLRの縦位施文→沈線文。	
57-81		V-18	38	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの長石・赤色粒子・角閃石		縄文LR縦位→蛇行・S字状沈線文。	
57-82		V-17	50	縄文	鉢か	中期後葉	口縁	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石		縄文LR横位→区画沈線文、内面口縁端部肥厚、ヨコミガキ。	
57-83		V-17	51	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR4/6褐	φ0.3mmの長石・石英・角閃石・赤色粒子		内面ヨコミガキ。	
57-84		V-17	46	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR5/6明赤褐	φ0.3mm位の白色粒子・石英・角閃石		波状口縁波頂部。縄文L→区画沈線→ミガキ。内面ミガキ。	
57-85		V-17	47	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR5/4にぶい赤褐	φ0.3mmの長石・角閃石		波状口縁波頂部。縄文L→区画沈線→ミガキ。	先端欠損。
58-86		V-17	18	縄文	深鉢	中期後葉	胴	10YR4/3にぶい黄橙	φ0.3mmの長石・石英・角閃石・赤色粒子		縄文RL縦位→蛇行沈線文・U字形区画沈線文→ミガキ(磨消)。	
58-87		V-12	2・3	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR4/4にぶい赤褐	φ0.5mmの長石・石英多・赤色粒子・角閃石		磨消縄文LR縦位。	2・3接合。
58-88		V-16	1	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR7/6橙	φ0.3mmの石英・角閃石・赤色粒子		タテケズリ→縄文LR横位→区画沈線文。	
58-89		V-17	22	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの長石・石英・赤色粒子・角閃石		縄文RL縦位→区画凹線文、内面タテナデ。	

第1表　焼物観察表(6)

図版番号	写真図版	地点名	台帳番号	焼物種	器種	時期	部位	色調	混和材	法量(cm)	特徴・残存度	出土位置・備考
58-90		V-18	8-(2)	縄文	深鉢か	中期後葉	脚	5YR6/8橙	φ1mmの褐色粒子・長石・石英・角閃石	底:(7.0)	脚部分が欠損している。縄文RL縦位→縦位区画沈線→ミガキ。内面ケズリ→ミガキ。	
58-91		V-18	8-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	10YR5/6黄褐	φ0.3mmの石英・角閃石・長石		縄文RL縦位→縦位区画沈線→ミガキ、内面ミガキ。	
58-92		V-18	7	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR7/8黄橙	φ0.3mmの石英・長石		縄文RL縦位→縦位区画沈線→ミガキ。	
58-93		V-17	52	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの長石多・赤色粒子・角閃石		橋状把手。頸部の区画隆帯内、縄文RL横位。	
58-94		V-18	23	縄文	深鉢	中期後葉	脚	2.5YR5/6明赤褐	φ0.3mm以下の長石多	口:(5.0)	脚部が欠損。三角形スカシの上端がのこる。3単位か。	
58-95		V-17	46	縄文	深鉢	中期後葉	脚	5YR5/8明赤褐	φ0.5mmの長石・石英・赤色粒子		円形のスカシ。	
58-96		V-17	49	縄文	深鉢	中期後葉	脚	5YR6/8橙	φ0.5mmの石英多		円形のスカシ、5単位。	
59-1		V-17	30-(1)	縄文	壷	中期後葉	口縁～胴	5YR4/8赤褐	φ2mmの褐色粒子・長石・石英・角閃石	口:(20.4) 高:(6.3)	幅広の隆帯にそって凹線文が施される。凹線文の中も文様の意匠にそって磨かれている。橋状把手が頸部につく。内面ヨコミガキ。焼成は特に良	内外面に赤色顔料が付着する。図59-1～2は同一個体。3は施文、器面調整が酷似する。
59-2		V-17	30-(3)	縄文	―	中期後葉	胴	5YR5/6明赤褐	φ0.3mmの石英・角閃石・褐色粒子		同上。	
59-3		V-17	30-(2)	縄文	壷	中期後葉	口縁～胴	5YR4/6赤褐	φ2mmの褐色粒子・長石・石英・角閃石		同上。	
59-4		V-13	6	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR4/6褐	φ0.3mmの長石・石英多・角閃石少		櫛状工具による波状条線文→縦位区画沈線文。	
59-5		V-18	24	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	10YR6/4にぶい黄橙	φ0.3mmの白色粒子・角閃石		緩い波状口縁。波状沈線は連弧状の意匠を描いているものか。	
59-6		V-17	59	縄文	鉢	中期	把手	7.5YR6/6橙	φ0.2mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		S字凹線文。	
59-7		V-13	6	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR6/6橙	φ0.5mmの白色粒子多・石英・角閃石・赤色粒子			
59-8		V-18	31	縄文	深鉢か	中期後葉	胴	10YR7/6明黄褐	φ0.5mmの長石多・石英・角閃石		X字状把手。	
59-9		V-18	30	縄文	深鉢	中期後葉	胴	2.5YR5/3黄褐	φ0.5mmの長石多・角閃石・赤色粒子		縄文LR→区画平行沈線・連続刺突文→区画内ミガキ。	
59-10		V-12	5	縄文	?	後期初か?	胴	2.5Y6/6明黄褐	φ0.3mmの長石・石英・角閃石・赤色粒子		平行刺突文、縄文LR斜位。	
59-11		V-17	13-(2)	縄文	?	中期後葉	胴	5YR4/6赤褐	φ0.5mmの石英・長石・雲母・角閃石		上端擬口縁か。	
59-12		V-17	13-(1)	縄文	?	中期後葉	口縁～胴	10YR5/8黄褐	φ0.3mmの石英・長石・褐色粒子	口:(9.8) 胴:(11.0)	口唇部面取り、先端が尖っていない棒状工具で連続刺突。	
59-13		V-13	4	縄文	?	中期?	口縁	7.5YR6/6橙	φ0.5mmの石英多・長石・角閃石・雲母		受口状?かすかに連続刻み、棒状工具の連続刺突。	
59-14		W-11	2	縄文	壷	中期後期	把手	7.5YR5/6明褐	φ0.2mmの石英・白色粒子		瓢形壷の頸部把手。	
60-1	PL7-5	V-17	2-(1)	縄文	浅鉢	中期後葉	口縁～胴	7.5YR6/6橙	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子	口:(48.0) 高:(14.3)	上面からみるとかなり歪な楕円形を呈す。口縁部は外反し、受口状になる。	
60-2	PL7-6	V-17	24	縄文	浅鉢	中期後葉	口縁～胴	7.5YR6/4にぶい橙	φ1mmの石英・長石・褐色粒子φ2～3mm砂粒多	口:42.0 高:(15.7)	内面に断面三角形の受口状の隆帯が貼付される。隆帯脇ヨコケズリ→ヨコミガキ。	後期中葉(加曽利B式)に降る可能性もある。
61-1		U-20	1	縄文	深鉢	後期前葉	胴	10YR4/6褐	φ0.2mmの石英・長石		磨消縄文LR。	
61-2		外	29	縄文	深鉢?	中期か。	底	7.5YR6/8橙	φ0.2mmの長石・褐色粒子	底:8.7	網代痕。	
61-3		外	30	縄文	?	後期	底	10YR5/6黄褐	φ0.5mmの長石・角閃石・褐色粒子	底:(7.2)	網代痕。	堀之内式か。
61-4		V-18	22	縄文	ミニチュア	中期後葉	口縁～底	10YR7/6明黄褐	φ1mmの白色粒子多	口:4.6 底:2.8 高:2.0	ナデ調整。底部付近に浅い沈線。	
61-5		V-18	37	縄文	ミニチュア?	―	底	10YR4/4褐	φ0.5mmの白色粒子多・石英・赤色粒子・角閃石	底:3.2		
62-1		V-18	ドグウ1	縄文	土偶	中期	下半	10YR5/6黄褐	φ0.5mmの長石・角閃石		円形浮文は臍の表現?。	
62-2		V-17	ドグウ3	縄文	土偶	中期	胴	2.5YR8/3淡黄	φ0.2mmの石英・長石・角閃石		両側面と背面に沈線文、二つの円形浮文は乳房表現。	
62-3		V-16	ドグウ2	縄文	土偶	中期	脚	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・角閃石・褐色粒子			
62-4		V-17	57	縄文	―	中期か	突起か	5YR4/6明赤褐	φ0.2mmの石英・長石・角閃石		上面に渦巻文。	
62-5		V-17	53	縄文	土鈴か。	中期	―	10YR5/6黄褐	φ0.5mmの長石・石英・赤色粒子		全体に摩滅。	
62-6		V-17	56	縄文	耳栓	中期	―	5YR5/6明赤褐	φ0.2mmの石英・雲母			

第1表　焼物観察表（7）

図版番号	写真図版	地点名	台帳番号	焼物種	器種	時期	部位	色調	混和材	法量(cm)	特徴・残存度	出土位置・備考
63-1		SB10	1	土師器	小型丸底鉢	古墳	口縁～底	7.5YR6/4にぶい橙	φ2mmの長石・角閃石・石英	口:11.4 底:3.8 高:5.1	内面および胴部外面上半以上ヨコハケ・胴部外面下半以下ヨコヘラケズリ→底部外面を除き粗いミガキ、口縁部・体部一部欠。	床直だが混入(遺構外)複捨品。
63-2		SB10	4	土師器	小型丸底鉢	古墳	口縁	7.5YR5/2灰褐	φ1mmの石英・長石・角閃石	口:(10.4)	ヨコナデ→ミガキ、口縁部1/3残。	混入(遺構外)。
63-3		V-17	35	土師器	屈折脚高坏	古墳	脚	7.5YR6/4にぶい橙	φ1mmの長石・石英・角閃石		外面ハケメ、内面ヘラケズリ、脚上段部残。	
63-4		V-17	36	土師器	高坏	古墳	脚	10YR7/4にぶい黄橙	φ0.5mmの褐色粒子・長石・角閃石		脚部外面ハケメ、坏部内面ミガキ、坏部内面上段にしぼり痕あり、脚上段部1/2残。	外面全体に黒斑あり。
63-5		V-17	34	土師器	高坏	古墳	脚	10YR7/4にぶい黄橙	φ0.5mmの長石・石英・角閃石	脚径:(8.4) 脚高:4.4	外面ハケメ・内面しぼり痕→裾部ヨコナデ、脚部1/2残。	外面全体に黒斑あり。
63-6		外	23	土師器	碗か盤	古代	脚	7.5YR7/6橙	φ1mmの長石		ロクロ調整、坏・脚接合部のみ残。	複捨品。
63-7		外	25	土師器	甕	古代	口縁	7.5YR4/4褐色	φ0.5mmの長石・角閃石・褐色粒子多	口:(19.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、口唇部1/3残。	「武蔵型」。
63-8		外	26	土師器	甕	古代	口縁	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの長石・褐色粒子・角閃石	口:(21.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、口縁部1/6残。	「武蔵型」。
63-9		V-17	40	土師質	小皿	中世	口縁～底	10YR7/3にぶい黄橙	φ1mmの長石・角閃石・雲母	口:(10.4) 底:(7.4) 高:2.5	ロクロ調整→底部外面手持ちヘラケズリ、1/3残。	
63-10		V-17	39	土師質	小皿	中世	口縁～底	7.5YR7/4にぶい橙	φ3mmの褐色粒子	口:(8.2) 底:(7.0) 高:1.6	ロクロ調整→底部回転糸切り、1/8残。	
63-11		W-6	2	土師質	小皿	中世		5YR4/6赤褐	φ0.5mmの石英・長石	口:8.6 底:5.4 高:1.8	ロクロ調整→底部回転糸切り、1/6残。完形。	灯明皿。
63-12		外	24	土師質	小皿	中世	口縁～底	5YR6/4にぶい橙	φ0.5mmの角閃石・長石	口:(6.8) 底:(4.6) 高:1.5	ロクロ調整→底部回転糸切り、1/4残。	灯明皿。
63-13		外	21	土師質	小皿	中世	口縁～底	7.5YR5/4にぶい褐	φ0.5mmの長石	口:(7.6) 底:5.0 高:2.5	ロクロ調整→底部回転糸切り、1/2残。	在地系・灯明皿、酸化炎焼成胎土精選せず。
63-14		外	11	土師質	香炉	中世	口縁	5YR7/8橙	φ1mmの褐色粒子・長石	口:(10.8) 底:(6.6) 受部高:3.2	ロクロ調整→底部回転糸切り、1/4残。	在地系・足4本、酸化炎焼成胎土精選せず。
63-15		外	13	土師質	内耳鍋	中世	口縁	5YR6/4にぶい橙	φ0.5mmの褐色粒子・長石	口:(30.0)	ロクロ調整、内耳部分のみ残。	在地系・酸化炎焼成。
63-16		外	16	土師質	内耳鍋	中世	口縁	10YR7/3にぶい黄橙	φ1mmの砂・石英・褐色粒子	口:(32.0)	ロクロ調整、内耳部分のみ残。	酸化炎焼成。
63-17		外	20	土師質	内耳鍋	中世	底	10YR7/4にぶい黄橙	φ1mmの砂・石英・角閃石	底:(25.0)	ロクロ調整→底部外面砂底、底部1/12残。	胴部外面に煤付着、酸化炎焼成。
63-18		外	17	土師質	内耳鍋	中世	底	7.5YR7/4にぶい橙	φ1mmの褐色粒子・石英	底:(30.0)	ロクロ調整→底部外面砂底、底部1/10残。	酸化炎焼成。
63-19		V-17	33	須恵器	高台付き坏	古代	口縁	10YR5/1褐灰	φ1mmの長石	口:(14.4)	ロクロ調整、口縁部1/6残。	
63-20		外	2	須恵器	坏	古代	口縁	5Y 6/1灰	φ1mmの長石	口:(13.6)	ロクロ調整、口縁部1/3残。	
63-21		外	3	須恵器	坏	古代	口縁～底	5Y 6/1灰	φ1mmの長石	口:(13.0) 底:5.4 高:4.5内底7.4	ロクロ調整、底部回転糸切り、1/3残。	
63-22		外	4	須恵器	坏	古代	口縁～底	5Y 5/1灰	φ0.5mmの長石	口:(12.1) 底:(6.5) 高:4.0 内底(6.6)	ロクロ調整、底部回転糸切り、1/3残。	
63-23		外	1	須恵器	甕	古代	口縁	N6/灰	φ0.5mmの長石		ロクロ調整、櫛歯状工具による波状文、口唇部一部残。	
63-24		外	7	須恵器	甕	古代	口縁	N6/灰	φ0.5mmの長石	口:(15.4)	ロクロ調整、口唇部1/6残。	
63-25		V-17	37	須恵器	突帯付四耳壷	古代	胴	10YR5/1褐灰	φ1mmの長石	体:(27.0)	ロクロ調整.突帯以下外面平行線文叩き、内面ユビナデもしくは無文当て具による叩き、胴部1/4残。	
63-26		外	10	須恵器	大甕	古代	胴	5Y 5/1灰	φ1mmの長石・黒色粒子		ロクロ調整、外面平行線文叩き後カキ目、内面同心円文叩き、肩部一部残。	
63-27		V-11	8	須恵器	大甕	古代	口縁	2.5YR6/2灰黄	φ0.5mmの黒色粒子・白色粒子		ロクロ調整、櫛歯状工具による波状文、口唇部一部残。	
63-28		W-6	3	古瀬戸	瓶類	中世	底	地10YR6/4にぶい黄橙・釉7.5Y7/2灰白	精	底:5.8	ロクロ調整→底部外面回転糸切り、底部3/4残。	底部外面を除き釉付着。
63-29		外	6	須恵質	擂鉢	中世	底	5Y 7/1灰白	φ2mmの砂	底:(10.0)	ロクロ調整→胴部外面ヘラナデ、底部1/8残。	還元炎焼成。
63-30		外	8	青磁	碗	中世	口縁	5GY7/1明オリーブ	精	口:(17.0)	底部1/10残。	龍泉窯系ヘラ削り蓮弁文。
63-31		外	5	常滑	擂鉢	近世	口縁	5YR4/4にぶい赤褐	精		ロクロ調整、口唇部一部残。	
		V-12	1	縄文	深鉢	中期か	底	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの長石多・石英・角閃石・雲母	口:8.8		
		V-13	7	須恵器	坏	古代	底	2.5Y6/1黄灰	精	底:(6.8)	ロクロ調整。	

第1表 焼物観察表（8）

図版番号	写真図版	地点名	台帳番号	焼物種	器種	時期	部位	色調	混和材	法量(cm)	特徴・残存度	出土位置・備考
		V-15	1	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR5/6明赤褐	φ0.5mm中の石英・長石・褐色粒子		上端はっきりした擬口縁、タテケズリ→横位縄文LR→区画沈線文。	
		V-15	2	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR6/6橙	φ0.3mm多の石英・角閃石・赤色粒子		縦位区画平行沈線文、鱗状短沈線文、上下擬口縁で欠損。	
		V-17	26	縄文	深鉢	中期後葉	胴	2.5YR4/6赤褐	φ1mmの褐色粒子・砂粒・有色の円形粒子		鱗状短沈線文土器。摩滅著しい。	
		V-17	28-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		貼付隆帯→ハ字状斜行沈線文。	
		V-17	28-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの長石・石英・角閃石		鱗状短沈線文土器。摩滅著しい。	
		V-17	28-(5)	縄文	深鉢	中期後葉	口縁	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子		口縁部貼付隆帯→矢羽状短沈線文→隆帯脇・上沈線文。	
		V-17	29-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR5/8明赤褐	φ0.3mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		縦位沈線文・櫛状工具による平行条線文。内面ミガキに近いナデ。	
		V-17	29-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	胴～底	2.5YR4/6赤褐	φ0.5mmの石英・角閃石・褐色粒子・長石	底:8.4	櫛状工具による条線文。	
		V-17	7-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・雲母・褐色粒子・砂粒		隆帯貼付→鱗状短沈線文。	
		V-17	7-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR5/4にぶい褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		隆帯貼付→鱗状短沈線文。	
		V-17	7-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		縦位区画平行沈線文・鱗状短沈線文。	
		V-18	12	縄文	鉢?	中期後葉	胴	7.5YR5/8明褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		同心円状の沈線文、かすかに器面に赤彩が残る。	
		V-18	13-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR5/6明赤褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子・角閃石		鱗状短沈線文。	
		V-18	17-(2)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR5/6明褐	φ0.5mmの石英・長石・褐色粒子		口縁部の鱗状短沈線文。	
		V-18	17-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR4/3褐	φ1mmの石英・長石・角閃石・褐色粒子		胴部の鱗状短沈線文。	
		V-18	26	縄文	深鉢	中期後葉	胴	10YR6/6明黄褐	φ0.5mmの石英・長石・角閃石多		縦位区画沈線・矢羽状沈線文。	
		V-18	33	縄文	鉢?	中期後葉	胴	7.5YR5/8明褐	φ1mmの白色粒子多・石英・角閃石		陰刻風渦巻文。	
		V-18	40	縄文	深鉢	中期	底	5YR4/6赤褐	φ0.5mmの長石多・石英・赤色粒子	底:11.0		
		V-18	6-(1)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	5YR5/8明赤褐	φ1mmの石英・褐色粒子・長石		鱗状短沈線文か。器面の摩滅著しい。	
		V-18	6-(3)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR5/4にぶい褐	φ2～3mmの長石・褐色粒子		鱗状短沈線文か。器面の摩滅著しい。	
		V-18	6-(4)	縄文	深鉢	中期後葉	胴	7.5YR6/8橙	φ2～3mm褐色粒子・石英・長石		鱗状短沈線文か。器面の摩滅著しい。	
		外	12	土師質	内耳鍋	中世	口縁	7.5YR6/4にぶい橙	φ0.5mmの長石・角閃石	口:27.8		
		外	14	土師質	—	中世	口縁	7.5YR5/4にぶい褐	φ0.5mmの長石・褐色粒子・角閃石	口:24.6		
		外	15	土師質	内耳鍋	中世	口縁	7.5YR6/4にぶい橙	φ0.5mmの長石・石英	口:27.8		
		外	18	土師質	内耳鍋	中世	底	7.5YR2/1黒	φ1mmの砂・褐色粒子	底:19.2		
		外	19	土師質	内耳鍋	中世	底	7.5YR4/1褐灰	φ0.5mmの長石・白色粒子・角閃石	底:33.4		
		外	22	土師質	—	-	底	10YR6/3にぶい黄橙	φ2mmの褐色粒子・長石	底:5.2		
		外	9	須恵器	甕?	古代	胴	2.5Y6/1黄灰	φ2mmの長石			

註1）焼物種で古墳時代から古代の酸化炎焼成の焼物を土師器、還元炎焼成の焼物を須恵器とし、中世以降のものは、それぞれ土師器（土器）、須恵器（陶器）とした。
2）混和材は目立った順に記述。
3）法量の口は口径、胴は胴径、底は底径、高台は高台径、高は高さの略。
また（　　）内の数字は、復元もしくは一部欠損であることを示す。

第2表　石器観察表(1)

図版番号	写真図版	台帳番号	地点名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
64-1	PL9-1	1	SK026		石鏃	(2.5)	2.0	0.5	1.7	硬質頁岩	先端欠
64-2	PL9-2	2	SK077		石鏃	2.0	(1.7)	0.4	0.7	黒曜石	片脚欠
64-3	PL9-3	3	SD02		石鏃	2.6	(1.5)	0.4	0.8	黒曜石	
64-4	PL9-4	4	SD03		石鏃	1.9	1.3	0.4	0.5	黒曜石	
64-5	PL9-5	5	V-13	検出面	石鏃	1.3	0.9	0.3	0.2	黒曜石	
64-6	PL9-6	6	V-17		石鏃	1.6	1.1	0.3	0.4	黒曜石	
64-7	PL9-7	7	V-17	包含層	石鏃	1.6	1.2	0.2	0.2	黒曜石	
64-8	PL9-8	8	V-17	包含層	石鏃	2.0	(1.4)	0.3	0.5	チャート	右半欠
64-9	PL9-9	9	V-17	包含層	石鏃	2.1	(1.9)	0.2	0.4	黒曜石	片脚欠
64-10	PL9-10	10	V-18	包含層	石鏃	2.0	1.6	0.3	0.6	黒曜石	
64-11	PL9-11	11	V-18	包含層	石鏃	1.9	(1.6)	0.2	0.5	黒曜石	片脚先端欠
64-12	PL9-12	12	遺構外	検出面	石鏃	3.1	(1.5)	0.3	1.0	黒曜石	片脚欠
64-13	PL9-13	13	遺構外	表採	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.9	黒曜石	
64-14	PL9-14	14	遺構外	検出面	石鏃	1.3	1.0	0.3	0.2	黒曜石	
64-15	PL9-15	15	遺構外	表採	石鏃	1.8	(1.0)	0.3	0.4	黒曜石	片脚先端欠
64-16	PL9-16	16	遺構外	表採	石鏃	2.7	1.8	0.3	1.1	黒曜石	
64-17	PL9-17	17	遺構外	検出面	石鏃	(2.5)	1.8	0.3	1.0	黒曜石	先端欠
64-18	PL9-23	18	SD03		石錐	(2.0)	(1.0)	0.5	0.8	ガラス質安山岩	
64-19	PL9-24	19	SD03		石錐	2.6	0.9	0.5	1.1	黒曜石	
64-20	PL9-25	20	SD03		石錐	2.0	0.5	0.5	0.6	黒曜石	
64-21	PL9-26	21	V-17		石錐	2.3	1.1	0.5	1.1	チャート	
64-22	PL9-27	22	V-17		石錐	(2.6)	1.7	0.4	2.0	玉髄	先端欠
64-23	PL9-30	23	遺構外		模形石器	2.7	2.7	0.7	4.9	黒曜石	
64-24	PL9-31	24	SK026		RF	1.5	1.5	0.5	0.9	黒曜石	
64-25	PL9-32	25	V-15	検出面	RF	2.3	1.6	0.7	2.5	黒曜石	
64-26	PL9-33	26	V-15	検出面	RF	1.8	1.8	0.4	1.2	黒曜石	
64-27	PL9-34	27	V-17	包含層	RF	(1.9)	2.3	0.4	2.0	黒曜石	石鏃未製品か
64-28	PL9-35	28	遺構外	検出面	RF	2.8	(1.8)	0.4	2.1	黒曜石	石鏃未製品か
64-29	PL9-38	29	遺構外	検出面	RF	4.3	(2.4)	1.2	7.3	黒曜石	石鏃未製品か
64-30	PL9-39	30	U-20	検出面	UF	2.7	1.3	0.3	0.8	黒曜石	
64-31	PL9-40	31	V-13	検出面	UF	(2.1)	1.5	0.6	1.7	黒曜石	
64-32	PL9-41	32	V-17	包含層	UF	3.5	1.6	0.4	2.0	黒曜石	
64-33	PL9-42	33	V-17	包含層	UF	(5.1)	1.6	0.5	4.4	黒曜石	
65-34	PL9-45	34	V-18		UF	2.7	1.3	0.4	1.3	黒曜石	
65-35	PL9-46	35	遺構外	検出面	UF	(2.5)	2.2	0.7	3.0	黒曜石	下半欠
65-36	PL9-47	36	V-17	包含層	石核	3.4	2.3	1.4	10.1	黒曜石	
65-37	PL9-48	37	V-17	包含層	石核	2.8	2.4	1.5	7.9	黒曜石	
65-38	PL9-49	38	V-17	包含層	石核	4.4	4.5	2.1	40.9	黒曜石	
65-39	PL9-50	39	V-18	包含層	石核	2.4	2.2	1.3	8.1	黒曜石	
66-1	PL10-1	40	SB04		打斧	(10.9)	4.9	1.5	107.1	安山岩	刃部欠
66-2	PL10-4	43	SB05		打斧	10.8	3.9	1.7	95.8	千枚岩質粘板岩	
66-3	PL10-2	41	SB06		打斧	11.0	9.5	3.5	315.2	頁岩	
66-4	PL10-3	42	SB06	pit1	打斧	13.6	5.3	2.5	188.4	安山岩	
66-5	PL10-5	44	SB10	カマド	打斧	(5.7)	4.8	1.9	88.0	安山岩	両端欠
66-6	PL10-6	45	SK094	X-2-no.1	打斧	7.5	4.2	1.6	57.3	頁岩	
66-7	PL10-7	46	SD01		打斧	10.9	6.0	2.1	150.0	粘板岩	
66-8	PL10-10	49	V-13	包含層	打斧	14.9	6.1	1.2	141.1	安山岩か	
67-9	PL10-13	52	V-13	検出面	打斧	13.5	5.5	1.5	140.8	安山岩	
67-10	PL10-9	48	V-13	包含層	打斧	15.5	(5.3)	1.6	171.1	安山岩	刃部欠
67-11	PL10-12	51	V-13	包含層	打斧	11.5	5.9	1.2	121.4	安山岩	刃部欠
67-12	PL10-11	50	V-13	包含層	打斧	12.0	6.0	1.0	94.6	安山岩か	
67-13	PL10-8	47	V-13	検出面	打斧	11.3	3.7	1.9	105.5	凝灰岩質粘板岩	
67-14	PL10-17	56	V-13・18	先行トレンチ	打斧	13.5	7.7	3.6	417.3	砂岩	
67-15	PL10-14	53	V-13・18	先行トレンチ	打斧	10.7	6.1	0.7	60.7	粘板岩	
67-16	PL10-15	54	V-14	検出面	打斧	9.0	4.3	1.6	72.3	粘板岩	
67-17	PL10-16	55	V-15	検出面	打斧	9.7	4.5	1.4	79.0	粘板岩	

第2表 石器観察表(2)

図版番号	写真図版	台帳番号	地点名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
68-18	PL10-20	59	V-17	包含層	打斧	11.5	5.8	1.2	108.9	安山岩	
68-19	PL10-19	58	V-17	包含層	打斧	13.1	6.4	2.1	184.4	ガラス質安山岩	刃部一部欠
68-20	PL10-21	60	V-17	包含層	打斧	12.7	6.2	2.2	188.0	安山岩か	
68-21	PL10-23	62	V-17	SB?南東	打斧	13.9	5.8	1.8	181.9	安山岩	
68-22	PL10-24	63	V-17	包含層	打斧	(11.6)	5.7	2.0	161.9	安山岩	刃部一部欠
68-23	PL10-22	61	V-17	包含層	打斧	12.2	8.2	1.7	249.2	安山岩	刃部欠
68-24	PL10-18	57	V-17	包含層	打斧	9.9	6.7	2.7	160.3	硬砂岩	
69-25	PL10-25	64	V-17	包含層	打斧	13.1	6.2	1.4	132.1	安山岩	基部欠
69-26	PL11-3	66	V-17	包含層	打斧	12.6	5.7	1.8	150.8	安山岩	
69-27	PL11-2	65	V-17	包含層	打斧	16.2	6.0	1.5	166.7	安山岩	
69-28	PL11-5	68	V-17	包含層	打斧	14.0	6.1	1.6	155.9	安山岩	
69-29	PL11-4	67	V-17	包含層	打斧	(11.4)	6.2	2.1	192.5	安山岩	両端欠
69-30	PL11-6	69	V-17	包含層	打斧	(12.2)	6.3	1.7	201.8	安山岩	基部欠
69-31	PL11-12	75	V-17	包含層	打斧	12.4	5.0	1.8	165.6	安山岩	
69-32	PL11-13	76	V-17	包含層	打斧	12.1	4.5	1.7	138.2	安山岩	
70-33	PL11-11	74	V-17	SB06	打斧	16.2	6.2	1.5	230.1	安山岩	
70-34	PL11-8	71	V-17	SB?北東	打斧	(17.2)	6.3	2.2	320.0	安山岩	
70-35	PL11-15	78	V-17	包含層	打斧	(12.0)	6.7	1.2	127.8	安山岩	基部欠
70-36	PL11-9	72	V-17	包含層	打斧	11.0	4.3	1.7	92.2	安山岩か	
70-37	PL11-14	77	V-17	包含層	打斧	11.2	5.5	1.3	123.6	安山岩	
70-38	PL11-17	80	V-17	包含層	打斧?	9.1	7.1	1.8	151.8	ガラス質安山岩	石核か。背面に自然面残す。
70-39	PL11-16	79	V-17	包含層	打斧	(12.1)	6.0	1.3	125.6	安山岩	
70-40	PL11-18	81	V-17	包含層	打斧	(8.4)	5.3	2.1	89.7	粘板岩	
71-41	PL11-7	70	V-17	包含層	打斧	12.9	5.5	1.9	173.1	安山岩	
71-42	PL11-1	133	V-17	包含層	打斧	(13.0)	8.6	1.1	184.1	安山岩	基部欠
71-43	PL11-19	82	V-17	包含層	打斧	(11.1)	5.3	1.6	141.0	安山岩	
71-44	PL11-10	73	V-17	SB?北東	打斧	10.8	5.2	1.1	61.3	千枚岩質粘板岩	
71-45	PL11-20	83	V-17	包含層	打斧	11.6	5.0	2.2	147.2	硬砂岩	
71-46	PL12-1	84	V-17	包含層	打斧	9.4	4.5	1.4	77.4	千枚岩質粘板岩	
71-47	PL12-6	89	V-18	包含層	打斧	14.2	5.7	1.4	170.0	安山岩	
71-48	PL12-12	95	V-18	包含層	打斧	12.2	5.2	2.1	158.7	安山岩	
72-49	PL12-2	85	V-18	包含層	打斧	(10.9)	6.7	1.7	194.1	安山岩	基部欠
72-50	PL12-4	87	V-18	包含層	打斧	(11.3)	5.6	1.3	105.3	安山岩	
72-51	PL12-5	88	V-18	包含層	打斧	(12.0)	6.2	1.9	173.1	安山岩	基部欠
72-52	PL12-3	86	V-18	包含層	打斧	(10.8)	5.1	1.5	119.7	安山岩	
72-53	PL12-8	91	V-18	包含層	打斧	12.4	5.6	1.5	149.3	安山岩	
72-54	PL12-7	90	V-18	包含層	打斧	11.5	5.1	1.6	123.4	安山岩	
72-55	PL12-14	97	V-18	包含層	打斧	13.9	5.6	2.0	212.9	安山岩	
72-56	PL12-13	96	V-18	包含層	打斧	(12.6)	5.9	2.1	238.0	安山岩	刃部欠
73-57	PL12-16	99	V-18	包含層	打斧	10.8	4.5	2.0	95.5	千枚岩質粘板岩	
73-58	PL12-15	98	V-18	包含層	打斧	11.2	4.3	2.3	168.8	千枚岩質粘板岩	基部欠
73-59	PL12-19	102	V-18	包含層	打斧	(13.3)	5.6	1.4	155.9	安山岩	
73-60	PL12-9	92	V-18	包含層	打斧	(12.5)	5.0	1.4	133.5	安山岩	基部欠
73-61	PL12-20	103	V-18	包含層	打斧	11.1	5.4	1.3	135.9	安山岩	
73-62	PL12-21	104	V-18	包含層	打斧	11.2	4.7	1.5	98.8	安山岩	
73-63	PL12-18	101	V-18	包含層	打斧	(11.3)	7.1	1.8	167.8	安山岩	基部欠
73-64	PL12-17	100	V-18	包含層	打斧	(11.3)	6.1	1.8	96.0	安山岩	基部欠
74-65	PL12-11	94	V-18	包含層	打斧	10.8	5.1	1.8	131.3	安山岩	両端欠
74-66	PL12-23	106	V-18	包含層	打斧	9.7	4.6	1.0	52.2	凝灰岩質粘板岩	
74-67	PL12-10	93	V-18	包含層	打斧	(9.5)	6.1	2.3	102.9	頁岩	両端欠
74-68	PL12-24	107	V-18	包含層	打斧	8.4	5.3	1.4	70.7	凝灰岩質粘板岩	
74-69	PL12-22	105	V-18	包含層	打斧	(9.1)	7.0	1.4	125.6	安山岩	基部欠
74-70	PL12-25	108	遺構外	検出面	打斧	12.9	4.6	1.4	109.8	千枚岩質粘板岩	
74-71	PL13-1	109	遺構外	検出面	打斧	12.1	5.1	1.5	115.6	千枚岩質粘板岩	
74-72	PL13-2	110	遺構外	検出面	打斧	11.8	4.9	1.2	115.5	千枚岩質粘板岩	基部欠
75-73	PL13-3	111	遺構外	検出面	打斧	11.9	4.4	1.6	113.9	千枚岩質粘板岩	
75-74	PL13-4	112	遺構外	検出面	打斧	11.4	5.3	1.7	111.5	安山岩	

第２表　石器観察表（３）

図版番号	写真図版	台帳番号	地点名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
75-75	PL13-5	113	遺構外	検出面	打斧	11.2	5.1	1.5	122.3	安山岩	基部欠
75-76	PL13-6	114	遺構外	検出面	打斧	(10.9)	7.3	2.1	166.5	安山岩	基部欠
75-77	PL13-8	116	遺構外	表土	打斧	(11.7)	6.0	1.1	117.9	安山岩	基部欠
75-78	PL13-7	115	遺構外	検出面	打斧	9.5	6.4	1.0	86.9	安山岩	
75-79	PL13-9	117	遺構外	検出面	打斧	10.7	4.8	1.9	117.7	粘板岩	
75-80	PL13-10	118	遺構外	検出面	打斧	10.0	4.3	1.4	80.2	輝晶片岩	
76-81	PL13-11	119	遺構外	表採	打斧	8.6	4.3	1.1	59.8	凝灰岩質粘板岩	脆い
76-82	PL19-1	120	V-17	包含層	打斧	9.9	7.3	3.8	295.8	粘板岩	石核か
77-1	PL19-2	130	V-13	包含層	磨斧	9.2	5.1	2.4	199.6	角閃岩か	出土標高652.13～5m
77-2	PL19-3	129	SK028		磨斧	(7.1)	5.5	2.8	168.3	角閃岩か	刃石、基部欠
77-3	PL19-5	123	V-17	包含層	磨石	12.1	7.2	3.3	459.0	硬砂岩	
77-4	PL19-6	124	V-18		磨石	9.6	7.2	4.7	443.0	安山岩	
77-5	PL19-8	125	V-17	包含層	磨石	8.1	7.8	3.1	271.9	安山岩	
77-6	PL19-7	128	V-14・15	包含層	磨石	8.8	6.9	4.0	328.3	安山岩	
78-1	PL19-11	135	SE01		砥石	(5.0)	2.6	2.6	42.7	砂岩	欠
78-2	PL19-9	136	SE01		砥石	(6.7)	3.6	3.4	110.4	凝灰岩	欠
78-3	PL19-10	127	遺構外	検出面	砥石	(6.4)	2.2	2.0	39.5	凝灰岩	欠
78-4	PL19-12	126	遺構外	検出面	砥石	(7.7)	4.2	3.9	147.4	凝灰岩	欠
78-5	PL19-13	122	V-18	包含層	砥石	(9.2)	3.3	2.1	74.1	凝灰岩	欠
78-6	PL19-14	121	V-17	包含層	砥石	(10.0)	5.4	3.8	231.6	凝灰岩	欠
78-7	PL19-4	134	SE01		磨石	(11.2)	4.5	4.2	310.0	安山岩	スス付着、欠
79-1	PL8-9	137	遺構外	表採	石鉢	9.7	10.3	7.3	900	安山岩	
79-2	PL8-10	138	遺構外	暗渠	石鉢	24.4	19.4	11.5	5,820	安山岩	
79-3	PL8-7	131	遺構外	暗渠	石臼	(27.2)	(16.2)	10.0	3,610	安山岩	欠
79-4	PL8-8	140	V-18	―	石臼	(29.6)	(16.7)	12.3	5,210	安山岩	欠
79-5	PL8-11	132	遺構外		五輪塔	24.2	22.8	15.6	5,200	安山岩	火輪
79-6	PL8-11	139	遺構外	暗渠	五輪塔	20.8	15.0	14.8	2,300	安山岩	空風輪
	PL13-12	326	V-13	検出面	打斧	(13.6)	6.3	2.2	239.6	安山岩	刃部欠
	PL13-13	327	V-13	検出面	打斧	(8.6)	4.4	2.1	92.5	安山岩	刃部欠
	PL13-14	328	V-13	包含層	打斧	7.9	4.5	1.3	52.6	粘板岩	
	PL13-15	329	V-13・18トレンチ	―	打斧	(9.0)	5.1	1.3	87.9	粘板岩	基部？欠
	PL13-16	330	V-13	包含層	打斧	(9.3)	6.1	3.0	182.8	安山岩	両端欠
	PL13-17	331	V-13	包含層	打斧	(9.1)	5.3	2.3	122.8	粘板岩	刃部欠
	PL13-18	332	V-13	包含層	打斧	(7.1)	5.0	1.7	74.2	粘板岩	両端欠
	PL13-19	333	V-13	包含層	打斧	(8.1)	4.2	1.9	74.8	硬砂岩か	刃部欠
	PL13-20	334	V-13	検出面	打斧	10.0	5.8	1.8	122.9	千枚岩質粘板岩	
	PL13-21	335	V-13	包含層	打斧	10.2	5.3	1.4	94.9	安山岩	
	PL13-22	336	V-13	検出面	打斧	(8.6)	5.6	0.9	89.1	安山岩	刃部欠
	PL13-23	337	V-13	包含層	打斧	(8.9)	5.5	1.0	66.3	安山岩	基部欠
	PL13-24	338	V-13	検出面	打斧	(9.8)	6.2	1.9	131.4	安山岩	刃部欠？
	PL13-25	339	V-13	包含層	打斧	(9.6)	4.9	1.0	73.4	安山岩	刃部欠
	PL13-26	340	V-13	検出面	打斧	(9.1)	6.2	1.8	134.0	安山岩	基部欠
	PL13-27	341	V-13	検出面	打斧	9.8	5.3	1.1	85.1	安山岩	
	PL13-28	342	U-15	検出面	打斧	11.6	6.0	1.2	142.8	安山岩	
	PL13-29	343	W-6	検出面	打斧	(10.3)	5.4	1.2	100.2	安山岩か	両端欠
	PL13-30	344	W-6	検出面	打斧	(7.3)	4.4	1.9	90.1	安山岩	刃部欠
	PL13-31	345	W-6	検出面	打斧	10.8	4.7	1.5	95.4	安山岩	
	PL14-1	201	V-17トレンチ	―	打斧	(8.2)	5.3	1.7	130.4	安山岩	刃部欠
	PL14-2	202	V-17	包含層	打斧	(9.7)	5.7	1.4	101.6	安山岩	刃部欠
	PL14-3	203	V-17	包含層	打斧	(7.0)	6.6	1.6	109.1	安山岩か	両端欠
	PL14-4	204	V-17	包含層	打斧	(7.8)	5.7	2.2	140.1	硬砂岩か	刃部欠
	PL14-5	205	V-17	包含層	打斧	(7.3)	4.3	1.2	44.2	粘板岩	基部欠
	PL14-6	206	V-17	包含層	打斧	(7.2)	4.4	1.7	59.2	粘板岩	刃部欠
	PL14-7	207	V-17	包含層	打斧	(8.4)	6.9	1.3	87.2	安山岩	基部欠
	PL14-8	208	V-17	包含層	打斧	9.0	4.4	1.7	80.0	千枚岩質粘板岩か	
	PL14-9	209	V-17	包含層	打斧	9.7	4.7	1.7	114.3	粘板岩	
	PL14-10	210	V-17	包含層	打斧	(9.0)	5.6	1.1	84.9	安山岩か	刃部欠

第2表 石器観察表(4)

図版番号	写真図版	台帳番号	地点名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
	PL14-11	211	V-17	包含層	打斧	(7.0)	6.1	1.6	100.1	安山岩	両端欠
	PL14-12	212	V-17	包含層	打斧	(6.9)	6.0	2.1	150.8	安山岩か	両端欠
	PL14-13	213	V-17	—	打斧	(7.9)	5.8	1.6	120.9	安山岩か	SB?東南、基部欠
	PL14-14	214	V-17	包含層	打斧	(8.9)	4.4	2.1	86.3	千枚岩	刃部欠
	PL14-15	215	V-17	包含層	打斧	(9.0)	6.0	1.2	92.4	安山岩か	刃部欠
	PL14-16	216	V-17	—	打斧	(10.0)	5.5	1.5	108.6	凝灰岩質粘板岩	SB?西南、基部欠
	PL14-17	217	V-17	包含層	打斧	(8.5)	5.1	1.6	107.7	安山岩	刃部欠
	PL14-18	218	V-17	包含層	打斧	(9.8)	5.3	1.0	87.8	安山岩か	基部欠
	PL14-19	219	V-17	—	打斧	(10.3)	6.0	1.2	103.4	安山岩か	刃部欠
	PL14-20	220	V-17	—	打斧	10.9	5.6	0.9	73.6	安山岩か	SB?北西
	PL14-21	221	V-17	—	打斧	(9.5)	5.3	2.0	123.8	安山岩	刃部?欠
	PL14-22	222	V-17	包含層	打斧	(9.5)	6.4	1.9	135.5	安山岩	刃部欠
	PL14-23	223	V-17	包含層	打斧	(11.0)	4.5	1.1	69.6	安山岩か	基部欠
	PL14-24	224	V-17	包含層	打斧	(10.3)	5.3	1.6	114.5	安山岩	刃部欠
	PL14-25	225	V-17	包含層	打斧	(10.0)	6.0	0.8	54.6	安山岩か	両端欠
	PL15-1	226	V-17	包含層	打斧	(9.2)	6.8	1.0	92.8	安山岩か	基部欠
	PL15-2	227	V-17	—	打斧	(8.5)	6.8	1.2	84.2	安山岩	基部欠
	PL15-3	228	V-17	—	打斧	(10.1)	6.1	1.5	89.2	安山岩か	刃部欠
	PL15-4	229	V-17	検出面	打斧	(10.8)	5.5	1.6	132.7	安山岩か	刃部欠
	PL15-5	230	V-17	包含層	打斧	(9.5)	6.1	2.1	146.7	安山岩か	刃部欠
	PL15-6	231	V-17	包含層	打斧	(11.0)	5.7	1.5	90.5	安山岩	基部欠
	PL15-7	232	V-17	包含層	打斧	(8.8)	8.4	1.3	108.3	安山岩	基部欠
	PL15-8	233	V-17	検出面	打斧	10.4	5.4	1.5	101.5	粘板岩	
	PL15-9	234	V-17	包含層	打斧	(9.1)	5.1	1.5	110.0	安山岩か	刃部欠
	PL15-10	235	V-17	—	打斧	(9.9)	6.0	1.2	91.1	安山岩か	SB?東南、基部欠
	PL15-11	236	V-17	包含層	打斧	(9.2)	6.3	1.7	116.7	粘板岩	基部欠
	PL15-12	237	V-17	包含層	打斧	7.1	5.2	1.0	47.2	千枚岩質粘板岩	
	PL15-13	238	V-17	包含層	打斧	(7.5)	5.6	1.7	78.1	千枚岩質粘板岩	両端欠
	PL15-14	239	V-17	包含層	打斧	(7.0)	4.5	3.0	100.7	千枚岩質粘板岩	基部?欠
	PL15-15	240	V-17	包含層	打斧	(11.8)	5.1	2.0	150.1	千枚岩	刃部欠
	PL15-16	241	V-17	検出面	打斧	(9.7)	8.1	1.5	150.9	安山岩か	基部欠
	PL15-17	242	V-17	包含層	打斧	(10.6)	7.3	2.3	191.7	粘板岩	基部?欠
	PL15-18	243	V-17	包含層	打斧	(9.0)	5.1	2.0	126.7	安山岩か	両端欠
	PL15-19	244	V-17	包含層	打斧	(8.9)	6.8	1.1	96.4	安山岩か	刃部欠
	PL15-20	245	V-17	包含層	打斧	(12.3)	6.2	1.4	121.4	安山岩か	刃部欠
	PL15-21	246	V-17	包含層	打斧	(9.5)	5.6	1.8	132.2	安山岩か	刃部欠
	PL15-22	247	V-17	包含層	打斧	(10.8)	6.1	1.3	124.9	安山岩	両端欠
	PL15-23	248	V-17	包含層	打斧	(10.2)	7.1	1.2	134.4	安山岩	基部欠
	PL15-24	249	V-17	包含層	打斧	(10.9)	7.1	2.1	226.6	安山岩	両端欠
	PL15-25	250	V-18	包含層	打斧	(11.7)	7.5	1.5	161.5	安山岩	基部欠
	PL16-1	251	V-18	包含層	打斧	8.4	4.3	1.8	81.0	粘板岩	
	PL16-2	252	V-18	包含層	打斧	(8.6)	5.1	1.5	71.8	粘板岩	刃部欠
	PL16-3	253	V-18	包含層	打斧	(8.5)	5.3	1.6	113.5	安山岩か	刃部欠
	PL16-4	254	V-18	包含層	打斧	(10.3)	5.9	1.6	114.4	安山岩	刃部欠
	PL16-5	255	V-18	包含層	打斧	(9.8)	5.7	1.1	87.9	安山岩	刃部欠
	PL16-6	256	V-18	包含層	打斧	(6.6)	6.0	1.1	66.6	安山岩か	刃部欠
	PL16-7	257	V-18	包含層	打斧	(8.3)	4.9	1.5	94.2	安山岩	両端欠
	PL16-8	258	V-18	包含層	打斧	(8.8)	5.1	1.2	78.8	安山岩	基部欠
	PL16-9	259	V-18	包含層	打斧	(9.6)	4.8	1.3	87.4	安山岩	刃部欠
	PL16-10	260	V-18	包含層	打斧	(9.8)	5.6	0.8	60.3	—	基部欠
	PL16-11	261	V-18	包含層	打斧	(8.8)	4.7	2.0	118.2	安山岩	刃部欠
	PL16-12	262	V-18	包含層	打斧	(11.1)	5.6	1.6	103.8	安山岩か	両端欠
	PL16-13	263	V-18	包含層	打斧	(9.0)	5.7	1.4	89.9	安山岩か	刃部欠
	PL16-14	264	V-18	包含層	打斧	(8.1)	5.0	1.2	85.7	安山岩か	刃部欠
	PL16-15	265	V-18	包含層	打斧	(8.2)	4.7	1.6	96.3	安山岩	刃部欠
	PL16-16	266	V-18	包含層	打斧	(10.4)	5.3	1.7	124.6	安山岩か	両端欠
	PL16-17	267	V-18	包含層	打斧	(9.4)	4.9	1.9	135.7	安山岩	基部欠

第２表　石器観察表（５）

図版番号	写真図版	台帳番号	地点名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
	PL16-18	268	V-18トレンチ	包含層	打斧	(14.0)	5.6	1.6	182.5	安山岩か	刃部欠
	PL16-19	269	V-18	包含層	打斧	(9.6)	5.3	1.9	134.7	安山岩	基部欠
	PL16-20	270	V-18	包含層	打斧	(10.9)	5.5	0.9	69.5	安山岩	刃部欠
	PL16-21	271	V-18	包含層	打斧	(8.9)	5.5	1.6	106.4	安山岩	両端欠
	PL16-22	272	V-18	包含層	打斧	(12.1)	5.9	2.2	216.0	安山岩か	刃部欠
	PL16-23	273	V-18	包含層	打斧	(9.2)	4.9	1.4	96.5	—	両端欠
	PL16-24	274	V-18	包含層	打斧	(9.8)	5.7	1.0	81.3	安山岩か	刃部欠
	PL16-25	275	V-18	包含層	打斧	(9.1)	5.8	1.0	79.6	安山岩	刃部欠
	PL17-1	276	V-18	—	打斧	(8.3)	5.6	1.0	66.8	安山岩か	刃部欠
	PL17-2	277	V-18トレンチ	—	打斧	(8.7)	5.5	1.2	102.1	—	基部欠か
	PL17-3	278	V-18	包含層	打斧	(9.7)	7.1	2.4	145.9	安山岩か	刃部欠
	PL17-4	279	V-18	包含層	打斧	(11.8)	5.9	1.7	153.0	安山岩	刃部欠
	PL17-5	280	V-18	—	打斧	(10.5)	7.4	0.9	91.8	安山岩	基部欠
	PL17-6	281	V-18	包含層	打斧	(9.6)	6.2	1.7	124.1	安山岩	刃部欠
	PL17-7	282	V-18	包含層	打斧	(10.0)	5.7	1.3	120.8	安山岩	刃部欠
	PL17-8	283	V-18	包含層	打斧	(10.0)	7.1	1.2	115.8	安山岩か	刃部欠
	PL17-9	284	V-18	包含層	打斧	(9.8)	5.3	1.8	121.8	安山岩	基部欠
	PL17-10	285	V-18	包含層	打斧	(12.7)	6.6	1.4	155.9	安山岩か	刃部欠
	PL17-11	286	V-18	包含層	打斧	(11.4)	6.4	1.2	128.8	安山岩	刃部欠
	PL17-12	287	V-18	包含層	打斧	(12.2)	7.2	1.5	167.7	安山岩か	両端欠
	PL17-13	288	V-18	包含層	打斧	(10.4)	5.6	1.8	146.3	安山岩	基部欠
	PL17-14	289	V-18	包含層	打斧	(8.6)	4.6	1.9	94.1	粘板岩	基部欠
	PL17-15	290	V-18	包含層	打斧	(11.4)	5.3	1.8	160.0	安山岩	基部欠
	PL17-16	291	V-18	包含層	打斧？	(9.1)	4.8	2.7	123.5	チャートか	
	PL17-17	292	V-18トレンチ	—	打斧	(9.5)	5.8	1.2	104.1	安山岩か	刃部欠
	PL17-18	293	V-18	包含層	打斧	(9.7)	5.5	1.8	124.1	安山岩か	刃部欠
	PL17-19	294	V-18トレンチ	—	打斧	(10.1)	6.0	1.9	159.5	安山岩か	基部欠
	PL17-20	295	V-18	包含層	打斧	(11.5)	5.8	1.4	147.1	安山岩か	両端欠
	PL17-21	296	V-18	包含層	打斧	(9.6)	6.2	1.8	170.0	安山岩	基部欠
	PL17-22	297	V-18	包含層	打斧	(9.6)	5.7	1.3	101.1	安山岩か	刃部欠
	PL17-23	298	V-18	包含層	打斧	(8.9)	5.1	1.9	122.4	安山岩か	刃部欠
	PL17-24	299	V-18	包含層	打斧	(10.7)	5.9	2.2	135.3	千枚岩か	刃部欠
	PL17-25	300	V-18	包含層	打斧	(12.4)	6.0	1.3	134.2	安山岩か	基部欠
	PL18-1	301	V-16	検出面	打斧	(10.2)	5.1	1.3	87.8	安山岩	基部欠
	PL18-2	302	V-14石組付近	—	打斧	(7.9)	5.7	1.2	68.6	凝灰岩質粘板岩	刃部欠
	PL18-3	303	V-16	検出面	打斧	11.8	6.4	1.7	154.7	安山岩	
	PL18-4	304	V-15	包含層	打斧	(6.8)	5.2	2.0	99.1	安山岩か	基部欠
	PL18-5	305	V-15	包含層	打斧	(8.4)	5.7	2.2	128.3	安山岩	両端欠
	PL18-6	306	V-15	包含層	打斧	(10.2)	6.3	1.1	79.7	安山岩か	基部欠
	PL18-7	307	V-11	検出面	打斧	(7.1)	3.7	1.1	29.5	粘板岩	刃部欠
	PL18-8	308	V-11	検出面	打斧	(7.9)	4.1	1.7	93.7	千枚岩質粘板岩	刃部欠
	PL18-9	309	V-11	検出面	打斧	(9.3)	5.7	1.4	123.8	安山岩	刃部欠
	PL18-10	310	V-10	検出面	打斧	(9.0)	5.8	1.2	117.2	安山岩か	刃部欠
	PL18-11	311	V-12	包含層	打斧	(9.0)	5.4	1.6	121.9	安山岩か	基部欠
	PL18-12	312	V-12	包含層	打斧	(9.7)	5.9	1.4	89.7	安山岩	基部欠
	PL18-13	313	V-12	包含層	打斧	(8.9)	6.0	1.3	85.3	安山岩か	両端欠
	PL18-14	314	V-12	検出面	打斧	(8.8)	5.6	1.2	87.9	安山岩か	両端欠
	PL18-15	315	V-12	—	打斧	(9.8)	6.0	1.7	118.8	千枚岩質粘板岩	刃部欠
	PL18-16	316	V-12	包含層	打斧	11.5	6.0	1.5	97.0	粘板岩	刃部一部欠
	PL18-17	317	V-12	検出面	打斧	(9.8)	5.9	1.0	79.1	安山岩	基部欠
	PL18-18	318	V-12	包含層	打斧	(8.2)	5.3	1.7	81.1	安山岩か	刃部欠
	PL18-19	319	V-12	包含層	打斧	(9.0)	4.8	1.3	89.7	—	刃部欠
	PL18-20	320	V-12	包含層	打斧？	(7.7)	4.1	1.1	42.1	千枚岩質粘板岩	
	PL18-21	321	V-12	包含層	打斧	(8.2)	4.4	0.8	42.8	千枚岩質粘板岩	刃部欠
	PL18-22	322	V-12	—	打斧	(9.4)	5.0	1.5	103.6	安山岩	両端欠
	PL18-23	323	V-12	包含層	打斧	(10.3)	5.5	1.6	131.6	安山岩か	基部欠
	PL18-24	324	V-12	包含層	打斧	(10.8)	5.4	1.7	109.6	安山岩	刃部欠
	PL18-25	325	V-12	包含層	打斧	(10.0)	7.0	2.6	213.0	千枚岩か	刃部欠

第2表　石器観察表(6)

図版番号	写真図版	台帳番号	地点名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
	PL9-18	351	SB06		石鏃	(2.3)	(1.4)	0.3	0.7	黒曜石	
	PL9-19	352	V17	包含層	石鏃	(2.8)	(1.7)	0.3	1.0	黒曜石	
	PL9-20	353	V13	包含層	石鏃	(2.0)	(1.4)	0.4	0.7	黒曜石	
	PL9-21	354	V17	包含層	石鏃	(2.4)	(1.1)	0.5	0.9	黒曜石	
	PL9-22	355	SB06		石鏃	(2.1)	(1.8)	0.4	1.2	黒曜石	
	PL9-28	356	V13	検出面	石錐か	1.8	0.7	0.4	0.4	黒曜石	
	PL9-29	357	V17	包含層	石錐	2.2	0.8	0.4	0.8	黒曜石	
	PL9-36	358	V17	SB?	RF	2.1	1.7	0.5	1.8	黒曜石	
	PL9-44	359		検出面	RF	2.1	2.2	0.4	1.6	黒曜石	
	PL9-37	360	V17	包含層	石鏃未製品か	2.4	1.9	0.7	2.2	黒曜石	
	PL9-43	361	V17	包含層	RF	2.9	1.8	0.8	3.8	黒曜石	
		362	V13	検出面	石鏃	(1.1)	(1.5)	0.2	0.3	黒曜石	
		363	V13	検出面	石鏃	(2.0)	(1.4)	0.3	0.7	黒曜石	
		364	V14	石組付近	石鏃	(1.4)	(1.9)	0.3	0.9	黒曜石	
		365	V14	石組付近	石鏃	(1.9)	(1.8)	0.3	0.6	黒曜石	
		366	V16	検出面	石鏃	(2.3)	(1.3)	0.4	1.0	黒曜石	
		367	V17	SB?	石鏃	(2.1)	(1.3)	0.3	0.5	黒曜石	
		368	V17	SB?	石鏃	(1.9)	2.1	0.3	1.5	黒曜石	
		369	V17	SB?	石鏃	(1.0)	(1.3)	0.2	0.3	チャート	
		370	V17	包含層	石鏃	(2.2)	(1.1)	0.2	0.6	黒曜石	
		371	V17	包含層	石鏃か	(1.1)	(1.4)	0.3	0.4	黒曜石	
		372	V17	包含層	石鏃	(1.6)	(1.2)	0.4	0.6	黒曜石	
		373	V17	包含層	石鏃	(1.8)	(1.6)	0.3	0.7	黒曜石	
		374	V17	包含層	石鏃	(1.8)	(1.3)	0.3	0.5	黒曜石	
		375	V17	包含層	石鏃	(1.7)	(1.7)	0.3	0.4	黒曜石	
		376	V17	包含層	石鏃	(1.1)	1.5	0.3	0.4	黒曜石	
		377	V17	包含層	石鏃	(1.7)	(1.7)	0.3	0.7	黒曜石	
		378	V17	包含層	石鏃	(1.8)	(1.0)	0.2	0.3	黒曜石	
		379	V17	包含層	石鏃	(1.2)	1.7	0.3	0.5	黒曜石	
		380	V17	包含層	石鏃	(1.3)	1.6	0.3	0.5	黒曜石	
		381	V17	包含層	石鏃	(1.6)	(0.7)	0.3	0.3	黒曜石	
		382	V17	包含層	石鏃	(2.1)	(1.2)	0.3	0.6	黒曜石	
		383	V18	包含層	石鏃	(1.9)	(1.1)	0.3	0.4	黒曜石	
		384	V18	包含層	石鏃か	(2.3)	(1.3)	0.4	0.9	黒曜石	
		385	V18	包含層	石鏃	(1.4)	1.4	0.2	0.3	黒曜石	
		386	V18	包含層	石鏃	(1.2)	(1.4)	0.4	0.5	黒曜石	
		387	V18	包含層	石鏃	(1.1)	1.7	0.2	0.5	黒曜石	
		388	V18	包含層	石鏃か	(1.7)	(1.2)	0.3	0.4	黒曜石	
		389		検出面	石鏃	(1.5)	1.5	0.3	0.5	黒曜石	
		390		検出面	石鏃	(1.6)	(1.1)	0.4	0.5	黒曜石	
		391		検出面	石鏃	(1.3)	1.5	0.3	0.5	黒曜石	
		392		検出面	石鏃	(1.6)	(1.1)	0.2	0.3	黒曜石	
		393		検出面	石鏃	(1.4)	1.6	0.2	0.5	黒曜石	
		394		表採	石鏃	(1.4)	1.6	0.2	0.7	黒曜石	
		395		表採	石鏃	(2.8)	(1.7)	0.3	0.9	黒曜石	
		396		表採	石鏃	(1.7)	(0.9)	0.3	0.3	黒曜石	
		397	SB06		石鏃未製品	(1.7)	(1.4)	0.6	1.1	黒曜石	
		398	SK026		石鏃	(1.1)	(1.0)	0.2	0.1	黒曜石	
		399	V18	包含層	石鏃か	(2.5)	(1.2)	0.3	0.9	黒曜石	
		400	V13	包含層	RF	2.1	1.2	0.4	0.6	黒曜石	石匙か
		401	V13	検出面	RF	1.6	1.6	0.5	1.1	黒曜石	
		402	V17	SB?	RF	2.2	1.9	0.4	0.9	黒曜石	
		403	V17	SB?	RF	1.7	1.5	0.3	1.0	黒曜石	
		404	V17	包含層	RF	1.7	1.3	0.4	0.9	黒曜石	
		405	V18	包含層	RF	1.3	1.2	0.3	0.5	黒曜石	
		406	V18		RF	1.5	1.4	0.2	0.5	黒曜石	石匙か
		407		検出面	RF	2.3	1.5	0.5	1.5	黒曜石	
		408		検出面	RF	1.9	1.2	0.6	0.9	黒曜石	
		409		検出面	RF	1.7	1.2	0.3	0.7	黒曜石	
		410	V13	検出面	UF	2.6	1.3	0.3	0.9	黒曜石	
		411	V17	SB?	UF	3.0	2.3	0.8	4.6	黒曜石	
		412	V17	SB?	UF	2.2	1.4	0.3	1.0	黒曜石	
		413	V17	SB?	UF	2.1	1.7	0.4	1.0	黒曜石	
		414	V17	SB?	UF	3.6	1.9	1.0	4.6	黒曜石	
		415	V18	包含層	UF	2.1	2.0	0.6	1.6	黒曜石	
		416	V17	包含層	石核	3.9	2.1	0.9	7.7	黒曜石	
		417	V18	包含層	石核	2.6	2.3	1.7	12.2	黒曜石	
		418	V18	包含層	石核	3.4	1.7	1.3	6.9	黒曜石	
		419		検出面	石核	2.9	2.0	1.1	5.5	黒曜石	
		420	V17	SB?	剥片	4.2	0.9	0.6	2.4	粘板岩	先行トレンチ
		421	U17		礫石	14.9	6.2	4.9	570.3	凝灰岩	U17-pit1。場所特定できず。

註1）器種のRFは本文中の「連続した調整剥離を有する剥片」、UFは「微細な連続剥離を有する剥片」。

2）層位の「検出面」とは建設重機で表土除去直後の遺構検出のための精査段階取上遺物のことで、大半が遺物包含層のものだが、部分的に表土のものを含む。

第3表　銭貨一覧

図版番号	写真図版	名称	層位	出土位置	王朝名	初鋳年	書体	備考	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
第80図1	PL19-1	景徳元寶	検出面		北宋	1004	真書		2.22	2.24	0.12	1.6
第80図2	PL19-2	祥口通寶	検出面		北宋	1009	真書	祥符通寶	2.5	2.455	0.16	2.1
第80図3	PL19-3	天禧通寶	検出面		北宋	1017	真書		2.54	2.54	0.12	2.6
第80図4	PL19-4	天聖元寶	検出面		北宋	1023	篆書	摩滅著しい	2.48	2.44	0.115	2.4
		皇宋通寶	包含層	V17	北宋	1038	篆書	破損著しい	2.44	2.45	0.11	1.8
第80図5	PL19-5	熙寧元寶		S24	北宋	1068	真書		2.42	2.39	0.1	1.9
第80図6	PL19-6	熙寧元寶	検出面		北宋	1068	篆書		2.44	2.44	0.145	2.7
第80図7	PL19-7	熙寧元寶	検出面		北宋	1068	真書		2.375	2.39	0.125	2.6
第80図8	PL19-8	元豊通寶		S24	北宋	1078	行書		2.405	2.405	0.14	2.8
第80図9	PL19-9	元祐通寶	検出面		北宋	1086	篆書		2.42	2.46	0.13	2.1
第80図10	PL19-10	紹聖元寶		S24	北宋	1094	行書		2.49	2.47	0.12	2.2
第80図11	PL19-11	政和通寶	検出面		北宋	1111	分楷		2.5	2.48	0.135	2.2
第80図12	PL19-12	洪武通寶	検出面		明	1368			2.37	2.38	0.15	2.1
第80図13	PL19-13	洪武通寶	検出面		明	1368			2.37	2.38	0.145	2.5
第80図14	PL19-14	寛永通寶	検出面		江戸	1688		新寛永	2.405	2.47	0.17	2.6
		不明	検出面	V13					2.42	2.22	0.14	1.7
		不明	覆土	V15SK1				遺構位置不明	2.46	2.445	0.13	1.9

註）初鋳年・書体などは永井久美男編1996『日本出土銭総覧1996年版』兵庫埋蔵銭調査会による

第4表　土坑一覧(1)

土坑番号	グリッド	グリッド別土坑番号	出土遺物・備考	図版番号
SK001	R20	SK20	縄文土器1、土師器1	
SK002	R25	SK4	石1	
SK003	R25	SK25	土師器1	
SK004	W5	SK28	土師器1、須恵器1	遺構第31図
SK005	R25	SK14	土師器1、須恵器1	
SK006	S11	SK1	土師器甕3、黒色土器坏1、黒曜石2	
SK007	S16	SK3	土師器甕1	
SK008	S16	SK6	土師器甕1	
SK009	S18	SK3	土師質皿(灯明皿)1	
SK010	S19	SK3	龍泉窯系青磁碗1	
SK011	S21	SK1	土師器3	
SK012	S21	SK6	縄文土器1、土師器1、土師質内耳鍋1	
SK013	S21	SK1・no.1	土師器5、須恵器1	遺構第31図
SK014	S21	SK11	土師器1	
SK015	S21	SK16	土師器1	
SK016	S22	SK5	土師器2、黒色土器1	
SK017	S22	SK9	黒色土器2、土師器1、須恵器1	
SK018	S22	SK21	土師器1、黒色土器1、黒曜石剥片3	
SK019	S23	SK7	チャート石塊1	
SK020	S24	SK3	風字硯1	
SK021	S24	SK14	土師器1	
SK022	T21	SK5	黒色土器1	
SK023	U15	P1	縄文土器13	
SK024	U19	SK1	縄文土器68、土師質内耳鍋1、打製石斧片1	遺構第32図
SK025	U20	P1	縄文土器6	
SK026	U20	P2	縄文土器～土師器109、黒曜石RF1、硬質頁岩石鏃1	遺物第64図1
SK027	U20	pit4	縄文土器2	
SK028	U20	P5	縄文土器10、磨製石斧1	遺物第77図2　遺構第31図
SK029	U20	pit6	縄文土器4	
SK030	U20	pit7	縄文土器2	
SK031	U20	pit8	縄文土器2	
SK032	U20	pit9	縄文土器2	
SK033	U20	pit10	縄文土器7、土師器1	
SK034	U20	pit11	縄文土器2	
SK035	U20	pit12	縄文土器6	
SK036	U20	pit13	縄文土器6	
SK037	U20	P14	縄文土器1	
SK038	U20	pit15	縄文土器8	
SK039	U20	P16	縄文土器14	

第4表　土坑一覧(2)

土坑番号	グリッド	グリッド別土坑番号	出土遺物・備考	図版番号
SK040	U20	P17	縄文土器5	
SK041	U20	P18	縄文土器4	
SK042	V11	P1	縄文土器1	
SK043	V11	P2	縄文土器10	
SK044	V11	P3	縄文土器3	
SK045	V16	P1	縄文土器9	
SK046	V16	P2	縄文土器4、須恵器2	
SK047	V16	P3	縄文土器3、須恵器1	
SK048	V16	P4	縄文土器1	
SK049	W2	SK1	土師器2、須恵器1、炉壁3、炭	遺構第31図
SK050	W2	SK6	縄文土器1、剥片1	
SK051	W2	SK7	土師質内耳鍋1、縄文土器2	
SK052	W2	SK13	須恵器1	
SK053	W2	SK23	土師器2	
SK054	W3	SK2	縄文土器1	
SK055	W3	SK8	土師器12、須恵器3、土師質内耳鍋1、施釉陶器1、チャート剥片1、打製石斧片1	遺構第32図
SK056	W3	SK9	須恵器2	
SK057	W3	SK14	須恵質擂鉢1	遺物第33図1　遺構第32図
SK058	W4	no.1・SK125	土師器1	
SK059	W4	no.2・SK	黒色土器1、SK番号なし。	
SK060	W4	no.3・SK42	土師器2	
SK061	W4	no.4・SK46	土師質内耳鍋1	
SK062	W4	SK12	土師質内耳鍋1、須恵器1	遺物第33図2　遺構第32図
SK063	W4	SK13	土師質内耳鍋1	遺物第33図3　遺構第32図
SK064	W4	SK106	土師器1	
SK065	W4	SK113	縄文土器？1	
SK066	W4	SK120	土師器1	
SK067	W5	no.2・SK30	須恵器蓋1	遺物第23図1　遺構第31図
SK068	W5	no.1・SK52	土師器1、ST06の柱穴。	
SK069	W5	SK49	土師器1	
SK070	W5	SK74	土師器13、土師質内耳鍋3、剥片1	
SK071	W5	SK78	土師器1	
SK072	W5	SK86	土師器1	
SK073	W5	SK95	縄文土器9、土師器1	
SK074	W6	P1	土師器多数、土師器甕1、土師器坏1、	遺物第18図　遺構第31図
SK075	W7	SK1	縄文土器21、SB11炉。	
SK076	W7	SK4	須恵器1、黒色土器1、土師質内耳鍋1	
SK077	W7	SK7	黒曜石石鏃1、同剥片1	遺物第64図2　遺構第31図
SK078	W7	SK8	縄文土器1	
SK079	W8	SK7	須恵器1	

第4表　土坑一覧(3)

土坑番号	グリッド	グリッド別土坑番号	出土遺物・備考	図版番号
SK080	W8	SK24	黒曜石剥片1	
SK081	W8	SK28	土師器1	
SK082	W9	no.2・SK58	土師器1	
SK083	W9	SK30	縄文土器1、土師器1	
SK084	W9	SK42	古瀬戸卸皿1	遺物第33図4　遺構第32図
SK085	W9	SK47	須恵器1	
SK086	W10	SK12	土師器1、柱痕あり。	
SK087	W10	SK15	縄文土器1、柱痕あり。	
SK088	X1	no.1・SK13	土師器2	
SK089	X1	SK6	土師器1	
SK090	X1	SK9	土師器3	
SK091	X1	SK15	黒色土器1	
SK092	X1	SK34	土師器1	
SK093	X1	SK43	黒色土器1、土師器3	
SK094	X2	no.1・SK3	打製石斧1	遺物第66図1　遺構第31図
SK095	X2	no.2・SK12	土師質内耳鍋1	
SK096	X2	SK8	土師器1	
SK097	X2	SK17	黒色土器1	
SK098	X2	SK18	土師器1	
SK099	X3	SK3	古瀬戸椀1	遺物第33図5　遺構第32図
SK100	X3	SK10	土師器1	
SK101	X6	SK3	軟質須恵器1	
SK102	X7	SK1	無釉陶器1	
SK103	X7	SK2	土師器1	
SK104	W6	SK01	W6-P1とは別の遺構。	遺構第32図
SK105	W4	SK10？		遺構第32図
SK106	W4	SK11		遺構第32図

註）出土遺物の数字はいずれも破片数である。

第8章　考察－鱗状短沈線文土器の型式学的分析－

第1節　はじめに

本遺跡の遺物の大半を占める中期後葉土器群の様相については前節で概観したとおり、遺構に伴うといった層位的に一括性が高く、時期的に限定できる資料は少ないが、遺物包含層を中心にかなりの量がまとまって出土している。よって本報告では型式学的特徴などから大別し分類した。その中で中期後葉Ⅱ期Ⅰ群土器とした「鱗状短沈線文を地文とする土器」（以下鱗状短沈線文土器）は遺構外の出土という中でも、かなり接合し、器形がわかる程度に復元ができ、当該期の佐久地方の資料としては極めて良好な資料と言える。

この土器はもともとは唐草文系土器のなかに含まれることが多かったが、近年「佐久系土器」「郷土式土器」などという呼称も見られ注目されている。よって、駒込遺跡の資料を中心に以下研究史を概観し、型式学的な検討を加えながら、土器編年上の位置などを考えてみたい。

第2節　研究略史

佐久地方をはじめ東信地方の中期後葉の土器に触れた文献としては、『南佐久郡の考古学的調査』(1928)、『北佐久郡の考古学的調査』(1934)、『信濃史料』(1956) などに類例が散見される。

ただ、1980年代までは、中期後葉の良好な資料は東信地方では限定されたものであり、土器編年上の位置付けも八ヶ岳山麓のいわゆる曽利編年に負うことが多い。ただ、戸倉町幅田遺跡の発掘調査などで千曲川流域には加曽利E式の影響が強いことが認識されてはいた（金子・米山・森嶋1965）。

さらに、佐久地方の特色については、望月町下吹上遺跡（福島・森嶋1978）や佐久市中村遺跡（林・島田1983）といった発掘調査が進められる中で前者では「加曽利E式よりは曽利式が強い。」とか、後者では「曽利式や加曽利E式の影響を受けた唐草文」系土器があるという認識がなされていた。

いわゆる「唐草文系土器」の研究史の中で、信州全体に分布するとされながらも、その中心は松本平と伊那谷であると認識されてきたわけで（神村1999）、『中部高地土器集成』(1979) や『縄文時代中期後半の諸問題』（神奈川考古同人会1980）などを見ても、千曲川流域は断片的な資料しかなく、なかなか具体的に中部高地や信州のさらにその中の地域色の特徴を抽出するまでには至らなかった。

ただ、「加曽利E系、曽利系、唐草文系」を対比編年した『中部高地土器集成』では、「千曲川水系には唐草文系土器は全般に少ないように見えるが、埼玉県の山地部に唐草文甕形土器の類品があるというので、千曲川中流から上流のうちに唐草文系の進出地帯があると予測」しているⅱ。

野村一寿も「東信地方では地理的に八ヶ岳西南麓、諏訪湖盆地域の唐草文系土器の影響が強く、（加曽利E式の影響はあるものの）北信地方とはやや趣を異にしている。」「典型的な樽形になる唐草文系土器はみられず、器形はキャリパー形か、口縁部がゆるやかに広がる円筒形がほとんどで、浅鉢が伴なう。」（カッコ内筆者が補った）と指摘する（野村1988）。

綿田弘実はさらに北信濃の土器群の特色と変遷を具体的に描きだし、千曲川流域として一様なものとして認識されやすいが、はっきりとした地域差をもつ北信濃特有の土器群があることを指摘した（綿田1988）。

さらに綿出は、具体的な類例をしめし、千曲川流域の北信と東信の当該期の様相をまとめた（綿出1989）。同様に中期後葉の（とくにその後半に）東信地方特有の土器の様相が見られるといった認識があったことは先述したとおりだが、望月町平石遺跡中期後半Ⅲ期（福島は中期後半をⅠ～Ⅳ期に区分している－筆者註）の説明中に福島邦男は「唐草文系と縄文系が折衷した土器が多い」と具体的に指摘した（福島1989）。

こうした中、百瀬忠幸は佐久市吹付遺跡出土の当該期の土器群を整理する中で、吹付遺跡のみならず望月町下吹上遺跡などの資料も含めて、「鱗状短沈線文を地文とする佐久地方に主体的分布を見せる土器」を「佐久系土器」と仮称した（百瀬1991）。この百瀬の提唱によって、これらの土器群が、基本的な型式学的な分析によって地域色を抽出し、編年的に位置付けされていく試みの基礎となった。その後御代田町滝沢遺跡（小山・綿田1997）、同町宮平遺跡（堤・本橋2000）などでも良好な資料が見られ、「佐久系土器」と呼称され、唐草文系土器とは区別されている。

ただし、「佐久系土器」という呼称については、「佐久系」というものがどういった範囲を指すのか適当ではないという小林真寿の指摘がある。桜井秀雄はさらに将来的には「郷土式土器」として設定できる可能性を述べている（桜井2000）。本報告書では、すでに第5章でも触れたように、駒込遺跡中期後葉Ⅰ群土器（鱗状短沈線文土器）と呼称した。

第3節　鱗状短沈線文土器の編年上の位置

1　駒込遺跡出土鱗状短沈線文土器の特徴と類別

駒込遺跡における鱗状短沈線文土器は第5章では中期後葉Ⅱ期Ⅰ群土器としたもので、以下のような特徴をもつ。

（1）　幅広に口縁部文様帯が肥厚し、胴部はバケツ形あるいは緩やかなキャリパー形を呈す深鉢形土器が主体である。

（2）　幅広に肥厚した口縁部文様帯には、渦巻文を取り込んだ横長の勾玉形の区画文が施され、鱗状短沈線文（湾曲した平行短沈線文）が充填される。

（3）　頸部に無文部はなく、口縁部直下に胴部文様帯が見られる。胴部は沈線文あるいは隆帯文で区画が施され、さらに蛇行沈線文などでこれらの区画文が分割され、鱗状短沈線文が充填される。

（4）　地文や胴部の区画の沈線文はヘラではなく、半截竹管状工具によるものが主体である。

（5）　胎土は同時期の加曽利E式などに比べるとやや軟質で乳白色から黄褐色がかった色を呈するものが多い。

（6）　また同様な胎土をしている鉢形土器、浅鉢形土器も本類に一応含めた。

これらの特徴を勘案して、さらにA類からG類に大別した（第81図）。

A類：口縁部文様帯は幅広で肥厚しており、胴部はU字ないし逆U字形の区画沈線文が縦位に配置され、鱗状短沈線文が充填される深鉢形土器。

B類：肥厚した口縁部文様帯はA類に似るが、胴部は鋸歯状の斜行沈線文が充填される深鉢形土器。

C類：口縁部がやや内湾し、胴部は刻目を有した隆帯文で縦位に区画される深鉢形土器。

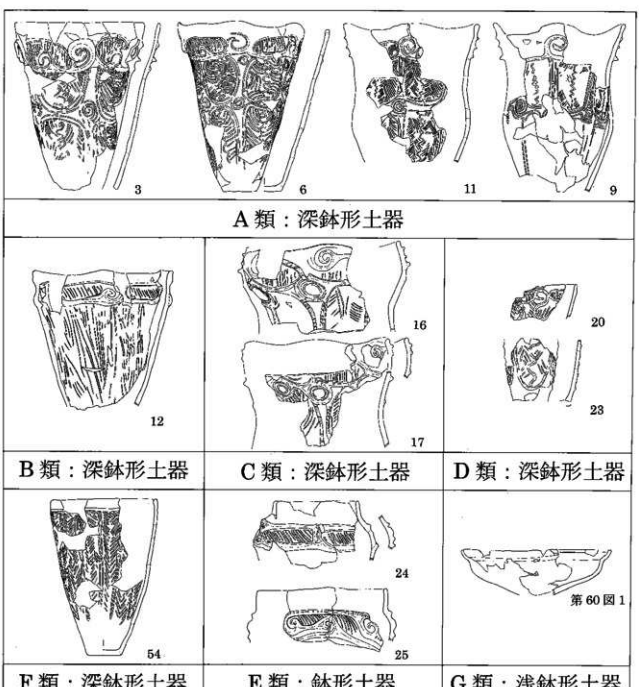
D類：口縁および胴部が隆帯で区画されるバケツ形の深鉢形土器

E類：鉢形土器

F類：口縁部文様帯をもたない深鉢形土器

G類：浅鉢形土器

型式学的な特徴や胎土の共通性からⅠ群土器を設定したが、すでに縷説しているように、層位的な裏づけが本遺跡には無いので、鱗状短沈線文地文土器が出土している周辺遺跡の事例と比較し、編年作業を行うことが必要になる。近年上信越自動車道建設に伴なう発掘調査が行われた小諸市郷土遺跡で鱗状短沈線文土器が竪穴住居跡や土坑などで、一括して出土しており、以下郷土遺跡の例を軸に分析をすすめたい。



第81図　駒込遺跡出土鱗状短沈線文土器の組成

2　郷土遺跡の中期後葉土器編年

すでに触れてきたように近年まで、佐久地方では良好な一括資料にはあまり恵まれてこなかったが、小諸市郷土遺跡は浅間山麓を代表する縄文時代中期の集落遺跡で中期中葉から後葉にかけての竪穴住居跡や土坑群が数多く検出されている。竪穴住居跡出土資料といえども、時間幅は様々であるが、層位的な検証材料には遠いないので、駒込遺跡出土資料を郷土遺跡の成果に照らし合わせ、順次周辺の遺跡と比較を行いたい。

『郷土遺跡発掘調査報告書』（桜井2000）（以下『郷土遺跡報告書』）では竪穴住居跡や土坑一括資料を基準に、中期全体をⅤ期10段階に出土土器を編年している（桜井2000）。

そのうちⅠ期の1段階と2段階は中期中葉なので、ここでは省略し、以下Ⅰ期3段階以降の資料を概観したい。また、基本的に加曽利E式の編年を桜井はいわゆる埼玉編年（谷井ほか1982）に準拠しているが、筆者は加曽利E式系土器の頸部文様帯の有無、胴部縦位磨消縄文手法の採用が鱗状短沈線文土器の編年上大きな指標になると考えているので、神奈川編年（神奈川考古同人会ほか1980）に準拠した名称を採用している。駒込遺跡および郷土遺跡資料を中心とした加曽利E式との対応関係は第5表を参照されたい。

なお以下図中の土器番号は『郷土遺跡報告書』の通し番号のままである。郷土遺跡竪穴住居跡出土の土器は、住居内覆土にはかなり時間差を持つ資料が含まれており、ここで紹介した年代はあくまでもその土器の型式学的な位置付けであって、必ずしも竪穴住居跡の年代ではない。詳細は同報告書を参照されたい。

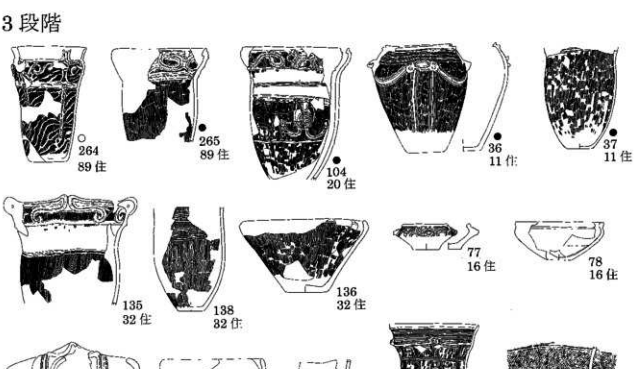
第5表　佐久地方縄文時代中期後葉編年

							郷土編年（桜井2000）			
曽利	唐草文（三上1996）		駒込遺跡		加曽利E式神奈川編年	佐久地方	期	段階	郷土遺跡住居跡	加曽利E式埼玉編年
曽利Ⅰ	唐草文Ⅰ				加曽利E1	三田原10住	Ⅰ	3	11住・16住・20住・25住・32住・89住	加曽利EⅠ古
曽利Ⅱ	唐草文Ⅱ				加曽利E2	三田原9・12住	Ⅱ	4	10住・108住	加曽利EⅠ新
		久保在家6号堆要・四日市53住・61住	Ⅰ期	SB11		宮平J1住・宮平第111・112図土器・中村J10住・平石5住		5	44住・60住・67住・77住・90住・91住	加曽利EⅡ古
曽利Ⅲ	唐草文Ⅲ		Ⅱ期古段階	D類	加曽利E3	平石35住？	Ⅲ	6	1住	加曽利EⅡ中
		八千原A8住・和下平C1住	Ⅱ期中段階	A・B・C・E類		平石36住・宮平D11坑・大庭J1住		7	24住床直・14住	加曽利EⅡ新
曽利Ⅳ						平石7住・9住・30住・41住・42住・宮平J4住・下吹上2住・吹付2住・岩下37住・中村J7・J9住	Ⅳ	8	6住・39住・106住・121住・942・943	加曽利EⅢ古
曽利Ⅴ	唐草文Ⅳ		Ⅱ期新段階	F類	加曽利E4	吹付4住		9	72住・118住	加曽利EⅢ新
						吹付9住・平石2住	Ⅴ	10	104住・123住	加曽利EⅣ

３段階（加曽利Ｅ１式）（第82図）

竪穴住居跡SB11、16、25、32、89出土の各資料で、撚糸文地文の加曽利Ｅ１式段階のキャリパー形深鉢を主体に、鉢形土器などが伴なっている。主体的ではないが、曽利Ⅰ式（SB25-123、125、126）や「三原田式」（SB25-122）もある。

３段階



第82図　郷土遺跡３段階

４・５段階（加曽利Ｅ2式）（第83図上・中段）

竪穴住居跡SB10・108、44・60出土の各資料で、胴部撚糸文地文の深鉢形土器が出土しているSB10、108を報告者は４段階と古く位置付け、胴部縄文地文の深鉢形土器が主体のSB44・60などを５段階と新手に位置付けている。この段階の加曽利Ｅ式系の土器は口縁部文様帯が窓枠状に区画する。口縁部文様帯の下端で屈曲し、胴部は上半と下半に沈線や隆帯で区画され、上半部は頸部文様帯となる（178・192・201・235など）。これに伴なってSB44の182のような曽利式系の土器も見られるが、加曽利Ｅ式系に匹敵するような量を占めてくるのが、沈線文を地文とする土器の一群がある。沈線文を地文とする土器には朝顔形にラッパ状に口縁部が開く（180、181、194、970、971）と窓枠状の隆帯区画文を持つ口縁部文様帯、基本的に無文の頸部文様帯、隆帯などで区画し沈線文で充填する胴部文様帯で当該期の加曽利Ｅ式系土器と同様な３帯構成になる土器（980、282、973、969、970、971、986、820）の２者がある。

器形に関していえば、朝顔形の深鉢は曽利式系、３帯構成のキャリパー形深鉢は加曽利Ｅ式系に似るが、施文手法から見ると、胴部に唐草文（大型渦巻文）が施され、交差した斜曲半行沈線文を充填するもの（973、969、970、971）や縦位沈線文を地文とし、横位平行沈線文が梯子状の意匠で胴部に施される（282、

4段階

33
10住

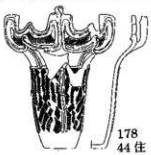
34
10住

35
10住

369
108住

370
108住

5段階


178
44住

179
44住

180
44住

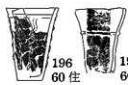
181
44住

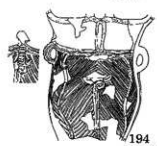
182
44住

192
60住

193
60住

195
60住


196
60住
197
60住
198
60住


194
60住

201
67住

235
77住

980
単独土器 5

282
91住

973
屋外埋甕 6

969
屋外埋甕 2

970
屋外埋甕 3

971
屋外埋甕 4

986
単独土器 11

820
1260坑

279
90住

276
90住

6段階

423
35坑

1016

968　屋外埋甕 1

1014

1019

424
36坑

縮尺　無印は 1/12　●印は 1/24

第83図　郷土遺跡 4 ～ 6 段階

820)、隆帯や沈線の縦位区画内を綾杉状沈線文が充填するもの（180、181、194、986）があり、これらは唐草文系土器の手法と共通する。

松本平や上伊那地方の唐草文系土器そのものかどうかはわからないが、SB60の194、SB90の276、279などの資料が出土している。おそらく5段階に伴なう唐草文系土器と考えられるが、良好な一括資料は郷土遺跡にはない。

6・7・8段階（加曽利E3式）（第83～85図）

『郷土遺跡報告書』においては、Ⅲ期は6・7段階、Ⅳ期は8・9段階にそれぞれ分かれて設定されているが、とくにⅢ期7段階とⅣ期8段階の区分に関する考え方が、筆者とは異なるので、詳細は原報告書にあたっていただきたい。

6段階（第83図下段・第84図上段）は、加曽利E式系土器の頸部文様帯が喪失し、胴部は縦位に平行沈線の区画文や蛇行沈線文が見られる資料がある（第83図423)。この土坑SK35出土の423の頸部文様帯はすでに胴部に取り込まれている。しかし、胴部は磨消縄文手法ではなく、後述する7段階の主体（第84図）の資料SB14やSB24とは時間差があると考えたい。当該期のこうした土器を含んだ良好な一括資料はないが、竪穴住居跡SB1の2（第84図）の資料は、口縁部の区画文は渦巻文を取り込んだ横長の勾玉状になってはいるが、胴部は対向するU字形の区画沈線文が施されていて、上半は頸部文様帯の名残とも見える。これと似た形態、意匠の土器として第83図の屋外埋甕1の968、遺構外出土の1019などがある。

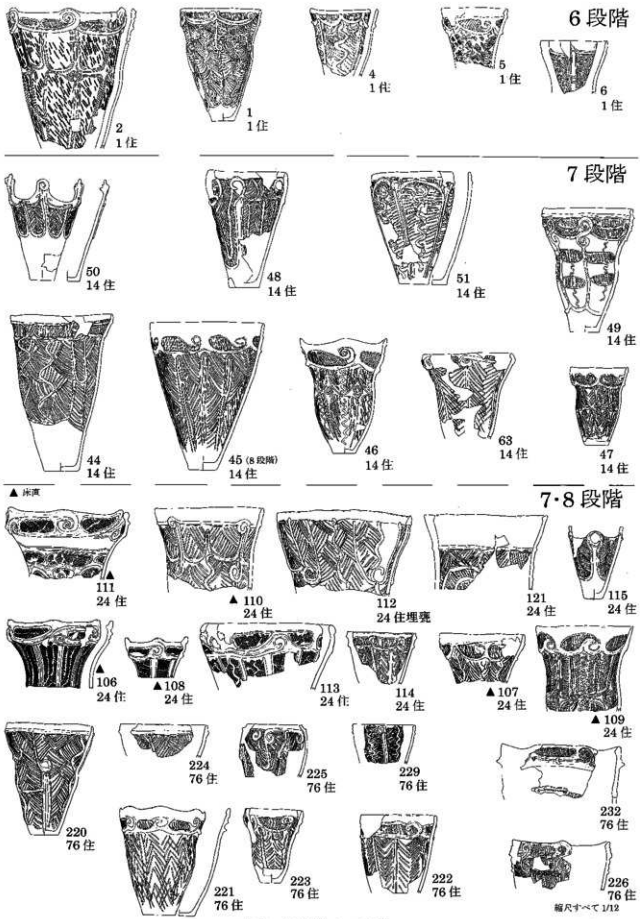
沈線文を地文とする土器は竪穴住居跡SB1（第84図上段）の様相を見る限り、加曽利E式系統と同様に口縁部は渦巻文を取り込んだ区画文になり、1・4ともに胴部の縦位区画や蛇行文はいずれも隆帯文である。土坑SK36出土の424（第83図）などは胴部に唐草文を配している。これも当該期の資料か。

次に量的に増えるのが、7段階と8段階である。郷土遺跡土器編年では、その区分について7段階は加曽利EⅡ式（新）、8段階はEⅢ式（古）に対応するとしている（EⅡ式・EⅢ式いずれも「加曽利E式埼玉編年」ー筆者註)。

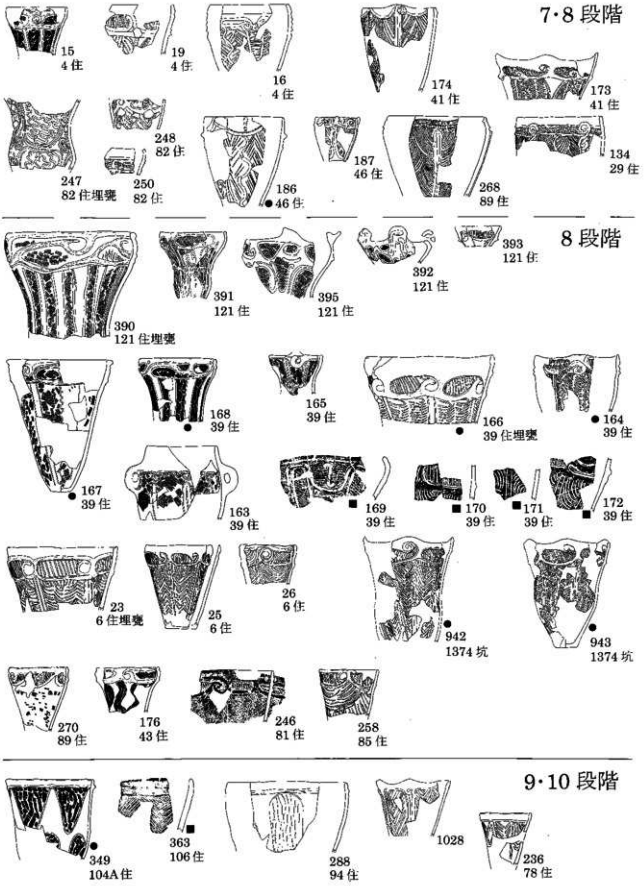
郷土編年ではこの7段階と8段階の間に大きな画期を認めるのであるが、郷土遺跡の竪穴住居跡出土資料では両段階が混在して出土していることが多い（第84図下段・第85図上段)。しかし、吹付遺跡や平石遺跡の住居跡出土資料でも7段階と8段階それぞれだけの資料も見られ、郷土遺跡でも以下のような事象を根拠に分期することには賛成である。

まず、加曽利E式系土器の様相であるが、7段階とされる竪穴住居跡SB4の15（第85図上段）やSB24の106、108（第84図下段）の加曽利E式は胴部の磨消縄文の磨消部分が、8段階の竪穴住居跡SB39の167、168やSB121の390（第85図中段）の胴部磨消縄文の磨消部分に比べて狭い特徴がある。口縁部文様帯の区画も前者の渦巻文は口縁部の区画文に取り込まれているが、まだはっきりしているのに対し、後者はもはや渦巻文というよりは小さな楕円区画と化している。また共伴する7期の基準資料であるSB24床直資料（第84図下段106、107、108、109、110、111）に含まれる大木式系土器（第84図111）と8期の基準資料SB121住居覆土一括資料（第85図中段）の大木式系土器（392）とでは、型式学的に後者が新しく位置付けられるという（水沢氏ご教示)。以上のような様相はやはり時間差と捉えるべきあろう。

鱗状短沈線文土器の様相を見てみると、7段階の資料は加曽利E式のような口縁部文様帯をもつキャリパー形深鉢は曽利Ⅲ式に見られる田の字区画が見られる（第84図下段SB24の109)。これは直前の段階とされるSB1の2（第84図上段）の胴部縄文地文で田の字区画をもつ土器の、縄文地文の部分を鱗状短沈線文に転化させたものと理解できる。またSB24の107（第84図下段）資料のように隆帯を垂下させ、胴部を縦位に区画する資料が見られる。口縁部文様帯を持たないバケツ形の深鉢も隆帯で区画し、鱗状短沈線文を充填する土器（第84図下段SB24の110・112・115）がある。SB14出土資料（第84図中段）も45を除



第84図 郷土遺跡 6～8段階



縮尺 ■印は 1/8，無印は 1/12，●印は 1/18

第85図　郷土遺跡 7～10段階

いた土器は、44、63は隆帯で区画し、鱗状短沈線文を充填する深鉢であるし、46・47は田の字区画内を鱗状短沈線文で充填するキャリパー形の深鉢であり、SB24と同様な組成を示す。

これに対して、8段階はSB6（第85図中段）のように器形はキャリパー形とバケツ形の区別がなくなり、胴部は縦位の区画沈線内を鱗状短沈線文で綾杉状などに充填する土器（23・25・26）で構成される。これらは明らかに時間差を示すものと理解したいが、一方文様帯レベルの変化は加曽利E式的な器形であるキャリパー形土器は、いずれも口縁部文様帯を作り出し、頸部文様帯はない。胴部も基本的に縦位に区画する点では共通しており、佐久地方の様相としては7段階と8段階の間に大きな画期を置くことには首肯できないが、この画期の設け方はあくまで、鱗状短沈線文土器の変遷に関してだけであるので、いろいろな立場がありうる。

9・10段階（加曽利E4式）（第85図下段）

郷土遺跡では遺構が減少する。加曽利E式系統の土器が散見されるだけである。当該期の良好な資料を含む佐久市吹付遺跡や小諸市三出原遺跡群、岩下遺跡群でも加曽利E4式期は加曽利E式が圧倒的に多い。無論、沈線文で区画内を充填するという手法の土器がいくつか見られる（1028、94住288、78住236など）ので、あるいは鱗状短沈線文土器の「なれの果て」とも考えても良いと思われるが、これらについては呼称の問題も含めて、次項で検討したい。

3　駒込遺跡出土鱗状短沈線文土器の編年上の位置

郷土遺跡出土資料をもとに構築された郷土編年を筆者なりにトレースしてみた。これを佐久地方や同じ千曲川流域で隣接する上田・小県地方の資料によって検証し、加曽利E式系、曾利式系、唐草文系土器の編年と対応させたのが、第5表の編年表である[2]。

周辺地域の資料でも、概ね郷土編年の各段階に対応するような住居跡などの遺構一括資料が見られる。よって、当該期の細別や画期の認識については多少異なるが、郷土遺跡報告書の編年（以下郷土編年）観を概ね支持したい[3]。

ただし、鱗状短沈線文土器の編年は、とくに段階を設定する場合加曽利E式神奈川編年を用いると理解しやすいため、筆者の大枠は同じ加曽利E式の段階設定に準拠する場合でも、加曽利E式神奈川編年によっている。以下とくに断らない限り加曽利E式の区分（アラビア数字）は神奈川編年の呼称である[4]。

郷土編年を軸とした佐久地方中期後葉の編年に照らし合わせると、駒込遺跡出土の土器は第5表のとおりになる。以下土器の説明は、第4章および第5章の記述と一部繰り返すが、時期順に概観する。

駒込遺跡中期後葉Ⅰ期：郷土編年4・5段階（加曽利E2式期）

竪穴住居跡SB04（第12図）、SB11（第15図）、溝SD03（第42図）、遺構外の一部の土器（第43図1～5）

溝SD03出土の朝顔状に開いた無文口縁部の土器（第43図1・2）は、胴部が欠損しているため厳密な比定が難しいが、口縁部内側に若干折り返す特徴から、郷土編年4・5段階（加曽利E2式平行）の曽利Ⅱ式の深鉢形土器と思われる。

竪穴住居跡SB11の深鉢形土器（第15図1～5　同一個体）は口縁部文様帯には窓枠状に隆帯区画が施され、矢羽状沈線が充填される。隆帯渦巻文は独立している。頸部は無文で、胴部には縦方向の羽状縄文が施される。これも郷土編年5段階（加曽利E2式新）。共伴している（第15図6～12）の土器は曽利式や唐草文系土器の影響を受けたか範疇の在地の土器と思われ、この時期に存在してもおかしくない。SB04の深鉢形土器（第12図1）も口縁部に平行隆帯で区画をつくり、胴部には平行沈線で頸部との区画をなす。また胴部は同様な平行沈線文の縦位区画が見られる。これもSB11同様郷土編年5段階に対応するものと思われる。

遺構外から出土した第43図1～5も、大体当該期（郷土編年4・5段階）の土器と考えられる。1・2は口縁部が朝顔状に開く深鉢形土器で、連弧状の沈線文あるいは斜行沈線文が充填されている。曽利Ⅱ式か。3・4もほぼ同時期の曽利系土器だろう。5は口縁部に窓枠状の隆帯区画文が施され、矢羽状沈線文が充填される。頸部は無文である。系統はともかく同じ時期の資料だろう。

駒込遺跡中期後葉Ⅱ期古段階：郷土編年6段階（加曽利E3式古）

駒込遺跡D類土器（第81図）

D類（口縁および胴部が隆帯で区画されるバケツ形の深鉢形土器）が郷土編年6段階に該当すると考えられる。D類は郷土遺跡竪穴住居跡SB1の1・4（第84図）の胴部は隆帯で区画され、鱗状短沈線文が充填される土器と類似した意匠であり、口縁部の渦巻文が横長の楕円区画とは比較的独立しているので、6段階に含めた。ただ、6段階が明確に7段階と区分できるかなど、その具体的な様相については今後さらに検討せねばならないだろう。

駒込遺跡中期後葉Ⅱ期中段階：郷土編年7段階（加曽利E3式中）

駒込遺跡A・B・C・E類土器（第81図）

V17・18グリッドなどで集中して出土したA類（口縁部文様帯は幅広で肥厚しており、胴部はU字ないし逆U字形の区画沈線文が縦位に配置され、鱗状短沈線文が充填される深鉢形土器）、B類（肥厚した口縁部文様帯はA類に似るが、胴部は鋸歯状の斜行沈線文が充填される深鉢形土器）、C類（口縁部がやや内湾し、胴部は刻目を有した隆帯文で縦位に区画される深鉢形土器）、E類（頸部有文鉢形土器）が郷土編年8段階に対応すると思われる。

A類の胴部は沈線文による田の字区画文が施され、鱗状短沈線文が充填される。口縁部は平縁あるいは緩い波状口縁のものがある。口縁部の渦巻文は横の陰刻風の区画と一体化しつつあり横長の勾玉状になる。こうした特徴は郷土編年7段階の基準である竪穴住居跡SB24（第84図下段）床直一括資料の109と基本的に一致する。

B類のような胴部に長めの鋸歯状の沈線文を施す意匠は郷土遺跡では類例がない。ただ、口縁部文様帯の区画文は渦巻文を取り込んだ横長の勾玉状になっていることから当該期に含めた。

C類は胴部を隆帯で区画し、鱗状短沈線文で充填するが、同一意匠のものは郷土遺跡には見当たらない。隆帯内の意匠は胴部下半が欠損しているので分からないが、あるいは田の字区画になるかと思われる。おそらく曽利Ⅲ式の影響と思われる田の字区画の意匠は郷土編年6・7段階に見られるもので、胴部には浅い刻目をもつ隆帯の区画文があるが、隆帯は断面がカマボコ状の緩いものであること、口縁部の隆帯渦巻文が横長の区画と一体化しつつあることを考えると7段階に含まれると判断した。

E類の鉢形土器は、変化の乏しい形態で、他の遺跡でも時期を決定するような遺構一括資料に欠けるが、胴部上半の横長の区画文が、ともに渦巻文を取り込んだ形であること、刻目隆帯の鉢形土器の隆帯は断面形が緩いカマボコ状でC類の深鉢形土器の様相に酷似する。よってこれらE類はとりあえず7段階に含めた。

さらに遺構外の加曽利E式系土器（Ⅱ群土器）も以下のような特徴をもつことから7段階に含まれると判断した。

① 口縁部文様帯の渦巻文は楕円区画文に取り込まれて横長の勾玉状を呈す（第56図62・64・66など）
② 隆帯文で区画するもの（第56図62～72）と凹線文で区画するもの（第57図73～79）がある。
③ 胴部は縦位区画の磨消縄文が施され、無文部と縄文施文部分の範囲は同じくらいのもの（第56図62・65・第57図74）や縄文施文部分がやや広いもの（第58図87・91・92）がある。87は縦位蛇行沈線が施される。

これらは縄文中期埼玉編年（谷井ほか　1982）でいうＸⅡ期に相当する。縄文中期埼玉編年を加曽利Ｅ式の細別に対応させると加曽利ＥⅡ式中～新段階にあたることになる。加曽利Ｅ式神奈川編年の細別ではおおよそ加曽利Ｅ３式の中段階となる。

おおまかに胸込遺跡出土の加曽利Ｅ式系土器は中期後葉Ⅱ段階とされた鱗状短沈線文土器の口縁部の意匠（渦巻文を取り込んだ区画文）や文様帯構成（頸部無文帯がなく、胴部は基本的に縦位に区画する）などに共通性が見られる。縄文中期埼玉編年ＸⅡ期にも、こうした文様帯構成で地文が縄文ではなく、沈線のものが見られるので、矛盾はしない。

渦巻文を取り込んだ区画文（本稿では槐長の勾玉状区画文と呼ぶ）は、縄文地文のもの、沈線地文のものともＸⅡ期の新しい段階（ＸⅡｂ期）とされるが、駒込遺跡の鱗状短沈線文土器に見られる田の字区画のものはＸⅡ期の古い段階（ＸⅡａ期）に位置付けられているので、多少齟齬がある。

ただこの点は、地域色の問題やそもそも駒込遺跡の資料自体に時間幅があることも想定せざるを得ないので、他の遺構一括資料といった良好な層位的な事例で検証していくなかで明らかになろう。

駒込遺跡中期後葉Ⅱ期新段階：郷土編年９・10段階（加曽利Ｅ４式）駒込遺跡Ｆ類土器（第81図）

口縁部文様帯はなく、口縁直下に平行する沈線で区画されるだけである。胴部は細長の楕円区画沈線文と逆Ｕ字文が縦位に区画され、矢羽状の短沈線文が充填される。時期的な位置付けは郷土遺跡では良好な一括資料はないが、佐久市吹付遺跡の４号・９号住居跡や望月町平石遺跡２号住居跡が、この段階の資料で、加曽利Ｅ４式と共伴しているので、Ｆ類をここに含めた。

時間的な位置付けはともかく、Ｆ類の区画内充填の沈線文は鱗状短沈線文土器に含めるべきかどうか、判断の迷うところであり、本遺跡ではその前段階の土器群の流れを汲むものとしてとりあえず鱗状短沈線文土器（Ｉ群土器）に含めたが、どこまでを鱗状短沈線文土器とするか、型式として把握すべきかについては次節で考えてみたい。

第４節　「郷土式土器」は成り立つか

鱗状短沈線文を地文とする土器に注目しこれを百瀬忠幸が「佐久系土器」（百瀬1991）と名付け、その後、桜井秀雄によって「郷土式土器」として把握すべき可能性も指摘されている（桜井2000）ことはすでに研究略史で触れた。

本稿では、「佐久系土器」という呼称があまり適当ではないことは、筆者も同感ではある。そこで装飾的な特徴である「鱗状短沈線文を充填ないし地文とした土器」（略して鱗状短沈線文土器）という分類を本書の事実報告に用いている。

ただし、佐久地方にある「鱗状短沈線文を地文とする土器」ということを百瀬も「佐久系土器」の内容として用いている。しかし、これが規定された吹付遺跡では加曽利Ｅ３式新相平行以前の資料が欠けていて、百瀬もこの段階に相当する資料があるとは想定していながら、現在佐久地方にある「鱗状短沈線文を地文とする土器」は一般に加曽利Ｅ３式新相平行（郷土編年８段階）以降の資料を指し、郷土遺跡のような加曽利Ｅ３式古・中相平行（郷土編年６・７段階）にある地文が鱗状短沈線文である土器はこれに含まれないおそれがある。６・７段階も加曽利Ｅ式系統の土器より鱗状短沈線文土器が組成の主体をなすことは明らかであるので、これらを含めて「郷土式土器」といった型式名として把握すべきであるという桜井秀雄の指摘がある（桜井2000）。

縄文土器の型式とは、「一定の装飾と形態を持つ一群の土器であって、他の型式とは区別される特徴」によって設定される「年代差と地方差」の基準であり、逆にこうした要件をみたしている一群の土器を型

式の単位として認定することになる（山内1964）。

空間的な面では、たとえば百瀬が当初「佐久系土器」として指摘した加曽利E3式新相平行（郷土編年8段階）の鱗状短沈線文土器（第84図郷土遺跡SB14の45、第85図同土坑SK1374の942、943など）のようなキャリパー形深鉢の分布は佐久や上田・小県地方など千曲川中・上流域に見られる。7段階の田の字区画（第84図郷土遺跡SB24の109、SB14の46、駒込A類）や胴部隆帯区画（第84図郷土遺跡SB14の44）のキャリパー形深鉢や隆帯区画のバケツ形深鉢（第84図郷土遺跡SB24の110・112、SB76の220など）もほぼ同様な分布を示している（第86図・第6表）。ただし、大深山遺跡では主体は曽利式であるので、南佐久の北半が南限か。上田・小県地方も鱗状沈線文が主体であるという遺跡はないので、やはり北佐久地方を中心とした土器群といえよう。

年代的な変遷も無論、百瀬が想定したようにこの土器は突然現れたのではなく、この6・7・8段階に先行する古い段階（郷土編年5段階）にも鱗状短沈線文を地文とする土器は見られる。さらに、いくつかの器形があることが分かってきている。

5段階では口縁部がラッパ状に外反し胴部に隆帯の唐草文の深鉢（第83図郷土遺跡屋外埋甕3号の970、同屋外埋甕1号の971）や頸部無文帯をもち胴部には隆帯区画文のキャリパー形深鉢（第83図郷土遺跡単独土器5の980、屋外埋甕2号の969、屋外埋甕6号の973）がある。こうした意匠・形態のもののうち前者は、関東では曽利式系土器（谷井他1982）とか「大型甕形土器」として（曽利式と唐草文土器の）両者の文様構成が融合した土器（石塚1986）、信州では唐草文土器の一器種ととらえる人もいる（田中1984）。いずれにせよこれを現段階では鱗状短沈線文土器と呼ぶのはためらわれる。後者は加曽利E式的なキャリパー形深鉢であるが、胴部文様は唐草文（第83図973・969）、対弧隆帯文（第83図980）、梯子状沈線文（第83図282）で、これまた前者同様に曽利式や唐草文系土器の影響が大きい。やはり、これらは鱗状短沈線文土器の祖形と把握するべきなのだろう。

ただ、郷土編年6・7・8段階では、共伴関係などを検討すると鱗状短沈線文土器の変遷を大まかに追うことが可能である。郷土編年6段階は資料が少ないので、詳細は不明だが、頸部無文部が喪失し、胴部には縦長のU字形隆帯と垂下する蛇行隆帯との区画内を、鱗状短沈線文で充填する深鉢形土器がある（第84図郷土遺跡SB1の1・4）。

郷土編年7段階は、頸部無文部が喪失し、口縁部文様帯に直接胴部がつながるキャリパー形深鉢がある。これの胴部の意匠は沈線文の「田の字」状区画内を鱗状短沈線文で充填する（第81図駒込遺跡Ⅰ群A類、第84図郷土遺跡SB24の109、SB14の46）。深鉢にはこの他にも、口縁部文様帯はなく、隆帯のみで区画するバケツ形深鉢（第84図郷土遺跡SB24の110など）がある。

郷土編年8段階には胴部が沈線で縦位に区画され、矢羽状の鱗状短沈線文が充填されるキャリパー形深鉢がある。

また、これらにともなう鉢形土器（第81図駒込遺跡E類）や無文浅鉢（同G類）がある。

以上、時間幅として郷土編年で言えば祖形は5段階に求められ、6段階ではじまり8段階まで、仮に鱗状短沈線充填手法のものをすべて含めれば9段階程度まで続くことになる。

よって一応型式として成り立つ最低条件は一応クリアしているようにも思われるが、実際には、周辺の土器型式とどのように区別されるかも、非常に大事な問題となってくる。

やはりポイントとなるのは唐草文系土器や曽利式系土器とどう峻別できるかである。5段階は前述のように多少松本平や伊那谷の唐草文系土器と異なる様相もあるが、その文脈で理解できる。本稿でも5段階までは、系統性を踏まえた具体的な呼称はさておき、唐草文系土器、曽利式系土器、加曽利E式系土器に収斂させた。

問題は6段階以降であるが、まず唐草文系土器との対比であるが、郷土遺跡でも、松本平や伊那谷に直接対比できる資料としてはSB82の250（第85図）などが断片的に見られる。唐草文系土器の意匠が胴部に見られるSK36の424（第83図）も器形はちょっとおかしいが、唐草文の意匠を重視すれば、唐草文系土器とすべきかもしれない。大体三上の言う唐草文系土器Ⅲ期に該当しよう（三上1996）。時期については加曽利E式の編年観とも一致する。

鱗状短沈線文土器の定義の問題ともかかわってくるが、まず7段階のキャリパー形の深鉢（第84図郷土遺跡SB24の109、第81図駒込遺跡A類3、6、9、11）に見られる口縁部の形態、全体的に肥厚し、端部の無文部が非常に広く、横長の勾玉状区画文が陰刻風になるものもある。胴部は田の字区画を始めとする区画内を湾曲した短沈線・鱗状短沈線で充填する手法が見られ、佐久地方独特の様相である。さらにバケツ形深鉢もやはり口縁端部の無文部が幅広く、胴部の隆帯区画内はやはり鱗状短沈線文で充填されている（第84図郷土遺跡SB24の110、112、SB76の220）。この他駒込遺跡の例から有文の鉢形土器（第81図E類24、25）や無文の浅鉢（同図G類2）が鱗状短沈線文土器の主な組成をなす器種と考えた。

8段階はキャリパー形深鉢がバケツ形化してほとんど頸部のくびれがなくなるが、依然として口縁部の形態は前段階の様相（全体的に肥厚し、端部の無文部が非常に広く、横長の勾玉状区画文が陰刻風になる）を継承している。胴部は隆帯区画の手法はなく、いずれも沈線区画になる。口縁部下端から胴部を縦位に平行沈線などで区画し、鱗状短沈線文を充填する（第84図郷土遺跡SB14の45、SB76の221、222、第85図同SK1374の942、943）。おそらく7段階同様、鉢や浅鉢も組成に存在するものと考えられる。

本来「胴部の前面に展開する大柄渦巻文、その間隙を鎖描沈線による綾杉文とその変形文で充たす文様構成は、唐草文系と総称して呼ぶ土器群の最大の特徴である」（中部高地土器集成1979）ので、地文が半截竹管状工具などによるやや太目の沈線文である鱗状短沈線文土器とは破片でも大まかに区分はできる。

しかし、まだ位置付けが難しいものもある。例えば、唐草文系土器の主体を占めるタル形の深鉢が若干ある。前述したように松本平や伊那谷に対比できるようなものばかりでない。第84図郷土遺跡SB76の225、226、第85図同SB4の16、SB29の134、SB46の186、187、SB89の268などである。また、バケツ形ではあるが口縁部に無文部を持たないで、隆帯が口縁波頂部からU字状に懸垂し、やはり鱗状短沈線文を充填するものがある。これらも鱗状短沈線文を充填するという手法を重視すれば、あるいは鱗状短沈線文土器の範疇に加えるべきかもしれない。佐久地方にはあまり見られない土器で、まだ詳細な検討は行っていないが、上田・小県地方（たとえば上田市八千原遺跡A地区第18号住居址、B地区第7号住居址、真田町四日市遺跡24号住居址、26号住居址など）（久保田・中沢1991）（宇賀神・百瀬1990）に見られる土器と似た意匠である。これらは上田・小県地方の遺跡では「唐草文系土器」ととらえられている。

よって、これらはとりあえず佐久地方の鱗状短沈線文土器の組成にいれるかどうかは保留として、今後の類例の調査研究を待つことにする。

次に、曽利系土器との対比であるが、『縄文土器大観』（1988）では、郷土遺跡や宮平遺跡などの佐久地方の遺跡はいずれも「曽利式土器様式」とされる。具体的にどういった土器をさして曽利式といっているのかが不明である。たしかに曽利式の要素に起源を求められる部分もあるし、先述したように郷土編年5段階以前（曽利Ⅰ・Ⅱ式）は曽利式系土器が佐久地方でも加曽利E式系土器に拮抗している。駒込遺跡でも資料は少ないとは言え、同様な傾向が見られる。

鱗状短沈線文土器の様相を語るとき、曽利Ⅲ式以降の様相が問題であるが、曽利Ⅲ式とされてきたものの中に、本報告などで鱗状短沈線文土器としたものと似た意匠のものがある。例えば郷土編年の7段階に見られる「田の字区画」は曽利Ⅱ式からⅢ式の意匠とされる（末木1981、1988）。同じく7段階の口縁部文様帯がなく、あまりくびれのないバケツ形深鉢に隆帯で区画し、鱗状短沈線文を充填するバケツ形深鉢

は茅野和田遺跡（東44号住居址埋甕第100図の10）（佐藤・土屋1970）などにも見られる。8段階の文様構成（区画文様がある口縁部文様帯と、胴部には縦位平行沈線などで区画し、矢羽状沈線で充填する）もまた、曽利Ⅲ式に見られる意匠ではある（末木1981、1988）（長野県内の類例としては与助尾根遺跡第12住居跡写真図版33の2（宮坂1957））。

しかし、曽利式系土器の地文は、いずれも櫛歯状工具や箆状工具などによる条線であり、鱗状短沈線文土器の地文である半截竹管状工具などによる沈線とは区別することができる。

以上、詳細にではないが個別に見ていくと、佐久地方の鱗状沈線文土器が型式として設定されてこなかったのは資料が少ないというだけでなく、その装飾・形態・手法がすでに知られていた周辺地域の土器型式・土器群に見られるもので、あったことが型式として設定すべきかためらわれたことが伺える。

研究略史でも触れたように、『中部高地土器集成』(1979)においてようやく曽利式系土器に対比させる形で諏訪湖盆・松本平・千曲川水系の「唐草文系土器」として扱うことが主張されたのであり、熊久保式といった指標の遺跡名を冠した型式名は定着していない。

よっていわんや破片でみれば同じような沈線文充填手法が主体である唐草文系土器と分別すべきかどうか、さらには型式設定すべきなどとは思いも至らなかったのかもしれない。

また、縄文土器型式研究において、装飾における手法はその属性として認識しやすい上、断片的な資料からでも分析が進められることから重視されることが多いので、本報告のように「・・文土器」といった名称でお茶を濁しやすい。

しかし、押型文土器などの研究史に見られるように、ネガ楕円文土器は・・式、格子目文土器は・・式、楕円文土器は・・式というような土器型式命名法だとそれを併用したりする土器型式が無数に生まれることになり、やはり土器型式の設定においては、装飾手法や文様（広い意味での）は一つの属性にしか過ぎないことを確認したい。

よって今後、千曲川中下流域の中期後葉の土器編年を語る上で、これを「佐久系土器」「鱗状短沈線文土器」として、どういう呼称が妥当かはともかく、佐久地方の土器の系譜を追っていく研究の方向性自体は間違っていないと考えるが、「郷土式土器」というように型式名を冠していくためには、いくつかの問題点も残っている。

（1）　山内清男の縄文土器型式研究には管見の限り明言はされていないが、土器型式の本来の領域のなかでその土器型式がその時間的な変遷の中で一度たりとも組成の過半を占めていないようなものを、あえてその地域の遺跡名称を冠した「・・式」土器と設定するのは適当ではないと考える。郷土遺跡や駒込遺跡においては6段階から8段階の組成の中心は鱗状短沈線文土器であるので、今後さらに周辺の遺跡でも検証したい。

（2）　鱗状短沈線文土器の器種とされたものが、加曽利E式、曽利式、唐草文土器の組成の中に見られないのか。

（3）　各段階の分布領域[37]。

（4）　郷土編年5段階の土器様相の解明。どの器形や器種から鱗状短沈線文土器が発生していくのかその過程をどう理解するか。

（5）　郷土編年9・10段階（加曽利E4式期）の土器の様相の評価。この時期に存在すると思われるF類のような口縁部文様帯がなくなり、縦位の沈線区画内を短沈線文で矢羽状などに充填するものを本書の事実報告においては鱗状短沈線文土器に含めたが、実際問題曽利Ⅴ式や唐草文Ⅳ期の土器と峻別できるのか。

（6）　区別できたとして、9・10段階の鱗状短沈線文土器の流れを汲む土器を抽出し、郷土式と

して組成が成立しているかを含めて検証したい。現在の見通しとしては6段階（加曽利E3式古）から8段階までを（加曽利E3式新）の時間幅を鱗状短沈線文土器（「郷土式」）が示す時間的な幅と考えていて、9段階以降の佐久地方は基本的に加曽利E4式の範疇であると考える。

（7） 上田・小県地方など同じ千曲川流域の従来「唐草文系土器」とされた一群との区別、またそれらの土器群の位置付け。

また、こうした現象、加曽利E式、曽利式、唐草文系土器を始めとする中期後葉の土器群が相互に干渉しあって、また似たような形態的特徴を共有するのは、東日本全体を網羅するような規模あるいは汎日本列島的な規模で起きている現象と考えられ、そうした視点からの検証も必要であろう（水沢1996）（山形1996・1997）。

以上、課題山積であるが、これらについては他日稿を改めて再論したい。

註

1）ここに曽利系、唐草文系、加曽利E系という用語が見られるが、それぞれ曽利式系土器、唐草文系土器、加曽利E式系土器の省略であろうが、曽利式と加曽利E式を略して、式を抜くと「佐久系土器」などという呼称と紛らわしく、適当ではない。以下本稿ではとくに断らない限り曽利式系、加曽利E式系とする。また、本稿では、唐草文土器と呼ぶものは唐草文土器の意匠が見られるものに限り、その系統と考えられる複彩文などの沈線文地文の土器を総称するときは唐草文系土器とした。

2）土器編年表の加曽利E式神奈川編年各E2～4式古～新相の区分は、鱗状短沈線文土器など佐久地方の編年的配列を理解するための区分である。加曽利E式神奈川編年の各段階の様相と一致するかどうか未検討である。また、加曽利E式埼玉編年の各段階は（桜井2000）による。

3）郷土遺跡資料やその編年については、綿田弘実、水沢教子、桜井秀雄、広瀬昭弘の各氏には様々なご教示を頂いた。各氏の御助言などがなければ、理解は容易ではなかった。郷土遺跡中期後葉Ⅲ期・Ⅳ期の編年や住居跡出土資料の解釈については筆者独自の見解が含まれているので、『郷土遺跡報告書』（桜井2000）の内容とは異なる点がある。

4）佐久地方中期後葉の土器編年の枠組みに加曽利E式編年を曽利式や唐草文土器よりある程度重視せざるを得ないのは、当該地域の土器型式（この場合は鱗状短沈線文）の系統性を語る以前に、加曽利E式系の土器の出土が量的に多い点がある。よって郷土編年でも加曽利E式編年に対応させる枠組みとなっていると考えられる。

郷土編年では、いわゆる『加曽利E式埼玉編年』（谷井ほか1982）が用いられている。『加曽利E式埼玉編年』では『加曽利E式神奈川編年』（神奈川考古同人会ほか1980）の編年基準である「頸部無文帯の有無、口縁部文様帯の褪失、逆孤文土器の変遷等からだけでは、十分な区分の基準が得られ」ないとし、「総体的な土器群の実態的な変遷をもって、区分基準を設定し」細分（6段階8細分）をおこなっている。

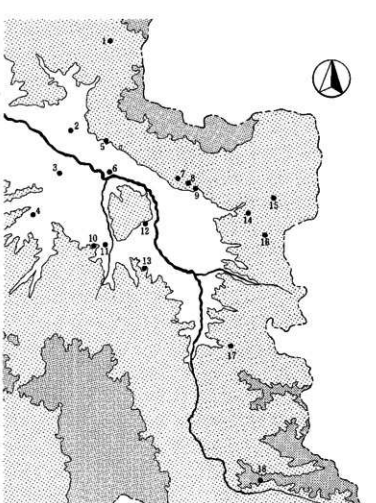
しかし、ここで筆者は加曽利E式神奈川編年に戻ってその大枠を用いているのは、縄文土器型式の編年の枠組みには器形と文様帯が他の型式を説明する属性の中でも、より決定的な要素であると考えるからである。

このことについて、詳しく述べている紙幅はないが、器形と文様帯は土器型式を理解する上で、きわめて有効な概念であることはすでに土器型式研究史上よく知られている。筆者の理解としては、土器の実際の使用段階で規定的な要素の第一は機能的な要素つまり器形であり、製作段階で意識されるのもまさに器形である。この器形に縄文土器は横方向に区画して文様が刷り付けられているが、これはまさに縄文土器が粘土紐を平行に輪積みすることによって作られているからである。

つまり製作技法と機能的な要請といった土器の性格を決定する2大要素に対応しているのが文様帯の構成と器形なのであるから、この2属性はより重要であると考えている。

実際、鱗状短沈線文土器の変遷といった型式学的な時間的段階を考える上で、特定の施文手法の多寡（縄文、沈線、隆帯など）などのアナログ的な属性より器形に対応した文様帯の変遷はよりデジタル的な属性であり、これに基づいた枠組みの方が段階の設定はしやすい（川崎1995）。

5）櫻水晋秀氏の御教示により犀川流域の信州新町下中牧遺跡第58号土壙から略完形（底部欠損逆位の埋甕）7段階「鱗状短沈線文土器」が出土していることを知った（松永1990）（犀峡高校地歴クラブ1991）。千曲川下流域や犀川流域に他の類例が存在することが予想され注目される。



第86図　東信地方鱗状短沈線文土器分布

第6表　東信地方鱗状短沈線文土器出土遺跡一覧

番号	市町村名	遺跡名	7段階	8段階	文献・備考
1	真田町	四日市	○	○	(和根崎・川上1996)
2	上田市	八千原	○		(久保田・中沢1991)
3	丸子町	中丸子		○	(上田小県誌1995)
4	武石村	江戸窪	○	○	(上田小県誌1995)
	武石村	岩ノ口	○	○	(上田小県誌1995)
	長門町	片羽		○	(上田小県誌1995) 1)
5	東部町	和下平	○		(福田1989) (東部町誌1990) 2)
6	東部町	桜井戸	○		(佐藤・黒1975)
7	小諸市	郷土	○	○	(桜井2000)
8	小諸市	岩下	○		(宇賀神2000)
9	小諸市	三田原	○	○	(宇賀神2000)
10	望月町	二平石	○	○	(福島1989・1991)
11	望月町	下吹上	○	○	(福島・森嶋1978)
12	浅科村	駒込	○		本報告書
13	佐久市	中村	○	○	(林・島田1983)
14	御代田町	宮平	○	○	(堤・本橋2000)
15	軽井沢町	茂沢南石堂	○	○	(上野・西田ほか1983)
16	佐久市	吹付		○	(百瀬1991)
17	佐久町	舘		○	(南佐久郡誌1998)
18	川上村	大深山		○	(南佐久郡誌1998)

以下の原報告は未見である。
1）長門町教育委員会1976『片羽遺跡』
2）東部町教育委員会ほか1975『広域農道県建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』

引用・参考文献

石塚和雨1986『結語　土器』『将監塚－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上田・小幡誌編纂委員会1995『上田・小幡誌第6巻歴史編上（一）考古』上田・小幡誌刊行会

上野佳也・西田泰民ほか1983『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』軽井沢町教育委員会

宇賀神誠司2000『岩下遺跡』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19－小諸市内－』長野県埋蔵文化財センター

宇賀神誠司2000『三田原遺跡群』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19－小諸市内－』長野県埋蔵文化財センター

宇賀神恵・石堀忠幸1990『四日市遺跡』真田町教育委員会

神奈川考古同人会ほか1980『シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題－とくに加曽利Ｅ式と曽利式土器の関係について－土器資料集成図集』

神村　透1999『私の姓は皆卑文、名は無し』『長野県考古学会誌』90

川崎　保1995『縄文土器の機能・用途と山線部文様帯の装飾・形態』『信濃』47-9

久保出敦子・中沢徳士1991『林乃郷・八千原』上田市教育委員会

小林真寿1995『岩山遺跡』佐久市教育委員会

屋峡高校地歴クラブ1991『土と石　お供平～下中牧』麻麦舎

桜井秀雄2000『郷土遺跡』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19－小諸市内－』長野県埋蔵文化財センター

佐藤　攻・関　孝一1970『桜井戸遺跡の調査』『信越線沿線・大屋間複線化工事事業地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長野県教育委員会

佐藤　攻・土屋長久1970『縄文式土器』『茅野和田遺跡緊急発掘調査報告書』茅野市教育委員会

信濃史料刊行会1956『信濃史料』第1巻

島出恵子・篠原浩江ほか1990『大旭遺跡』立科町教育委員会

末木　健1981『曽利式土器』『縄文文化の研究』4

末木　健1988『縄文土器入門』3中期Ⅱ　小学館

田中清文1984『伊那谷縄文中期後半土器編年への展開』『中部高地の考古学』Ⅲ　長野県考古学会

谷井　彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀雄・青木栄代子・金子直行・細田　勝1982『縄文中期土器群の再編』『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

中部高地縄文土器集成グループ1979『中部高地縄文土器集成　第1集』

堤　隆・本橋恵美子2000『宮平遺跡』御代田町教育委員会

堤　隆ほか1997『川原田遺跡　縄文編』御代田町教育委員会

東部町教育委員会1975『広域農道建設工事にともなう埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』

東部町誌編纂委員会1990『東部町誌歴史編（上）』東部町誌刊行会

長門町教育委員会1976『片羽遺跡』

野村一寿1988『中期後葉土器』『長野県史考古資料編　遺構・遺物』長野県史刊行会

八幡一郎1928『南佐久郡の考古学的調査』

八幡一郎1934『北佐久郡の考古学的調査』

山形真理子1996『曽利式土器の研究（上）－内的展開と外的交渉の歴史－』『東京大学文学部考古学研究室紀要』14

山形真理子1997『曽利式土器の研究（下）－内的展開と外的交渉の歴史－』『東京大学文学部考古学研究室紀要』15

山内清男1964『縄文土器・総論』『日本原始美術1　縄文式土器』講談社

林　幸彦・島田恵子1983『中村』佐久市教育委員会

福島邦男・森嶋　稔1978『下吹上』長野県考古学会

福島邦男1989『平石遺跡』望月町教育委員会

福島邦男1991『平石遺跡－第2次緊急発掘調査報告書－』望月町教育委員会

藤森栄一編1965『井戸尻』中央公論美術出版

松永満夫1990『下中牧遺跡』信州新町教育委員会

三上徹也1996『花上寺遺跡における縄文時代中期後半の土器様相』『花上寺遺跡』岡谷市教育委員会

水沢教子1996『大木8b式の変容（上）』『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター

水沢教子1998『縄文文化の胎熱－中期』『御代田町誌』御代田町誌刊行会

宮坂英式1957『矢石』茅野町教育委員会

南佐久郡誌編纂委員会1998『南佐久郡誌考古編』南佐久郡誌刊行会

武藤雄六ほか1978『曽利』富士見町教育委員会

百瀬忠幸1991『吹付遺跡』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2－佐久市内その2－』長野県埋蔵文化財センター

綿田弘実1988『北信濃における縄文中期後葉土器群の概観』『長野県埋蔵文化財センター紀要』2

綿田弘実1989『縄文中期後葉の問題　長野県』『縄文セミナー縄文中期の諸問題』雄山閣考古学研究所

綿田弘実1997『縄文土器について』『滝沢遺跡』御代田町教育委員会

和根崎剛・川上麻子1996『四日市遺跡Ⅱ』真田町教育委員会

第9章　成果と課題

第1節　はじめに

布施川の河岸段丘の先端に立地している駒込遺跡を今回の調査区は東西に横切った形になった。当初から「駒込」地名や五輪塔などの石造物が調査区に隣接していることから古代や中世の遺物や遺構が存在することが推測された。また、事前の試掘調査や表面踏査の段階でも縄文時代の土器や石器が採集されていることから、縄文時代の遺構や遺物の出土も期待された。

実際の調査でも、縄文時代中期から後期、古墳時代前期、後期、古代、中近世の遺構・遺物が検出された。以下年代順に概観しながら、各時代・時期の成果と課題に触れてみたい。

第2節　駒込遺跡の各時代・時期の様相

縄文時代：中期初頭の五領ヶ台式らしき資料（第42図4）が溝SD03より出土しているが、摩滅著しく、原位置を保っているとは考えられない。中期後葉の資料はまとまって出土している。本遺跡の遺物量の過半は当該期の土器・石器と考えられる。中期後葉は、土器の様相から古段階Ⅰ期と新段階Ⅱ期に大別した。竪穴住居跡SB04（第12図1）・SB11（第15図1～12）、溝SD03（第42図1～3）からは中期後葉Ⅰ期の資料が出土している。これに対してⅡ期はほとんど遺構外の資料で、V17・18グリッド周辺で大量に出土した（第44～60図）。これらは鱗状短沈線文を地文とする土器で、従来「佐久系土器」と呼ばれ、近年「郷土式土器」と呼称すべきという提案もある。詳細は第8章考察を参照されたいが、駒込遺跡の資料は今後当該期の類例として注目されよう。

後期は断片的に遺構外から堀之内式成立段階（いわゆる茂沢タイプ）（第61図1）、溝SD02から堀之内式期の注口土器（第40図1）が出土している。後期と確実に限定できる遺構はない。

敷石住居跡SB05は時期を決定するような遺物に欠けるが、古段階Ⅰ期のSB04を切っていることからあるいは新段階Ⅱ期あるいは後期前葉の遺構とも考えられる。

石鏃、石錐、打製石斧、磨製石斧などが出土しているが、遺構に伴うものは少ない。遺構外で出土した石器の大半が中期後葉Ⅱ期の土器が大量に出土したV17・18グリッドを中心とした遺物集中区で出土している。打製石斧が多く、石鏃は少ない。わずかに定角式の磨製石斧を含む点などから、これらの石器群の大半を中期後葉のものであると考えても矛盾はしない。

器種ごとに見た石器石材からみた石器の様相は、石鏃、石錐などの小型剥片素材の石器には黒曜石が多い。黒曜石の石核はもとよりチップも大量に検出され、石鏃（あるいは石錐）の未製品も出土している。黒曜石製の小型剥片石器は、遺跡内に原石が持ち込まれて、製作されているのであろう。石器石材に使われるような黒曜石は佐久地方には知られていないので、和田峠など佐久地方以外からもたらされたと考えられよう。黒曜石以外では、ガラス質安山岩、珪質頁岩、玉髄などがある。いずれも石核、未製品、チップは見られない。遺跡外の佐久地方の遺跡から搬入されたものか。ガラス質安山岩はその基質は緻密、ガラス質で光沢がある。わずかに長石の斑晶が肉眼でみることができる。浅間山麓の遺跡には多い石材であるが、駒込遺跡をはじめとする浅科村内の中期から後期の遺跡（筆者が管見した範囲では砂原、中平・田

中島、海戸田遺跡など）でも過半を超えることがないが、一定量出土する。佐久地方では八風山など上信山地に良好な露頭が知られている。

磨製石斧は、2点だけと少ないが、磨製石斧に対応するような砥石、未製品などが無いこと、石材も角閃岩かと思われるような広域変成帯に産出するような変成岩である。本遺跡から近い広域変成帯といえば南佐久から秩父地方に広がる関東山地であるので、あるいはこの地域から搬入されたものかもしれない。

破片まで含めれば1000点以上出土している打製石斧類は、板状節理が発達した安山岩、粘板岩・千枚岩、ガラス質安山岩、頁岩、砂岩・硬砂岩、結晶片岩製のものがある。これらの石核はもとより石核になりうるような原石はなく、破片もいずれも完形品が破損したもので、製作段階の剥片は見当たらない。遺跡外から搬入されたと考えられる。

石材の様相をまとめると第3紀以降と第3紀以前の石材に大別される。第3紀以降の石材では、板状節理が発達した安山岩は「鉄平石」と呼ばれ望月町などで産出する。ガラス質安山岩は前述した八風山付近に露頭が知られる。頁岩は石鏃に使用されるような緻密なものではなく、硬いが粗粒で脆い。第3系の頁岩か。先第3系の石材では、粘板岩・千枚岩、硬砂岩、結晶片岩があるが、南佐久を含む関東山地に見られる。

弥生時代：浅科村内では、確実な弥生時代の資料は極めて少ない。本遺跡でも該当する資料は検出されていない。

古墳時代：浅科村では、砂原、中平・田中島、土合の各遺跡で前期初頭に位置付けられる竪穴住居跡などが検出されているが、これらの遺跡では古墳時代前期初頭に連続する時期の遺構が無かった。本遺跡では、前期後半に位置付けられる土坑SK074や遺構外からも当該期の土師器（第63図1・2）があることが注目される。しかし、竪穴住居跡などは検出されなかったので、詳細な様相はわからない。このほか遺構に伴ったものではないが、中期に降るような資料（第63図3・4）があるので、本調査区周辺に当該期の遺跡がある可能性が高い。

後期はカマドを有する竪穴住居跡SB03・SB10が検出されているが、浅科村内でも後期には古墳や集落遺跡が増加することに対応しているのかもしれない。ただ、古墳時代を通して全体に遺物量は少ない。

古代：奈良時代末から平安時代初頭（8世紀末～9世紀初）のSB06、平安時代前期（9世紀末前後）SB01、(10世紀代）SB09の各竪穴住居跡が検出されている。11軒掘立柱建物跡（ST02～11）が検出された。掘立柱建物ST10とST11、ST04とST05、ST06とST07は隣接して、それぞれ軸や辺が揃う。

伴出した遺物で詳細な年代を決定できる資料に欠けるが、竪穴住居跡SB12・13に伴う焼土集中は、あるいは製鉄関連の遺構とも考えられる。遺物包含層などから出土している鉄滓、炉壁や被熱変形土器などもこれに関係する遺物だろう。

こうした変形あるいは発泡した土器については、小島正巳ら（小島・早津1996）の研究がある。小島によると新潟県新井市東関遺跡などで変形、発泡した土器が出土している。小島は①一次焼成時に過度の温度上昇によるもの。②火事などの偶発的な二次焼成。③未知の使用法のための意図的な焼成のケースを考える。当初は、縄文土器の失敗作（①のケース）とも考えたが、製鉄関連遺構や鉄滓の検出から②のケースとするのが無難と考えた。しかし、②の偶発的な二次焼成にしては、数がまとまっていることから、縄文土器を製鉄や鍛冶に意図的に利用した可能性、つまり③のケースに近い状況も考えられはしないかという指摘を受けた[11]。これについて可否を判断する資料も見識もないが、今後、十分検討に値するものと考えられる。

古代の集落域全体を調査し尽くしたとは考えられないが、おそらく小規模な集落が細々と続いていたのであろうか。遺構外の資料もおおよそ遺構の年代に対応していて、11世紀以降の資料はないので、10世紀

代の竪穴住居跡SB01が埋没したあとは集落としては廃絶したものと考えられる。

中近世：多くの柱穴と考えられる小土坑、井戸、石組、溝が検出された。小土坑は古代か中世かを判別するものが難しいものが大半であるが、中世の遺物を含むものがいくつかある（SKなど）。遺物は、13・14世紀代は龍泉窯系青磁碗、古瀬戸卸皿、古瀬戸平碗、在地系須恵質擂鉢が井戸SE01や土坑から出土している。15・16世紀代は土師質皿、内耳鍋などが土坑SK062・063から出土している。

北宋銭などの銭貨の初鋳年は日本の年代でみれば、平安時代に属するが、長野県内でも大半の出土渡来銭貨が中世の遺構に伴っている（宇賀神ほか1999）ので、ここでは中世の遺物として扱った。石臼、五輪塔などは中世後期の所産か。

確実に中世に抑えられる遺構は少なく、中世の様相は分からない点が多いが、井戸跡が存在する点や遺物に内耳鍋、擂鉢、石鉢、石臼、卸皿などは佐久地方では佐久市観音堂遺跡（森泉かよ子ほか1999）など中世一般集落に見られるものだけに、本報告では古代に属するものとしたカマドが検出されなかった竪穴住居跡SB02、SB07や一部の掘立柱建物跡が実は中世のものであるか、あるいは調査範囲に隣接して中世の集落域が存在する可能性があると考えられる。

あきらかに近世・江戸時代と限定できる遺物は少なく、図化できたものは18世紀代の瀬戸美濃系擂鉢と寛永通寶だけで、これらも原位置を保っていたものかわからない。近現代に宅地造成される際に表面はかなり造成されてしまっているので、こうした時期の資料は残らなかった可能性もあるが、宅地造成以前は畑であったことからも、居住域ではなかったようである。

第3節　今後の課題

前節で概観した駒込遺跡の各時代の成果を踏まえ、以下の点を今後の課題とする。

（1）　駒込遺跡出土縄文土器の大半を占める中期後葉の縄状短沈線文地文土器（いわゆる「佐久系土器」「郷土式土器」）のさらなる型式学的な分析と編年的位置付け。

（2）　大量に出土した打製石斧をはじめとする石器群の岩石学的な石材の分析。

（3）　今回調査した範囲周辺に古墳時代前期や中世の遺構（おそらく集落域）が展開すると思われるので、当該期における本遺跡のより詳細な性格の解明が待たれる。

註

1）柳沢　亮氏の指摘。

引用・参考文献

宇賀神誠司ほか1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1－軽井沢町内・御代田町内・佐久市内・浅科村内－砂原　中平・田中島　土合ほか』長野県埋蔵文化財センター

川崎　保1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書20－東部町内－真行寺遺跡群・中原遺跡群ほか』長野県埋蔵文化財センター

小島正巳・早津賢二1996「発泡土器について－新井市東関遺跡からの報告と類似報告の紹介－」『新潟考古』7

森泉かよ子ほか1999『岩村田遺跡群観音堂遺跡』佐久市教育委員会

第10章　結　　語

本書は、平成10年から11年にかけて発掘調査した結果がここにようやく報告書という形で記録保存されることになった。遺跡は河岸段丘のやや傾斜した部分に立地していたこともあったためか、遺構の遺存状況はあまりよくなく、また礫混じりの粘土質の土壌が、雨ではぬかるみ、乾燥すればひび割れカチカチになるという状況の中で、発掘調査にあたられた皆様のご苦労は一方ならぬものであった。

農道の建設工事が迫りながらの発掘で、スペースの問題もあり、駐車場、プレハブ、テント、仮設トイレなどの設置場所や飲み水や遺物洗浄のための水道にも苦労したが、幸いなことに地権者の方ほか周辺の皆様のご理解が得られて、なんとか確保することができた。

それでも、遺跡の敷地内での遺物洗浄には限界があり、洗えない遺物は浅科村教育委員会のご厚意で同村福祉センターの使用を認めていただき、ここですべて洗い終えることができた。

駒込という遺跡の名前からは、浅科村から北御牧村・望月町にかけて広がっていたと考えられる「牧」関連の資料や遺構も期待されていた方も少なくなかったようである。残念ながら直接的に牧にかかわるような遺物や遺構は特定できなかったが、牧があった同じ時代の古代・中世の遺物・遺構が検出された。今回の調査区周辺にも同じような遺跡が広がっていたことが予想される。ただ、近世の遺物・遺構は極めて少ない。昭和に宅地造成される前は畑だったとのことで、中山道が開かれた時に、桑山などの集落の多くが街道沿いに移ってしまったことを反映しているのかもしれない。

また、遺構の遺存状況は良くなかったが、調査の最後の段階で、多量の縄文土器が出土し、いくつもの完形土器に復元された。これらは復元作業の工程のなかで、脆い土器を樹脂によって含浸し、整理作業員の根気強い努力による接合作業で、形になったものである。

その結果、当地の縄文土器を考古学の型式学的な方法で分析をすることができた。破片からでも土器型式の分析は十分可能であるが、やはり形になったものから教えられることは少なくない。従来は南の八ヶ岳山麓の文化と東の関東地方の文化との狭間的な位置付けであった佐久地方にも独自の縄文文化が栄えていたことが見えてきた。

縄文時代中期後葉（今から約3500年前）の佐久地方独自の文化は、人々が魚の鱗のような模様がある土器（鱗状短沈線文土器）で煮炊きをし、安山岩や粘板岩という佐久地方に多く産出する石材を利用した石製のスコップ（打製石斧）で土を掘る（耕す？）ことを特徴としている。

今後は、こうした人たちの生活の様子をさらに研究することによって、浅科村のみならず、佐久地方の縄文人の特色が見えてくるであろう。

発掘調査によって考古学的な研究が進む反面、記録保存という形ではあるが、実際の遺跡はこうした開発行為によって失われていくことになる。よって、不十分な点も多いとはいえ、発掘調査をし、洗浄、注記、接合、復元、遺物実測、写真撮影、資料の分析、現場の実測図の見直し、製図、報告書の執筆、印刷などなど・・。金銭・時間・労力がこの報告書と発掘資料に費やされるのである。是非一般にも広く公開され、活用されていくことが望まれる。

文末ながら報告書刊行にあたっては様々なご配慮を頂いた長野県佐久地方事務所、浅科村、浅科村教育委員会をはじめ関係機関、発掘調査、整理作業にかかわった皆様にはとくに感謝いたします。

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書

センター番号	書名	収録遺跡	刊行年度
①長野線1－岡谷市		大久保　大洞　中島A・B他	1986
②長野線2－塩尻市1		御堂垣内　上木戸　吉出向井他	1987
③長野線3－塩尻市2		吉田川西	1988
④長野線4－松本市1		総論	1989
⑤長野線5－松本市2		神戸　上二子　中二子	1988
⑥長野線6－松本市3		下神	1989
⑦長野線7－松本市4		南栗	1989
⑧長野線8－松本市5		北栗	1989
⑨長野線9－松本市6		三の宮	1989
⑩長野線10－松本市7・豊科町		北方　上手木口他	1988
⑪長野線11－明科町		北村	1992
⑮長野線12－坂北村・麻績村		向井六工　古司　子尾入他	1993
⑯長野線13－長野市1・更埴市		鳥林　塩崎城見山砦他	1993
⑰長野線14－長野市2		鶴前	1993
㉕長野線15－長野市3		石川条里	1997
㉖長野線16－長野市4		篠ノ井	1996
⑪上信越1－佐久市1		下茂内	1991
⑫上信越2－佐久市2		栗毛坂　西赤座　枇杷坂他	1990
⑬上信越3－長野市1		大室古墳群	1991
㉗上信越4－長野市2		松原－縄文－	1997
㉘上信越5－長野市3		松原－弥生・総論－	1998 ～99
㉙上信越6－長野市4		松節－古代・中世－	1999
㉚上信越7－長野市5		北平　大星山	1995
㉛上信越8－長野市6		村東山手	1998
㉜上信越9－長野市7		小滝　北の脇　南山田	1998
㉝上信越10－長野市8		川田条里	1999
㉞上信越11－長野市9		春山B　春山	1999
㉟上信越12－長野市10		榎田	1998
㊱上信越13－小布施町・中野市1・2		清水山古窯他	1996
㊲上信越14－中野市3・豊田村		対面所他	1997
㊳上信越15－信濃町1		旧石器1・2	1999
㊴上信越16－信濃町2		縄文	1999
㊵上信越17－佐久市3・小諸市1		宮ノ反A他	1998
㊶上信越18－佐久市4・小諸市2		芝宮　中原他	1998
㊷上信越19－小諸市3		岩下　郷土他	1999
㊸上信越20－東部町		真行寺　桜畑他	1998
㊹上信越21－上田市・坂城町		陣場塚　宮平　東平他	1998
㉙上信越22－更埴市1		清水　大穴	1996
㉚上信越23－更埴市2		屋代木簡	1995
㊺上信越24－更埴市3		更埴条里・屋代・森河原－縄文	1999
㊻上信越25－更埴市4		同上－弥生・古墳	1997
㊷上信越26－更埴市5		同上－古代1	1998
㊾上信越27－更埴市6		同上－古代2・中世	1999
㊿上信越28－更埴市7		同上－総論等	1999
⑥上信越29－佐久市		香坂山	2000
㉑新幹線1－佐久市他		金井城　砂原　中平　出中島他	1997
㉒新幹線2－上田市・坂城町		国分寺周辺他	1997
㉓新幹線3－更埴市		更埴条里　屋代	1997
㉔新幹線4－長野市1		石川　篠ノ井　築地他	1997
㉕新幹線5－長野市2		浅川　三才	1997
㉖野尻バイパス－信濃町		西岡A　貫ノ木	1997
㉗あづみの公園－穂高町		穂高古墳群	1996
⑱長野大町線－美麻村		千見　米山	1993
⑲中野盆野線－中野市		栗林　七瀬	1993
⑳土口バイパス　更埴市		屋代	1999
㉘県単農道　浅科村		駒込	2000

※丸数字：センター報告書番号（刊行順）
長野線：中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書
上信越：上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書
新幹線：北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書

写真図版

平成10年度調査
部分（南東から）

平成11年度調査
部分（南東から）

平成11年度調査
部分（南西から）

左：SB01
右：SB02

左：SB03
右：SB03
カマド

左上：SB04
左下：SB03・
04・05
右：SB05

左上：SB06
左下：SB06

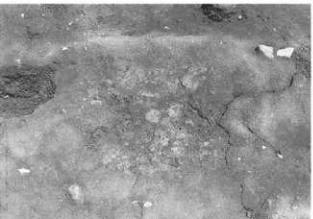
右：SB06
カマド

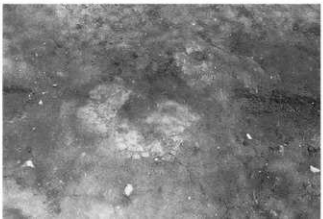
左上：SB07
左下：SB07
右：SB08

左：SB10・11
右：SB11

SB12・13

左：SB12・13
右：SB12・13
土層断面





左：SB13・SF1
右：SB13・SF2

SE01　検出時

左：SE01　完掘
右：SE01　断面

左：SE02　完掘
右：SE02　断面

PL 6

左：SD01　断面
右：SD03　縄文土器出土状況

左：SK074 土師器出土状況
右：V17　縄文土器出土状況

左：V17　縄文土器出土状況
右：作業風景

左：試掘トレンチ
右：現地説明会

1・2 VI8
グリッド
3~6 VI7
グリッド

1

2

3

4

5

6

PL 8

縄文土器 1 ～ 3
1　V18 グリッド
2・3　V17 グリッド

土師器 4 ～ 6
4　SB03
5・6　SK074

石製品 7 ～11
7・8　石臼
9・10　石鉢
11　五輪塔

1

2

3

4

5

6

7

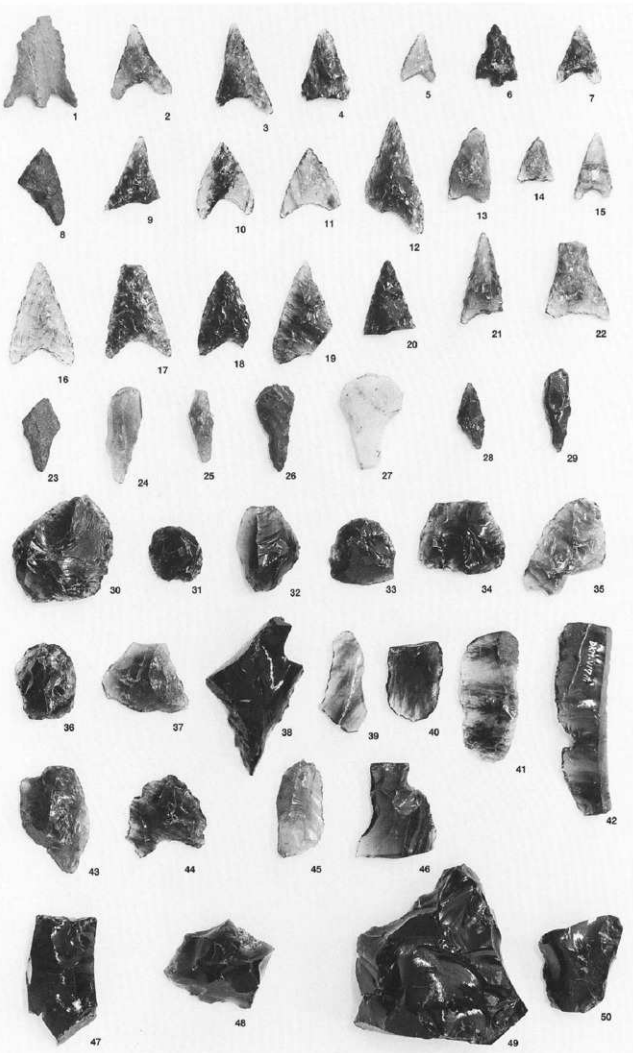
8

9

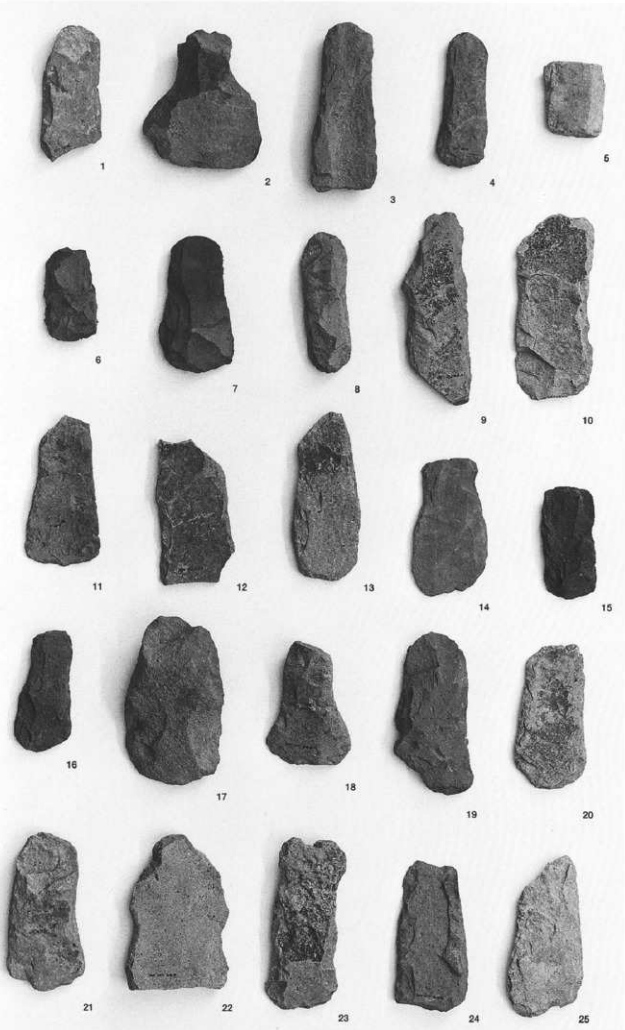
10

11

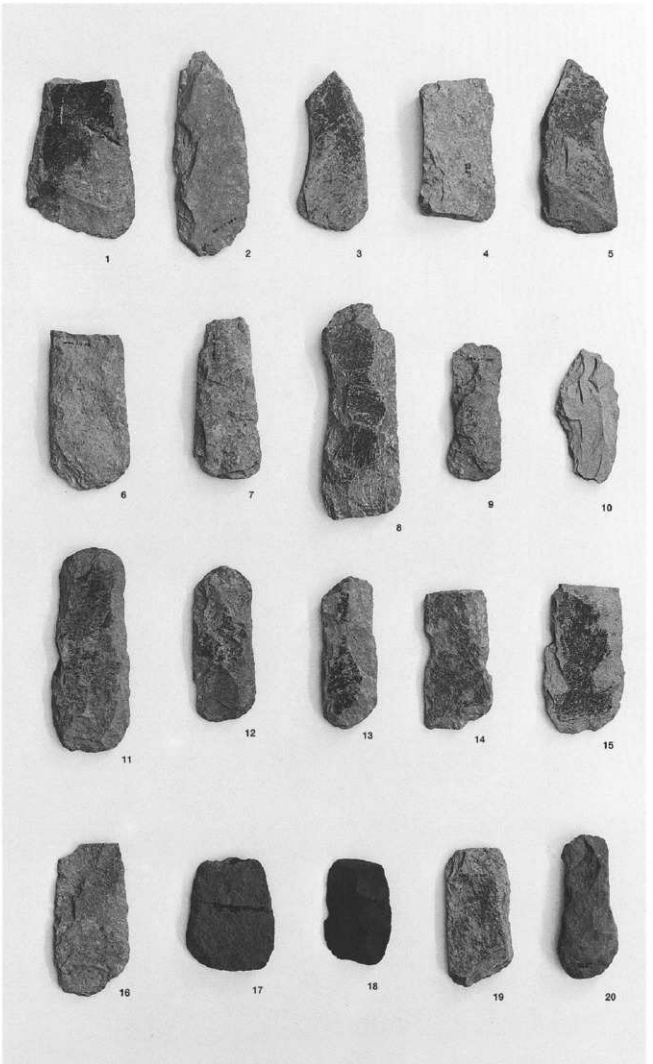
1～22　石鏃
23～29　石錐
30～38　RF 類
39～46　UF
47～50　石核



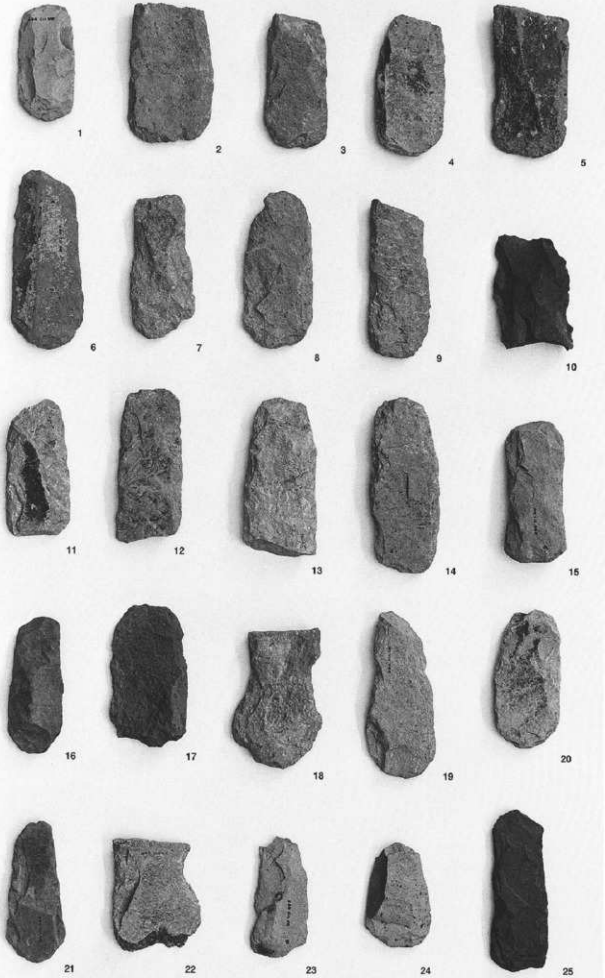
1～25
打製石斧



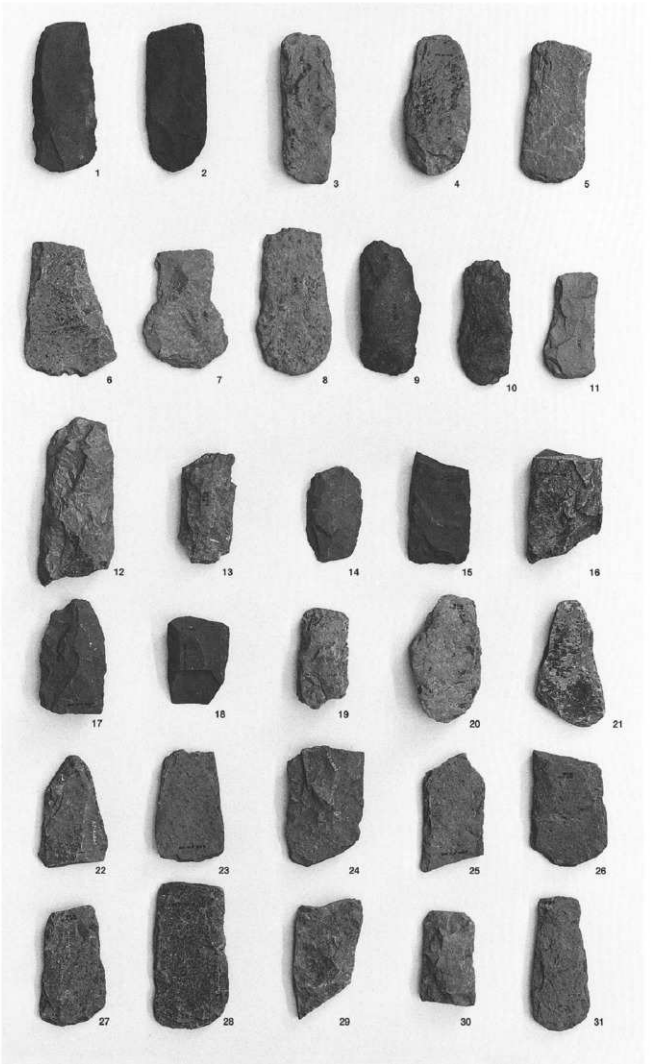
1～20
打製石斧



1～25
打製石斧



1～31
打製石斧


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31